

北辰會雜誌

北
辰
會
雜
誌

第
六
十
五
號

謹みて

先帝陛下の御登遐を

哀悼し奉る

第四高等學校北辰會

哀悼之辭……………

露西亞文學に現はれたる滑稽(講演)……………(一) 迷羊生

隠れたる一面(感想)……………(六) 鳴澤生

斷章(詩)……………(二六) 井田生

浮世繪(創作)……………(二八) 池田南渚

史的警句集……………(四五) 浦井生

二夕色の我(歌)……………(五六) 山本白聲

秋雨と笛と(創作)……………(六〇) 慶王生

Das Bild des Kaisers(翻譯)……………(七〇) 笥生

靈的革命と肉的革命(評論)……………(八七) 佐藤曙汀

四高短歌會詠草……………(九二)

徒然(感想)……………(九六) 井口白汀

利根川の邊(紀行)……………(一〇二) 小原生

かすかなる聲(歌)……………(一〇六) 井田虎男

呪(感想)……………(一〇八) 平泉澄

四高俳句鈔……………(一一二)

至誠と活動(講演)……………(一一五) 佐藤大佐

故郷の友に(感想)……………(一二〇) 平泉澄

扉(歌)……………(一二三) 佐藤曙汀

文科大学より(通信)……………(一二三) 尾崎生

本郷の一角より(通信).....(二五越) 藤生

叙任辭令.....(一三〇)

北辰會日誌——卒業證書授與式——遙拜式——始業式

——行軍——桃山御陵參拜——部報

編輯を終へて.....(一八〇) 井田生

北辰會費決算書.....(一九〇)

寄贈書籍.....(一九二)

露西亞文學に現れたる滑稽

迷羊生

(北辰會講演大意)

人間の中には智の勝つた者と情の勝つた者とある。智の人と情の人とは物事の觀方が違ふ、情の人は、眼前に起つた事件の渦中に捲込まれるから、夫に對して憐憫を感じ同情を寄せるが、智の人は、其事件から一步離れて、傍觀者の地位に立つてそれを冷靜に觀察することが出来る。後者の態度を採れば、事々物々の缺点が眼につき易い、缺点が眼につけば、その人には本能的に「笑」といふ生理心理的の現象が起る。この態度の相異は、同一の人が智の眼と情の眼との使ひ別をしたとしても同様である。要するに「笑」は「智」を出發点とする、笑と情とは兩立しない。但し茲に「笑」といふのは、眞正の滑稽的の事である、或る人間は、哲學者から「笑ふ動物」といふ名をつけられたのを好い事にして、要も無いのに矢鱈に笑を濫用する傾があるが、茲ではそんな僞の笑は取扱はぬ。滑稽的の笑は元來餘り性質の善くないものである、これには彼奴を一番回ませてやらうといふたくらみが内々含まれてる、併しそれと同時に彼奴を匡正してやらうと云ふたくらみも含まれ得る。人生又は社會を觀察するに方つて、斯くの如き眞正の「笑」を最も深刻に且つ最も有効に發する者が偉大なる滑稽文學者である。ユーモリストは諷刺家をも兼ね易い。

露西亞の文豪ニコライ・ワシリエキッチ・ゴリ(1809—1852)は、近世露西亞文學の開山であると同時に歐洲文學に於ける寫實主義の先覺者として世界文學史上に不朽の名を留めてゐる偉大な

る文學者であるが、この人は元來滑稽作家として非凡な天分を有つて居た人である（「露西亞のデイクケンズ」）。

全體人間は誰でも笑ふものとは承知してゐるが、予は露西亞人だけは笑ひさうもない國民であると獨合点して居た、併し後になつてそれは誤解だといふ事が解つた。けれども斯の如き誤解を抱いてたのは予ばかりではない、現に英國あたりの紳士の中にも露人と云へば陰氣な氣六ヶ敷しい一方の國民だと信じて居る人が澤山あるらしい。英人ベアリング氏はこの誤解を除く爲めに數多の價値ある書物を著はして居る。氏は、露國人が陰鬱その他これに類する性質を有する事は勿論だが、彼等は之れと同時に謂はゞ明るい極めて快活なる一面をも有して居る、即ち露人と雖「笑」を解するといふ事を力説して居る（笑の本質は是れを哲學的に分析すればメリシナスなものではあるが世には笑は葛藤調停の第一歩として通用する）。

ゴーゴリは露西亞國民文學の建設者であるが、露國國民性の一面たる「笑」も、ゴーゴリの作物の中に、初めて而して最も好く現はれて居る。

ゴーゴリは自重心の強い人で、多作はしなかつたけれど、その代り世に現れたものは、長篇小説「死せる靈魂」喜劇「検査官」を始めとして何れも金玉の文字である。又その作物中には傑作「タラス・ブルバ」(小説)の如く殆ど滑稽分子の無いものもあるが、大抵の作は「笑」を以て始まり「笑」を以て進行してゆく、而してかくの如き作が常に「涙」を以て終るといふのがゴーゴリの作品の尊い所以である。次にゴーゴリは何を笑つたか何故に笑つたか又如何に笑つたかを調べる心算だが、

その前に先づ彼の滑稽作者としての代表的作物の梗概を話さう。

短篇小説「外套」からはじめよう。これはペテルブルグの中等社會の生活を寫したもので、アカキ・アカクエキチ・バシユマチキンといふ或る役所の書記が主人公である。彼は年四百ルーブルの薄給で明けても暮れても寫字をして居る。元より無能ではあるが、人と爲り温厚篤實で、職務には極めて忠實、五十の坂を越えて若い同僚達の嘲笑の對象となりながら浮世の事には一切頓着せず、平氣の平左で寫字を唯一の職業と崇め又これを唯一の娛樂として居る、寫字の他には側目もふらない。然るに多年着古した外套が、洋服屋から今度こそは逆も修繕の見込無しとの宣告を受けたので、已むを得ず爪で火を點すやうな儉約をして外套を新調する決心をした。是に於てバシユマチキンの注意は其の外套に集中され日夜空想に耽る、その爲めにさしもの寫字の天才も始めて字を一字書きがちがへたこともあつた。が兎に角苦心慘憺の末漸く願がかなつて、新しい素晴らしい外套を着ることになつた。同僚は眼を丸くする、自分は天へでも昇つたやうな心地である。處がその着初きぞの晩に上官の誕生の祝宴に招かれ、珍らしく微醉機嫌で歸る途中、道を間違へてまご／＼して居ると、そこへ追剝が出て生命から二番目の件の外套を強奪された。訴へると一顯官から却て大眼玉を食ふ、臆病なバシユマチキンはその歸途熱病に罹り、それが病付で到頭死んでしまつた、彼の死はペテルブルグ市にも又役所にも何等の影響をも及ぼさない。彼は後に化けて出て例の顯官の外套を奪ひ彼を改心させた。これが「外套」の梗概である。「外套」は短篇小説でこそあれ當年の露國文壇に大革命を起させ、それ以後の露國小説の作風に甚大な感化を與へた渾然たる大

藝術品で、今日の世界文學が有する最も傑れた滑稽小説の一つだとの定評がある。(次に「イワン・イワノフキチとイワン・ニキホローキチとの喧嘩」及び「検査官」の詳しい梗概を話したが茲には省略する。前者は小露西亞の田園生活を描いた滑稽小説で「外套」と比肩する傑作、後者は露國官吏社會の暗黒面を描寫した五幕の散文劇で世界有数の喜劇と激賞されてゐるもの)。

ゴーゴリは喜劇や滑稽小説を書いた、けれども彼は滑稽な事實を捏造したのではない、彼は自己を傍觀者の地位に置き、智の眼を開いて、在りのまゝの社會人生を冷やかに觀察し、そして恰も例のベアリング氏が或る著書の序文中に自分の著作の態度に就いて述べてゐる如く、「肉眼で觀た實世間の人々の正確な真正な記録」を讀者の眼前に提供したのである(彼の初期の作物には多少傳奇的臭味あり)、而もゴーゴリのやうな聰明な文學者が、かくの如き態度を採つて缺陷の充満してゐる外界に對する時、事件も人間も悉く喜劇的色彩を帯びる。實世間の人間は、自分は何れも極めて賢明なつもりで、自分が最も善しと信じて居る事を爲しつゝあるのだが、ゴーゴリのやうな嚴肅な人格の人から、正義を標準にした鋭い眼光で觀られると、隨處に背理が露出する。ゴーゴリは「検査官」の扉(タイトル・ページ)に「鏡を怨むなかれ罪は汝自身の醜貌に在り」といふ意味の露國の俗諺を掲げて居る。これは、彼の創作の態度を明にしたものだが、この諺の中に彼の「笑」もあれば又それと同時に「涙」もある。彼の滑稽物には開卷第一頁からして笑がある、その笑は讀むに従つて愈擴がる。が讀者は、一行一行に腹の皮を捻り人物の一舉一動に嘲笑を浴せかけ乍ら、それでゐて、その人物に深い同情を寄せずには居られない、而して結局は涙に終るのである、讀

者が北境地に導かれるのは、全くゴーゴリの辛辣な嘲笑の背後に「見えざる涙」(プーシキンの言)が隠れてゐるからである。ゴーゴリは勿論理想派の作者ではない、彼は積極的に道義を鼓吹することを嫌つた、けれども、現實を忠實に描寫した彼の滑稽的作品の裏面には、辛烈骨を刺す如き極めて嚴肅なる倫理批評が潜んで居る。人は可笑しいから笑ふと云ふ、併し乍らゴーゴリの笑はしかく單純なものではなかつた。彼は社會の暗黒面をあばき、人間の缺點を遠慮會釋なく摘出して大に笑つた、猿の冠を被つてゐるのが滑稽だから笑つたのである。けれどもこの「笑」には人に反省を促さうとする匡正の善意が含まれて居る事を忘れてはならない。見える涙は女子供でも流す、眞の「見えざる涙」はゴーゴリの如き偉大なるユーモリスト・サチリストの専有物である、これあるが爲めに、彼の「笑」彼の「滑稽」には萬代不滅の光輝が存するのだ。(悲哉當時の露國官憲露國民は、鏡を怨んで自己の醜貌を呪はず、ゴーゴリの嘲笑に憤る事のみを知つて彼の「見えざる涙」を看取することが出来なかつたのである)——因曰、「見えざる涙」の最もよく現はれてる作品は「外套」である。

佛國現代の大哲學者ベルグソンは或る著書の中にユーモリストの説明をして、「滑稽文學者は科學者に變裝せる道德家也、而もその科學者たるや吾人に不快嫌惡を感せしむるを唯一の目的として解剖を行ふ解剖學者に似たり」と言つて居る。我がゴーゴリはユーモリストの此の定義を體現したものでなからうか。

(附記——本稿は予が十一月二日に北辰會の演說會でやつた講演の大意である。喋れば三時

間位、書けば原稿紙五十枚ばかりのものを、たつた八枚に縮めたものだから、さらぬだに不完全な内容は猶更見る影もないものになつてしまつた。こんなものを印刷に附するのは勿論予の本意ではない。

隠れたる一面(感想)

鳴澤生

(一)

慾望より追求へと果てしもなく轉々してゆく人間の生活から表はれて来る複雑な陰影の凡てを細密に味つてゆくと、其處に發見せらる、二重情調——極めて淺薄なる表面的の強烈な匂ひと、より深奥なおつとりとした鉛の様に重い潜在味と——は私等に凡て俗に言ふ感傷的な又は上つた人間の感情といふものを裏切つた鋭い味を提供してくれる。そして冷たい理智の眼を開いてなほも恣に眺めてゐると慾求の争闘や、何物かを脱却しやうとする努力が、この陰になつた一面に様々な色をなしてうごめいてゐるのを知ることが出来る。こうした点について近頃無限の興味を感じるやうになつた。動き易い人間の感情といふものは、この表面的の光彩にそのまゝ眩惑されてしまつて、直ちに其渦の中へ没頭しやうとする傾がある。深く潜むだ別種の色調を鋭く感得しやうなどゝはかけても及び難いのであつた。

徒らに行雲を仰いで當てもなく迷ふてゆく Wanderer の瞳が、ふと惡い色をした草花に捉へられた時には、引き寄せられる様に詰め寄つてゆく。そして其の困憊しきつた肉体と情調とに調和してゐる草花の色彩と形姿とが、何處までも沁々と味はれるのであつた。彼は自分の胸底に強い共鳴を感じた部分へ、自分のあらゆる同情と興味とを投げかけてゆく。其の時彼の内心は此草花を取り巻いてゐる情趣と稟圍氣との間に流れてゐる陰になつた部分を捉へることが出来なかつた。上つ面のみを走つてゆく彼の鑑賞には、此の内部にひそむてゐるローマンスを探索することが出来なかつた。

是れと同じ様に、微細な衝動に出會つた時無智の民衆は惜し氣もなく己れの感情をさらけ出してゆく。然しこうした雜駁な平面的な考へを抱いてゐる多くの群集を嘆するよりも先づ、稍ともすると知らず知らずの中に只生活の一面のみを見てゆかうとする傾の起つてくる自己の安價なることに、深い悲哀を感せずには居られない。

(二)

今更ら慾望を追求する生活が極めて茫漠たる不安なものであるといふことを、事新らしく言はうと欲するのではない。また消滅し易い幻影に執着してゆく憐れなる群集を冷評しやうとするほど餘裕のある生活に這入つてゐる自分でもない。けれども幾つかの幻影に欺かれつゝ猶ほも「緊張せる生活」といふ浮雲の様なものを憧憬の對稱としてそれが實現にあせつてゆく人達が遂に吾が探求すべき生活は、かけ離れた高峯のあなたに控へつゝ、無智なる人間の燥心を嘲笑して居る

のに氣がついた時始めて今更らの様に現實に目醒めて知つた悲哀なごゝ喪心してゆくのを見る度毎に、かうした果敢ない奥行のない人間生活が泌々情けなく感じて来る。そして毒を含むだ蛇の様
様に執念深い「感情の裏切り」が内心に棲生してゐる平つたい人間の内心に深い悔恨を感せずには居られない。

吾等の生涯は要するに盲目の長旅である。捕捉し難き空な「緊張生活」といふ無上なる權威に引きずられて慾求の對象を求めやうとあせりあせりて進みつゝも、遂に何の得る所もない。とかういふ事實の經過で然し吾等は絶えず自分の到達の楷梯とせんが爲めに作つたものと、自分のLebenとの間に、痛々しい隠れたる矛盾を發見せねばならぬ筈であるのに、私達の眼底にはこの事實が只路傍に見出さるゝ、名も知れぬ雜草としか觸れて來ずに、只事もなく空過してゆく場合が多いのである。一直線に窮極の生活を目にかけて進むでゆく吾等は此路傍に起りつゝある人生の一事實が其他面に於て、吾等の所謂窮極生活に向つて、緊要なる要素を提供せんとしつゝあるかを考へず、又それが自己と深い深いところに交渉を保つてゐることを考へずに淺薄な目を以て淺薄の思索を以て、凡てかゝる現象と對してゆかうとする。

一切を隔絶した架空的な「充實生活」といふことは、畢竟どこまでも架空的であらねばならぬ。少なくとも人間がもつと一事實に對してより深い同情と觀察とを與へない限り、人の窮極生活は矢張り浮雲のやうな漠然たるものでなければならぬ。

(三)

闇の中に彼等互に呼び交すとき。

その聲は慰となるべし、

されど彼等は痲痺したり、

背は弓なりに頭重く、

傍には動かざる燈火あり。

この人はさながら黒き影の集まるに似たり

その眼は

濕り勝ちなる重苦しき狭霧のかなたに達くべくもあらず

されば磁石のごとく心を誘ふ星の不可思議光

天上にありとも

彼等はそれを知るよしもなし。

闇黒の苦患に包まれし漁夫

かれ等は葬の鐘の音に

また目もといかざる遠方に失はれたる人々ならずや

霧けき秋の夜は、

彼等が單調なる心のうちに嘆けり。

(Verhaeren作「漁夫」より。白村氏譯)

暗より闇へ埋没されてゆくべきかうした人生の痛ましい事實が現に世界の何處かに嚴として實在してゐる限り、人間は自己の生活内容を形成してゆく上に於て、又窮極の幻想生活に進むでゆく上に於て、當然こうした事實を没却し得べきものでないと同時に、又一步より深く内部的解釋をしてゆくべきことを要求せられて居るのである。即ち *Wubekant* に生る *Wubekant* で死むでゆく運命を持つた悲惨な老漁夫の面影を只平靜な気分になつて研究してゆく時と、もつと強力な視力を以て眺めてゆく時とに於て見出さるゝ差異的の味は、やがてかの凡俗生活中にも、ある種の潜在味が伏在してゐる事を示して居るのだ。

然し、只何といふことなしに漠然と人生といふものゝ平面を見下した時、直ぐには表はれて來ないが陰影になつた所に働いてゐるかうした生活の一味を、凡ての民衆は果してどれだけの銳利な觀察を以て見てゆくであらうか、再び繰り返して言ふが落付のない淺薄な感傷に生きてゆく人達の瞳孔には、人生の幾多の努力と争闘と悲哀とを蓄積してゐる深酷な意義を、單に人生より振り捨てられた一個の塵埃としか映つてゆかないのである。吾々の長くもない生涯で、個々の微細な現象に對して、一々深く探求してゆく餘裕を有つてゐない、といふあの幻影にしひたげられてゐる一部の人間は、遂に人生の素通り者でなければならぬ。

自然派の藝術が唱導された以來、藝術と生活との間には没すべからざる交渉を起して來た。そして彼等藝術家の創作に表はれて來る自然と人生々活とが、只何の氣もなき白色味を持つてゐるといふ事實は、近代科學の進歩したる説明と改革を重ねて來た人間の頭腦とが既にあの一面的

描寫——若し妥當でない此言葉が許されるとしたなら——の陰のない文藝を以て慄然なく思ふに至つたといふ原因に歸するのではあるけれど、もつと積極的に醒めたる新人はすでに一面の人生を以て満足することが出來なくなつて、却て此奇もなき平坦な生活味から、つとめてより深い潜在味を發見せんとした努力の結晶に外ならぬと思はれる。現在の文藝が益々この点に深い基礎を持つて來たといふことは、やがて人間の鋭い内的慾求が、この凡庸な事實から曾て齎されなかつた或物を發見せんが爲めに絶え間ない努力を續けてゐるといふことを意味する。かくて新文藝の事業はまさしく人生の二面的解釋に歩を進めて來たのである。

(四)

伴れる感情の力よ、安價なる表面的の人生よ。

慾望の追求につかれ果て、求めて得べからざる緊張の生活に深い自己中心の悲哀と悔恨とを投げかけつゝ、いつの間にか其ミソウの摩すべからざる嚴然たる偉力に讓歩してゆく人達を見る毎に、私はいつもトルストイの極めて深みのあるそして人生といふものゝ強い解釋者たる八十年の生涯を思はざるを得ない。當時の宗教の意味が彼の唱導しやうとする無我的教義と個々の心靈の絶對的尊嚴を認めた教義とにあくまで厭足らなく思はせたあの宗教的煩悶のために、光榮ある人生を極めて消極的に辿つて行つたといふあの隱遁的生活を贊美しやうとは思はない。又其宗教的見地から來てゐる所の一種のナイヒリステックな主張を賞讃しやうとは更に思つてゐない。然るに彼が私の見解に力強い共鳴を持ち來してくれる所以は、畢竟彼が暗面的に動いてゐる人生

の活動に對して、凡ての孤獨と憂愁とを超越してまでも其解釋者救濟者たらんとした一事である。

人も知るごとく彼の後半生は全く孤獨な生涯であつた。隱遁味を帯びた農民的生活である。この中で常に其主張を保持してあくまでも周圍と戰つた。私は彼れが確信してゐた解釋にどこまでも執著して止まなかつた其一種の稟然たる偉力に、惜しげもなく賞讃の辭を呈するれど、此偉大なる孤獨の精靈の晩年に對して、憐みを捧げるといふ心持ちにはどうしてもなれない。意氣地もなく困憊と壓迫とにしひたげられて、知らず／＼妥協生活に這入つてゆく民衆の多くよりもむしろ潔き人生の隱遁生活を主張せずには居られない。

彼が最後に「世の中には苦むのである者が數限りもなく在るのに、なせお前達は私にばかり氣をどられてゐるのか。」と言つたあの殆ど悲痛の感をそゝる言葉をきいて、私は彼の宗教的解釋の如何に論ずるよりも先づ其信仰が如何に徹底してゐたかを強く想はせらるゝのである。然し彼が隱遁の動機で突込む宗教的見解もまたは其鐵をも熔かさんはかりなる内心の煩悶も、畢竟彼が最も強き人生の暗面探求者であつたといふことに歸著すると思ふ。

もつと普遍的に、あらゆる眞味なる深酷な信仰や、近代の凡ての人生問題の解釋を是れに求めてゐるあの科學の力を無視して高く止つてゐる動搖なき信仰や、此等のものは常に此人生の二面的觀照者に俟たねはならぬ。或國民に表はれてゐるがごとく宗教を一個のコンベンションと見做してゐる風や又は極めて皮相なる解釋を以て、——所謂伴はられたる感情の力を以て——動きな

き信仰を貪つてゐる心持ちによつて容易に達せらるゝには、宗教は余りに無情であり余りに深遠であつた。

(五)

私は好むで近代人の抱いてゐる悲哀のアンダーカレントは凡て一種の甘い歡樂で成り立つてゐるといふがごとき、また凡ての民族のいはゆる上ずつた感情の根底には、是れと矛盾したる或種の性質が横たわつてゐるといふがごとく極端に論じやうとは思はない。然し誰かの言つた様に

新らしい思想を抱く人々にとつて、古い道徳や古い習慣が一種の束縛であると感ずる様に、慾望を追求してゆきつくもさて此慾望の満足と其慾望の満足より生じて來るものとの關係に於て痛々しい何物かの存在がある。即ち吾々の生活には慾望の追求といふ事實があると同時に、其慾求を満足させる爲めに自分の作つたものとの間に悲痛なる矛盾がある。そして此物によつて人は絶えず嚴しい束縛を感せさせられてゆくものである。

といふがごとき生活味が存在する以上、吾々はどうしても人生の事實に對して其表面的のみに拘泥せず、進むで其の内面的の意味や陰影になつた所に存する別種の色調を發見せずには居られなくなつてくる。

其人は猶ほも進むでかう言つてゐた。

都會生活に對する人間の憧憬と、都會生活其れ自身の有してゐる惡魔のやうに清い暴力とは激しい矛盾を生むのであるが、なほ一歩進で考へたなら要するに人間の作成したるものは、其

物を作成したる人間自身の個性の權威を恣に蹂躪して余りあるやうな魔力を有するに至る。單なる一個の都會といふものを抽象的に考へて見た時、及び人間の創作したる凡てのものを鑑賞してゆく時には、すでにかうした顯著なる二重意義が存在してゐるではないか。都會生活を渴仰の對稱と見做してゐる人には、かゝる生活の中に實際凡ての人々の憧憬を裏切る所の極めてテランカルな力が潜むでゐるといふことに気がつかない。吾が本能の切なる求望により、幾多の犠牲を拂つてまでも獲得し實現されたものは、直ちに吾慾求の満足であると同時に、すでにそれを意識した刹那より知らず／＼の中に自己の生活には悲しい拘束が起つてゐるのである。然し吾々が、此撞著味を帯びてゐる内面的意義に到着した時、さて其後に於て人生に齎すところのものは如何なる性質を帯びてゐるかは兎に角として、文明も理想も其發足点はどうしても此点に於て求めなければならぬと斷言することが出来る様に思はれる。

(六)

「立派なもの、背後には何時も何かしら悲惨な影がさす、纔か一輪の花が開く時にも天地は其爲めに苦まぬければならないのだ。」と言つたオスカーワイルドの言には此意義に於て私には考へさせらるゝことが多かつた。

人生執着の念、生の享樂といふことはどうしても人間の全我を支配する唯一の最も力強い觀念であらねばならぬ。茲に死といふことを意識せなかつた人は絶無であつたとしても、然し果して彼等は死の實在といふことについて眞個の思索を遂げたことがあるかどうか、——生や死の問題

は人間に最も接觸した當面のものであるたげに、單純な日常生活の小事に比すれば、比較的に人の内心は突込むだ解釋を要求してゐる——然しこれは醒めたる眞面目な新人についていふことであつて、大部分の俗衆は矢張り生の明るい光彩にどこまでもすがつてゆかうとする。充實せられたる本能、高潮の生活、かういふ場合に無智の民衆の極く不眞面目なる心は、只漠とした刹那的情調に没頭して、冷酷に彼等の頭上へ覆ひかぶさつてゐる廣い問題を解かうともせず臆病な生活を送つてゐる。華やかな眩惑する生の光彩は此復歸しがたい黒幕を表はさうともしない。凡ての悲劇を裏つけてゐる深遠なる背影に崇高なる尊嚴の心を捧げ、凡ての自然を色ざる美なる草花の眞意義に早くも自分の衷心を注ぎかけて何の躊躇をも拂はなかつたオスカーワイルドの態度に對して、今更らに自分は嘆賞の叫びを洩らさざるを得ない。(完)

凡そ詩的性情の人によく見るやうに、彼れは無知の人々を愛した。彼れは無知なる人の魂には常に大なる想念の宿るべき場所のあることを知つたからである。

——オスカーワイルド「獄中記」

小さき人は、特に詩人は、如何に烈しく彼は言葉をもて人生を離するかな。彼れに聽け。されど其の總ての彈劾に食まる、樂欲を聞き漏らすことなかれ。

——ニーチェ語錄

斷章

井田生

寧樂の汀さんへ

×
手紙を懐にして出た春の夜の街、
第一のポストを過ぎ
第二のポストを過ぎ
第三のポストの前に立つた時、
手をやれば、まだある。

×
私は到頭入れないで歸つたあの時の
美しい燈の光りをおもふ。

×
道問へど、
答へで過ぎし旅の小娘の
伏目がちに染めし頬の赫きはにかみ。
京を桃山にいそぐ
鶯かけし夏の朝ぼらけの我が旅姿を描きなどする。

×
川底に沈みゆく落葉の冷たき運命、
濁江に浮き重なる朽葉の汚れたる運命、
何れや我れと似かよへる。

×
世にすねた
世を冷やかに見る
世をおそれる
種々な眼が、ツイくと
町を飛ぶつばめの如く、胸をかすめ行く。
更けわたる初冬の夜の物思ひ。

×
繪絹も裂いた
紅筆も捨てた
畫工を止めやうと思つた今、
私には何等の執着もない。――
得道の人があるのやら

後ろの寺ではしきりと鐘が鳴る。

×

渚を通る海女の兒の足の裏の白さよ。
砂の上に濡れた身体を投げて

碧い海づらを眺めて居ると

ポーと汽船が波止場にさしかゝる。

「母の懐に入るが如くに」といふ歌を
思ひ出させる暮夏の夕べ。

×

空車をひいて下りて行く尻垂坂、

快い轍のひゞきと、氣味のいゝ足どり。

歩調を合せて歩いて行く私の

頭の上の美しい鱗雲の一ひら。

×

氣まぐれに投げた小石が

ピョッ／＼と古沼の水の上を走る快さ。

思はず微笑んだ夏の夕べのそいろ歩きに……

辭書を汚せる指跡の淡きかなしみ、
堪へかねて、暫し繰らでありしわが凝視を掠めて
つと走り寄る

秋の夕べの蜻蛉の羽の影の寂しさ。

×

禿山の土の上に

顔をかき

歌をかき

かくて滅茶／＼に消し潰す

私の神経のいらだちしとある午すぎ。

×

火を消したマッチの棒と

初冬の夕風との戦ひ。

ゆら／＼と上る煙の曲線に

臨終の友を思ひ、

人生の苦闘を思ふ。

妹の嫁ぐ日といふに
試験に囚はれし我れのはかなさ！

教科書も

辞書も

ノートも伏せて

獨り物思ふ。初春の故郷の空よ。

×

さゝやかに指もて頬をつゝけば

輪に出づる煙草の煙。

ガランとした書齋の隅に

友も歌も總てを忘れて……

×

放たれし我れの心か

遣り所なき我れの心か

渚に散るさくら貝、

只一つのさくら貝こそ。

新開町のぬかるみに
映れる初冬の灰色の空と、
浮べる紅き松の枯葉と。

ふと私の胸をかすめて行く「人間の事業」。

×

歡樂を追けかけて

きりく舞ひをした揚句、

目をためて見ると

向ふに見ゆる赤い警報器。

——あゝ初夏の海の美しさよ。

×

青葉若葉の坂下に

繪日傘ならぶ櫻橋、

はいたく鳥を小波に

見守りて行く舞妓ふたり。

白い断れ雲と

紅い片洗ふ岸の女と。

x

落付かぬ心を投げにゆく
雑木林の夕まぐれ。

私はその頃から
草笛をふく事をおぼえた。

x

淡く土塚にうつる私の斜影、
墓に描いた繪のやうに

私はおびえ心を抱いて
夕日にさめくと泣いた。

x

しのびかに
ベットに寄る青き月光。

病床に身をなげた私の
宵毎の悲しい思い出を誰にや渡さん。

x

煙よ天まで上れと

歌ひつゝ燃やせし私の歌反古。

白樺の枯葉の苦悶と叫喚に

私は眼を被ふた。——山裾の深き林に……

x

我がいたむ心の凡てを

獨木舟に盛乗せて

南國の海に漂さばなど思ふ。

いらだしき神経の夕まぐれ。

x

墓場かも

もの云はでたゞ並べる

、會の人々の顔。

皮肉かヒキ倒しか

私は細い柳の葉の冷たさを思つた。

x

学校の便所の壁の落書

たはけ男の泣言を思つて
 苦しい愛嬌と人生の孤獨を考へた。
 あゝ意義ある心の戦ひ。

×
 悲愁の谷のどん底に落ちて
 なほも歌ひつゞくる驕樂の歌。
 私も寂しい男の群れに入つた。

×
 いたむ心にかゝはりなき寂しさ、
 櫻月夜の街行けど、
 白鳥の飛ぶ渚を行けど、
 白樺の落葉を踏めど。

×
 ラクダ毛の飛行帽着て
 街を行く私の姿。
 柳の下に立ち停つて
 ふと密獵船の初めての印象を思ひ浮べた。

×
 白壁に倚る私の
 泣きたゞれたる神経は
 軽くあしらふ夕風に
 ふるゝ細糸そのたびに
 赤きリボンの上に落付く。

×
 胡粉をかけた紙の岩の上に
 匍ひ寄る蟹と、泣き顔せる少年。
 主觀の悲哀と
 客觀の驕樂とを思つて
 私は少女を悪いと考へた。

×
 毛布の陰を走る劇の死人、
 花道を装も亂らにかけ出づる毒婦の姿、
 窓を洩れる青き月光に
 「神は人間の過失に過ぎざるか」

といふニイチエの語を思ひだした。

×

微風の如く部屋を逃げいで、
仰ぎ見し春の美しき星月夜。

かゝる日に小羊は

生るゝならんとふと思ひぬ。

×

磯近き新らしき家の

紅き窓の下に物縫へる人。

穏かなる春の空にひゞく遠鳴の海の音きけば

そゝろに思ひぞ出づる。

×

微笑もあらず

涙もあらず——されど穏かに

わが心は月光の美しき雫もどめて

枯れて立つボブラの森へ忍び行く。

夢の如き影に添ひて……

×

持ち心地あしきペン軸のさびしさよ。

机に投げて小窓をおせば

夕風に鳴る煙筒の悲しき叫び。

さてももごかしき獨居の部屋。

×

嫌はしきものを思ひ合せぬ。

年若き産婆を見れば

事務員の紫袴を見れば

勸工場の女を見れば。

公共の生活にも私の生活にも、權力に服従するのは、亦不活潑な性質の證據だ。然しこの不活潑な裏には消極的な反抗力が潜んで居る。専横主義は彼等を嚇すばかりでなく、その性質を固くする。そこで魯鈍が一種の理想となつて、不平なく忍耐し、辛苦し、死ぬことを知つて居る。その性質の大仕掛に現はれ居るのは、ドストエフスキーの「死んだ家の記憶」で、憐れみを乞はずに、鞭をうけ、笞の雨を忍び得るものは、こゝでは尊敬の的となつて居る。——他の物なら、鞭を下す者がむしろ尊敬を受くべきであるのに。

——中澤臨川譯「ロミア印象記」

それは未だ日本が civilized community に就て現今程の關係を持つて居ない時で有つた。多くの人々は僅に其美しい national history のみを知つて居た。

國中には美しい純粹の文化が漲つて居た。衣服も食物も住居も文學も繪畫も既に支那の臭味を隔れて、國民性の反映を極度迄示して圓熟したる一つの特長を發揮して居た。世は太平が長く續いた。比較的範圍の狭い藝術はいやが上にも夫々其途を取扱つて行かうと云ふ人々に依つて極められ盡した。横文字を知らないでもやつて行かれた藝術家のみに依つて表はされた藝術は燦然と光を放つた。

特に此時代の繪師が始めて作り出した、浮世繪は著しい進歩を遂げて居た。

通油町の繪草紙問屋、都屋半三郎の店には、浮世繪印刷畫の濫觴とも云ふべき菱川師宣筆「浮世繪づくし」「戀のみなかみ」を始めとし喜多川歌麿、勝門春章、歌川豊國、國貞等の美しい色彩に富んだ繪畫が並べられて有つた。

多くの華客で店は常に賑つて居た。其中の一人に行春と云ふ男が有つた。藏前風の髪に結上げたりして特に氣取らうとする様な所は無かつたけれど其婉亭とした体格と、黒目勝の眼を持つ稍長い白い上品な顔立ちは往來する若い人々の目を引くに十分で有つた。

新版が出ると行春は店に來ては買つたり又届けさしたりして居た。彼は無口であつた。黙つて店に來て黙つて歸つて行つた。けれど長い月日の間には遂に主人とも話をし内儀とも娘とも談ずる様になつた。

豊國は神明前の和泉屋市兵衛の店から、筆料を取らないで其繪を賣り出さしてから次第に名譽を博して彼の得意とする役者の似顔は恐しい人氣を集めて居た。勝川春章は役者の似顔を書いて淺草の巴屋で千部祝宴を開いた程賣れた。浮世繪師は世の要求に應じて皆俳優の似顔に心血を注いで力を盡した。かゝる中に一人歌麿は類を異にして異彩を放つて居た。で、行春は歌麿を特に愛して居た。一日。人々が驚いた眼を以て都屋半三郎の店頭に群つて居た。「御半長右衛門道行の圖」歌麿筆、が美しく何枚も飾られて有つた。其繪は俳優の似顔でなく其の繪の上には「浮世繪師猥に世に媚び意匠拙劣卑陋なり」と書いて有つた。「道行」を尋常の美人繪で書くのすら既に奇抜で有る、そこにかゝる文句を書き付けたので見る人々は口々に囂しく批評を試るので有つた。

其夜、賣上高の勘定をして居た半三郎は不意に心付いた様に。

「行春さんはめいたかな」と尋ねた。娘の御絹が一人傍に坐つて居た。父の方を一寸見上げて、

「いゝえ」と答えた。

「少しこりや變だぞ。此の十五六日めいない様だが。」

「ほんに半月程。」

「道行の繪を見なすつたら何んなに喜ぶ事やら。常時からあの様に最負の歌麿だのに、又此度の繪が繪でな。一時も早く見せて上げたいもんだ」

で結局丁稚の一助が翌日其繪を携帶つて行春の家に行く事に相談が纏つた。

午後の太陽が大分廻つた頃で有つた。一助は通油町の店を出て、西小川町の裏の行春の家に向つた。

其頃の都は靜肅で有つた。電車や自動車や發動機の響も絶望。悲憤、羨望の聲から構成て居る都會の物凄いいコーラスの變りに。新内や尺八の流しの美妙な艶麗な Sound が都會の何處かに流れて居る様に思はれた。其靜肅な都の裏町、行春の住むで居た邊は特に靜肅で有つた。庭の多くの木立には鳥だの目白だの毎日多く遊びに來た。角の清元の師匠の家から流れ出して來る濛い潤の有る聲とそれに和した三絃の音とは其界限に一種の優味を加えた居た。夜は淨瑠璃の流しが奥座敷迄手に取る様に聞えた。南天の植込の傍には桐の木が、其の隣には芭蕉が一株大きな葉を擅に擴げて雪見燈籠に覆つて居た。雨の夜は其葉が悲しい調を帯びた音を立てた。風の強く吹く時は大きな淋しい音を一夜中して人の心を威嚇した。獨身者の行春は其家に一人住つて物淋しい日を送つて居た。天才肌の彼は其淋しい家の中で飽迄空想に耽つた生活をした。時々は空想の感興に乗つて心持上氣した赤い顔を夕風に吹かせ乍ら庭の中を巡つたりして居た。

が時々「私は一人だ」と思ひ出すと急に悲しくなつて來て遣瀬無い念がして居ても立つても居られなくなつた。かゝる時は氣をば轉ずる爲めに幼時から又となく好んだ繪畫をかくのであつた。

彼は特に師匠を取つて繪畫を習ふたのでも無かつたが先天的恰も畫をかく爲めに生れて來たかの様に繪畫をかくのが好きで又上手で有つた。庭に面した八疊の間に閉ぢ籠つて興がのると幾日でも續けて畫をばかいて居た。

其日も行春は今朝から八疊に這入つて畫をかいて居た。一助が玄關に來て案内を乞うた時折悪しくも雇人は不在で行春一人であつた、一助は大きな聲を出して案内を續け様に乞うた漸く奥で行春の聲がして「上れ」と云つた。氣輕な一助は聲に應じて奥に上つて行つた。で八疊に這入ると行春は一寸一助を見て「一寸待て」と輕く笑ひ乍ら筆を續けて行つた。一助は室内を見廻した。一蝶筆の「百人女膳」「女達摩」だの浮世又兵衛の美しい作を始め多くの繪が壁に貼られて有つた。長押しには恐しい面構の面が幾つとなく掛けられて居た。床には氣味の悪い程大きな佛像が澤山に並べられて有つた。植物の反射により綠色の光線が室内に漲つて落着いた冷かな空氣が流れて居た。一助は何となく壓迫される様に覺えて小さくなつて隅に坐つて行春のかいてる畫に目を轉じた。

部屋の有様と其の畫の感とは何處にか共通の點が有る様に思はれた。五月雨の中を若い娘が雨傘を傾けて柳の樹の下を歩むで行く所が書いて有つた。普通の江戸繪に於て見られる鮮麗な色彩は何處にも見出す事が出来なかつた。全々明かな色を避けて濛味の有る色を用ひて有つた。畫中艶々とした所があつて柳の葉と雨傘と女の髪は美しい光澤を有する様に見えた。大体の畫を構成して居る勢のある線は畫を生々として居た。行春が加へる面相筆の微妙な働きは畫を和げて次第に女性のデリケートな柔い曲線を表はしていつた。朝から夜迄、終日繪畫の中で日を暮し働いて

いる一助は知らず知らずの間に眼が肥えて居た。淋しい畫、澁い畫、變つた畫、そうして非凡の腕が有ると云ふ事は一助にもよく了解つた。

「一寸待て、一寸待て」目を筆先から放たずに行春は筆を續けて行つた。

日は落ちて西の空が僅に橙色を帯びて居た。南天も芭蕉も桐も、黒い團圓かたまりとなつて了つた。雪見燈籠の白い紙のみ其神秘的な黒い色の中に浮いて見えた。夕方の冷かな風が柔く木の葉をサラサラ云はせた。行燈の黄色い色が部屋に温かい光線を與へると同時に行春の熱しきつた頭腦は初て吾に返つた。一助は既に家を出て店に向つて居た。

夕飯を終ると行春は一助の持つて來た繪を擴げて見た「御半長右衛門」は艶麗な華かな色彩で書き出されて有つた。新しい紙と木版の印肉の香は心好い感覺を與へた。「浮世繪師猥に……」の文句を讀むと彼の瞳は輝いて來た。繪を捲いて文机に凭れて彼は一人默想に耽り出した。「何んだつて彼様な文句を書いたのだらう」

彼は又繪を擴げて眺めた。「道行」その言葉を聞いた丈でも其頃の若い人々は淡い心好さと、羨望の念を胸に漲らしたもので有つた。義理だの壓迫だのを遁れて行く美しい男女は、成程、絶對的に道德上の見地から云つても間違つて居たに違ひ無かつた。又其頃は一層に嚴重で有つた Patriaral *clal system* の上から見ても社會の秩序を亂す悪行を敢てする者達には違ひ無かつた。しかし其頃の若い人々は同情を多く持つて居た。冷かな意志は熱烈な情に屢々勝を制せられた。特に多血性の江戸の人々はかゝる氣分を多く持つて居た。行春も其等の人々と同様な氣分を持つて「道行」に對

して居た。「道行」を舞臺で見たり繪で見たりすると一種云ふに云はれない心持がして夫等の男女の事をば何時迄も頭に浮べるので有つた。希望と恐怖と絡み合つた念を懷きつゝ前途を急ぐ美しい男女の姿は行春には此上なく美しい詩に見えた。生れ付き母親似の弱い氣質と父親から毎日教へられた儒教の感化は彼に或一ツの感念を幼時から強く刻み込んで居た。彼の熱情には或程度迄のリミットが定められて有つた。父親の儒教を教へて呉れたのを屢々呪つた事さへ有つた。何うしてこんなに弱いかと思つて捕へられてる桎梏から逃れ様と何度も激しい身悶みもたをしたが結局は矢張り觀照家と云ふ階級以外に自分を置く事は出来なかつた。果ない反抗心を僅かに舞臺と畫面で見ても満足たまりと慰安を得て居たので有つた。彼の心は淋しかつた。

其繪は彼の大好な歌麿の筆である。書題が最も懂れてる「道行」であるだから半三郎が行春が好くだらうと思つたのも更に無理はなかつた。だけど筆太く書き付けた文句を見る眼は半三郎と行春との間に著しい違が有つた。

半三郎は行春が大變に喜ぶだらうと思つて居るが行春は夫れを見ると物足ない思がした。畫家の態度として果して歌麿の遣方は適して居るで有らうか。江戸子肌の血が流れて居る者は歌麿の行爲を驚いて喜んだに違無いが行春は歌麿を疑ひ出して果ては反感を起し出した。其夜から五六日經つた。半三郎が突然行春の家に尋ねて來た。娘の御絹が眺らしくも一所であつた。神田の明神から縁者の所へ廻つてそれから歸途に參上つたのですと半三郎は説明して氣輕は色々な事を話した。行春も二三日は悶鬱して淋しく日を送つて居たので浮立てさせる様な半三郎の談振りが心

好く思はれて平常つねになく合槌を打つて談話が賑かに運ばれた。「いけません。いけません」と断り乍ら三本目の銚子を残り少なくて居た頃脂肪の多い半三郎の顔は艶々と輝いて眼が潤んで居た。談話が繪の方に向ふと

「行春様貴方は大層よくかくつて云ふじや有りませんか。見せて戴きたいもんですな。」と半三郎は云つて人の好きさうな笑ひ方をした。

「なあに、ほんの悪戯書でね、それを一助に見られちやつたもんだから」と行春も目の縁を薄赤くして軽く笑ひ乍ら答えた。

「其悪戯書の所がいゝんです。なあ御絹」と半三郎は娘を促した。

「えゝ。行春様何卒見せて戴かせて……………」

「じや見せてもいゝが笑ひなさんなよ」と行春は云つて二階から降りた。二人は後方から續いて降りて八疊に這入つた。袋戸棚を行春が開くと多く浮世繪が積れて有つて其傍側の壁に絹地に書かれた五月雨の繪が立て掛けて有つた。行春は其を引き出して疊の上に置くと軽い微笑を浮べつ、「駄目」だと云つて半三郎の方に押しやつた半三郎と御絹は行儀よく並んで其繪を見た。繪は總体出来上つて居た。其落付いた調子は何所となく繪に重味を附けて居た。總て濛い色彩のみを用ひてあつたが生々として居た。雨に濡れた柳の若葉が最も鮮かな色で有つたが、それすら濛い蟲襖むしあはせを以て彩られて有つた。淋しいが氣持のいゝ筆の運はこびと着色は人を魅して一種云ひ難き快味を起さしめた。半三郎は感嘆の聲を放つて激賞した。御絹も感心して黙つて見入つて居た。半三郎

は木版にする色敷を考へて居たが。朱も緋も全て赤い色を用ひてないのに氣が付くと不思議さうな顔をして

「行春様、貴方は赤を使ひませんな。御嫌いですかひ」と尋ねた。

「思ふ様な色が出ないでな」行春は淋しげに笑つて居た。

二階の部屋に返ると半三郎は是非家の店から貴方の繪を出したいからと行春に説いた。「惜しいもんだ。貴方位の腕が有つて黙つてちや」と何度も繰り返しては云つた。

「わしの手は未だ人に見せる程じやない」と行春は云つて相手にはならなかつた。

日没の少し前、半三郎は御絹を連れて歸つて行つた。行春は八疊の間に横になつて天井を凝然じつじつと見詰めて黙想まがて居た。風が吹いて來て芭蕉の葉がバサバサと單調な悲氣な音をたてた。何時間となく空想に耽つて居ると何時の間にか細い糸の様な雨が降り出して來て雨滴が小さな音をして落ちるのが聞えた。

長押ながしの所に一つ飛び放れて掛けられて有る古い般若の面は物凄光を放つて嘲ける様子上から見下して居た夫を見て居ると次第に其燦然たる金色の眼球がグルグル廻轉くわんてんの様に見える。其面は彼の父が特に愛玩して居たので父の存生中は桐の箱に入れられて常時つねにはなかなか見られなかつた。恐ろしい面から色々の温い昔の追憶が胸に浮んで來た。嘗て其面をば土用干の時疊の上に取り落して父から厳しく叱られたかつやまに結ひ上げた小柄の母の姿さへ目の前に浮んで出た。論語を讀む時間にそれを見て居て取上げられて了つた草双紙を其母は父に内密に後でそつと返し

て呉れた事も有つた。

父も母も逝つて了つた。其の痛ましい刹那の光景が眼前に歴然と展開して來ると、彼は五体を緊め付けられる様な激しい悲哀と、運命と云ふ怖ろしい壓迫を考へて、體の置き所に窮する様な感念が仕出して來て居ても立つてもゐられなくなつた。

八疊の一隅に御絹のらしい緋縮緬の風呂敷包が一つ置いて有つた。で其れに氣が付くと直様懷中に其れを入れて彼は家を出た。

雨の夜の江戸は美しかつた。

都屋に到着した頃は夜は大分更けて居た。嚴然い大きな重さうな屋根を戴いて都屋の店は雨の中に眠つて居た。行春は夫を見るとき踵を返して再び雨の中を歸つた。或角の酒屋の戸口から冷かな五合枮を受け取つて一息に飲み干して彼は路を一生懸命急いだ。火照る體を夜具の中に潜ぐらせて眠に就いた。雨は降り續けた。

淋しい夜は更けていつた。

二

長い時が經つた。行春は其間に若い妻を貰つてそれに先立たれた。

御絹は十九になつて居た。「都屋の御絹」と云へば誰しも其艶麗な容姿を眼の前に浮べた、浮世繪が脱け出した様な美しい御絹が途を行く時多くの人々は目を見張つて振り返つた。千代紙の様な鮮かな服装をして毎日長唄の師匠の許に通つて居た。

或黄昏の事の有つた。うすら寒い微風が黄色に染つた銀杏の葉をひらひらと舞はして途を行く若い女達の日和下駄の音が特に冴えて聞えて居た。庭の何處からか頼無い細い蟲の音がして秋の悲い空氣は大江戸にも其手を擴げて華かな都會の生活にも何となく沈んだ調子の氣分を與へて居た。行春は瓢然と家を出て冷かな空氣を吸ひ乍ら夕暮の灯がそろそろ點き出す町を目的もなく歩いて廻つた。

機關人形の周圍に群つてる子供の乾燥いた聲だの、假聲使を取捲いて騒ぎ立てゝる人々の笑聲だのは彼に取つて何等の關係も無い様に思はれて少しの感興も起さずに異境を迷ふ旅人の様な氣分を持つて無暗に歩いて行つた。

途上の人に衝き當らうとして始めて氣が付いて身を躲避したりした事も一度や二度では無かつた。

足は何時か谷中の方面に向つて居た。御成道を経て上野の森に這入つた頃月が出て居た。谷中の手前の遠縁の者の許に夏生れた、生れる直に其母を失つた憐な子を預かつて置いた。其所に行かうと思つたが止めて木立の間を歩き廻つて居た。若い妻との一年間の夢の様な暮方を浮べ考ると耐力もなく悲しくなつて來て涙を雙眼に滲ませて果し無い思に耽けつた。

暗黒な森の月の光は彼の心に似合つて居た。月の光を受けて灰色に浮いて見える木の幹は寒い色をして居た。遠くから聞える梟の鳴聲を聴いてると堪え難い氣が仕出して華かな大路の灯が戀しくなつて再び御成道に引歸すのであつた。夜は遅くなつて居た。小川町の裏小路を通る時湯屋

の栓を抜いた湯の香が何所となしに漂つて居た。家に歸ると疲れ切つた雙脚を揉んで暫くは落着いて居たが、やがて思ひ付いた様に袋戸棚を開けた。伊豫紙の香が鼻を衝くと久振に仲の良い朋友に出遇つた様な氣がして急いで多くの繪を取り出して灯をかきたて、一枚宛操り擴げて眺めて居た。それを見盡すと今度自作の多くの繪を取出しては眺め出した。半歳許り見ないで居たから特に面白く思はれて彼は飽かずに何時迄も觀て居た。

多くの繪は白く色付けずに残されてある所があつた。そこに行春は血の色を塗つて見たかつたのであつた。

血液の稍黒ずんだ陰鬱な地味な色合と其涸いた時に放つ特有な光澤に如何に行春は憧れて居たか、其色は決して人間の作つた畫の具の如き單純なそうして生命のないものでは無かつた。

で彼は生血を幾度か得様として種々の試をしたけれど思ふ様に得る事は出来なかつた。短刀をば抜き放つて肉體を刳つて見様と思つたりした事も屢々あつたが其の薄氣味の悪い曇のかゝつた刃を見ると彼の繊緻な心は徒に混亂されて何うしても吾と吾身を傷ける事は出来なかつた。

夫は父から教へられた儒教上からの戒に依つてではなかつた。女親から稟けた弱々しい氣質の致す所であつた。

其日も其の脱けた所に着色る爲めに皮膚を傷け様と云ふ考が不圖浮んで靜かに床にある白鞘を取り上げて抜いで見た。夫は灯の赤味を帯びた光線を受けて恐ろしく輝いた。其刃の鋭い刃先を見詰めてると神経の細い維に其先が觸れる様な氣がして堪へ難い壓迫と威嚇を與へられた、眼も

眩む許りの深い谷の斷崖の上から瞰して居る様な吸ひ込れる様な恐怖の激しい衝動を覺えて戰うく手先で直様に刃を鞘に収めて床の間の上に載せた。惡寒を感じて毛穴が粟立つて皮膚が一時に戦立した。

幾日となく漠々と日は經つていつた。其間に行春の神経は益々過敏になつていつた。或夜は奇怪至極の惡夢に魘されて不意に飛び起きて翌朝迄興奮し切た頭腦を持餘して、其翌日は疲れ切つた精神と肉體とを以て懶氣に日爲す事もなく日を暮したりした。或日は足に任せて市街中を彷徨つて廻つた事もあつた。何か重苦しい繩が頭に喰ひ込む様な氣が仕出して遁れ様遁れ様と焦心つた。無功な努力を續ければ續ける程刻々懊惱は激しくなつて來て大氣が緊着ける様に思はれて息苦しい日を暮していつた。

或時は世の中の人が皆白眼を以て瞰むでる様な氣がし出して一日を何事もせず部屋の中で考へて居る事もあつた。或時は世の中の人々は皆無智文盲の汚ない群に見えて己れ一人特殊の性質を持つて居て夫が誰にも了解らないんだらうと考へたりした。

精神の比較的穩かな日は靜かに坐つて己れを苦めるのは何物か其糸蔓を探り當て、煩悶を根本から斷つてやらうと試るのであつた。

「狂氣になるんではないか」と思ひ出すと血が一時に頭腦に込み上げて來て云ふべからざる惡感を覺えた。

かゝる時には好む繪を見るか、かくかしては氣を轉じたのであつたがそれすら今はする事が出

來なくなつて來た。繪を見ると徒に氣がせかづいて、來る様に思はれた。

秋が深くなるに連れて行春の神經は益々針の先端の様になつて行つた。揉鬪ひねりまを作つて夫に依つて庭を歩くか歩かないかと此の本を開けて見様かよそうかと云ふ様な些細な事に到る迄決斷する事が出さなくなつて定めた日もあつた。何物かに追掛けられてる様な不安な心地で日を送つていつた。

三

秋は次第に更けていつた。日中吹く風でさへ身に透みだした。冬の荒蕩たる光景が目先に迫つて來た。

黄色な木々の枯葉は段々に散つて蟲の頼無い聲すら聽かれなくなつた或日の午後、其日は強い風が吹いて時々激しい雨が降つては止み降つては止みしたが、御絹が雨の絶間に行春を訪れた。父母は京に行つて自分は伯母の家に泊つて今日は其歸途だ等と談した。談をして居る内にもう大丈夫と思つた雨が又轟然と音を立て、降り出して來た。一助を家に雨具を取りに遣つて二人は八疊の間で談を續けて居た。雨は止むだり降つたりした。繪が澤山出されて有つた。

「本當に繪を木版にして皆に見せて遣る氣は御さんせんのか？」

「まだ下手でなあ…」

「それに此の白い所は」

「その白い所で苦勞してゐるだけぢやなしにはそこに塗る色が出ないでな」

菊の花櫛で御絹は後毛おくれけを撫で付け乍ら不思議さうに行春の蒼白い頬の邊を眺めて居た。氣の少な不精嫌な行春は其ボツ／＼生えて居る髭を氣に掛けつゝ伏目になつて會話はなしを續けた。

「それで始終考へて色々割合せてみるけど矢張り駄目だな近頃は思ひ切つた」

妻れた行春の姿は憐れに見えた。御絹の發達しきつた体軀も色艶のいゝ皮膚の光澤とは行春を壓迫して行春は見下される様な氣が仕出すと頭を擧げて肘突に凭れたりした。

「仕方がない……」

「なせ……」

御絹は其行儀よく並んだ齒を見せて笑ひ乍ら云つた。

「其様に云ひなさつたつて。本當に面白い行春様……」

「それ許りかまだ理由わけも有つてな」

「理由とは」

「……」

行春は只淋氣な面持をして居た。御絹は好奇心と其の談話を續けて行かなければならぬ状態になつて居たので他に話題を考へつゝも同質問を何回となく繰り返した。

「血の色が塗つて見たいんだ……血が」

行春は眞面目になつて高調子で云つた。

「血が……」

御絹は驚いて行春の顔を見詰めた。

「血つて行春様人の血を……」

で行春は色々前に有つた事柄に就いて談した。

「弱い、行春様は弱い男……」

御絹はこう云つて行春を親味の有る様な眼付で見た。御絹の心の中は盛んに燃えて居た。瞳は輝いて來た。二人は互に緊張した念を抱いて相對して居た。各々別の方面の事を考へて居たけれど興奮が其高調に達して居た。

繊弱な御絹の神経は戦々と震へて來た。その震動はけれど恐怖の爲めではなかつた。仇討に出る勇士が拔身を携へて出場する時の夫に似通つたもので有つた。俠客が激しい争ひの前に覺える様な震動であつた。神経の震動は次第に肉體に其波動を傳えて來た。柔かい線から出來てる五体は軽く拘攣つて居た。

上氣して耳が赤くなつて居た。行春は御絹の神経の興奮が甚しくなつて來たのをよく認知して居た。何物かを暗示される様に覺えて云ひ知れぬ一種の満足を抱いた。御絹の色のいゝ容色を凝然と見入つて居た。

雨が又一時に強烈な物凄しい響をして降り出した。恐ろしい風が轟々と鳴つて輝いた桐の黄色な葉を庭中ぐるぐると弄んだ。バラ／＼と打ち付ける雨滴は椽側で跳返つて水沫が障子に點々と痕をつけた。行春は二階の雨戸を閉め様と座を立つた。戸を閉め終つて八疊に戻ると御絹は打伏

になつて身悶えをして幽かな呻吟聲を發して居た。床に置いてあつた白鞘が鮮血に染つて疊の上
に落ちて居た。

行春は其總身の血液が悉皆頭に集まつた様に覺えて思はず叫聲を放つて後方から御絹を起した。其折御絹の右手が放れると左手の二の腕からグビリ／＼と鮮血が溢れて居た。夫は白い肌理の細まかい肌を流れて手の甲から指を傳つて白い筆洗の中に滴つた。急速な心臓の鼓動に連れて流れ出る赤い生々しい血は見る見る筆洗の内に溜つていった、齒を噛緊めて堪え難い苦悶と戦つて居る御絹の顔は凄味を帯びて居た。柘榴の様な傷口から迸る淋漓たる色を見ると行春は眼は眩んで來て耳の邊では激しい連續的な音響が聞え出して。御絹の體も疊も漠然して來て只左右に震える御絹の緋色の鹿子絞の帯のみ大きくなつたり小さくなつたりして見えた。喉は塞つて怪しく五臓は痲痺れて昏醉した様に足許がフラ／＼仕出した。幻影か現實か識別する事すら出來なくなつて、瞳孔は開いて只無意識に其の有様を凝視して居たが次第に部屋中が一團の猛火の様な。激しい赫熱しきつた溶けた鐵の様な色彩に變化して來て深い瞑闇な溪谷の底え落ち込んで行く様な氣がすると疊の上に打伏して了つた。體は痙攣的震動をして物を云はうとすると舌端は縛れて怪氣な響を發した。其聲は悪夢に襲はれた時人々が發する異様な聲で有つた。

筆洗は溢れさうに鮮血が満ちた御絹は襦袢の袖を噛み裂いて傷口を捲いた。張り切つた氣が緩み出すと傷口は激しく疼き出して來た。

行春が氣を取りなほし立上つた時椽側の柱に御絹は寄り掛つて居た。雨は降止つて居た。鉛の

様な雲が北方に速く飛んで居た、日光が一寸照つては又曇つた。御絹は蒼白な容色をして空を見詰めて居た時々襲ふ強烈な猛風は梢を鳴らして水滴を四方に飛散せしめて居た。行春は後れ毛の纏れ合つてる御絹を見て居たが振返つて今一度筆洗を見た。

過去の歴史も習慣も法則も、凡てそういふものを否定し去つた揚句、残る所は唯自己といふ個人である。此れ以外には確實なるものはないと思つて仕舞ふ。即ち自己生存の慾求、これを外にして他は凡て幻影に過ぎないと思ひ、眞理といふ畢竟するに永遠恒久の性質あるものではなく、たゞ我れ／＼の現實生活に利益あるもの、外は取るに足らぬと考へる。自分の精神的生活の孤獨といふことを痛切に感ずるわびしさ、此れが個人主義の苦惱である。

——厨川白村「近代文學十講」

苦しい時にも愉快的な希望がある

——ベーコン

史的警句集

浦井生

Desperate diseases require desperate remedies ガイフォークスがイギリス王ジェームス一世に答へし語

一六〇三年イギリスの女皇エリザベス殞して嗣なしスコットランド國王ジェームス六世イギリスに迎へられて即位しイギリス王としてはジェームス一世と稱す王はマリアスチュアルトの子なるを以てイギリスなるカトリック教徒は額手相慶して曰く新王は必ず新教を廢しカトリックを以て國教と定むるならんと然るに王のスコットランドに在るや貴族横暴を極め王權振はざるを慨しイギリスは之に反してエリザベスの御宇王權大に伸張せるを羨み居たりしかば其原因を以て兩國の國教の異なる爲と誤解しイギリスの新教を禁せざるのみならず益々之を保護しカトリック教徒に對して嚴重なる取締法を設け議會は喜んで之を協賛せりさればイギリスのカトリック教徒の失望甚しく終に絶望的激昂となり熱狂せるケーツビー・ライト・ウインテル・ガイフォークス等首謀と爲り所謂火藥陰謀(Gunpowder Plot)を生ぜり謀徒は一六〇五年十一月五日議會の開院式に乗じ火藥を以て之を爆裂し一舉して國王及び議員を殲滅せん者を謀り議會の隣家を借入れ其家の穴藏を利用し地を穿ちて議會の床下に通じ之に火藥を充填し準備全く整へり先是上院議員モントイール卿は匿名の書を受取りたるが其大意に曰く閣下よ予は閣下を愛するが故に閣下に忠言を呈す閣下生命を愛さば議會の開院式に參列すること勿れ今や神と人と一致して時代の罪惡を罰せんと

しつゝあり閣下予が忠言を無視すること勿れ議會は猛烈なる打撃を蒙るべく而して何人も其敵手を見ると能はざるべしと此密書は謀徒の一人なる Francis Trevelan といふモントイール卿の義兄弟の發送せる者なりきモントイールは此書を読み大に怪み之を政府に提出せしかば政府も徒事ならずとして大に警戒を加へ議院附近の大搜索を行ひ開院式の前日四日の深夜に至り謀徒の一人ガイフォースがたゞ一人穴倉を守れるを發見して之を捕へ不測の禍は間一髪の危機に於て救はれたりガイフォースは王の鞠問を受けて屈せず非常手段に訴ふるの止むを得ざるを答へたり

Divide in order to rule 拉丁 divide et impera にしてフランス王ルイ十一世(一四二四—一四三八)の採用せる箴言なり王は十五世紀の偉人にしてフランスの知行制度を廢して中央集權の政を行はんとことに腐心せしが王の勢力絶倫にして且つ目的の爲めには手段を擇ばず權謀術數至らざる莫くフランス諸侯の大なる恐怖となれり當時の人王を呼んで Universal spider としへり即ち王が陰謀の網を四方に張り敵を逸することなかりしをいふフランスの諸侯はブルグンド公チャールス猛公を盟主として王に當りしかども終に敵する能はず中世の政治組織は破壊せられ諸侯は壓服せられぬされは史家は王を呼んで近世フランスの建設者といふ

England expects every man to do his duty

一八〇五年十月二十一日トラフハルガル海戦の開始に先ち英提督ネルソンが麾下の艦隊に與へた

る信號なるが其委細の史實に至りては所傳一ならず蓋し最も信憑すべきは旗艦ビクトリー號に乘組居たるバスカ中尉の傳ふる所なるべし氏曰く自分は船尾高樓に在りて勤務中提督は自分の傍に來り二三の信號掲揚を命じたる後更に自分に命じていへりバスカ君よ予は我艦隊に對し England confides that every man will do his duty と言はんことを欲す急げバスカ君よ予は次に接戰の命を下さんとすよ自分はいへり閣下若し Confides に代ふるに expects を以てすると許し給はゞ小官は直に之を爲さん expects は信號辭書にあれ共 confides ならば之を綴らざる可らずと(期待の語ならば一の信號旗にて間に合へども信ずの語は信號旗無きを以て〇の旗〇の旗Nの旗を以て語を綴らざる可らざるを以て少しく時間を要すべしの意なり)提督は満足の様子にて答へて曰く可し直に之を爲せよ乃ち自分は Sir Home, Papham's Telegraphic Code に依りて彼の信號を掲揚したるなりと

Every French soldier carries the marshal's bâton in his knapsack (Tou soldat français porte dans sa giberne le bâton de maréchal)

フランス王ルイ十八世(一八一四—一八二四)がヘルサイユなるセンシール(Saint-Oyr)幼年學校生徒を激厲せし語

元帥は古我武將が采配を携帶せしが如く長二尺許の指揮杖を持てり之を Marshal's bâton といふ佛國の誇は縦令一兵卒の身と雖も其技倆次第擢累進して元帥の位置に達し得可く外國の如く門閥階級傳承等の障碍決してあることなしといふ意なり

Evil to him who evil thinks (Homi soit qui male pense) 英國のガーター勳章の箴言なり

ガーター勳章はエドワード二世(一二八四—一三二七)の制定なるが之に關する傳説に曰く一夜宮中に舞踏會ありソルスベリー伯爵夫人は國王陛下の御相手をなし過つて襪のリボンを取落しけるに陛下は之を拾ひ上げ給ひしかば之を見たる人々は夫人の異常なる光榮を妬しと思ひ散々に冷評を夫人に加へ夫人は堪へずして別室に逃れたり此有様を御覽ありたる陛下は逆鱗ありて可し朕は此青色のリボンを以て最も名譽ある者と爲し汝等をして之を得んとて苦勞せしめんと乃ちガーター勳章を制定し給ひ青色の綬に金字を以て此箴言を記すことなれりとされど此箴言は早くよりフランスに於て行はれたる者にて好事者が此箴言よりガーター勳章制定の理由を捏造して傳へたる者と信せらる

Farewell France, Farewell. I shall never see thee more スコットランド女王マリアスチュアルドが佛國より去らんとしてカレーの港を發した時の語

マリアスチュアルトはスコットランドの女王にして佛國の皇太子フランシスと婚約あり幼時より佛國に在りて教育せられ佛國は彼女の爲め第二の母國なりき彼女は従姉英女王エリサベスの母アンナボレーンはカトリック教徒の解釋に依れば正しき皇后ならざるを以てエリサベスの相續權を認めず一五五九年フランシス立ちて佛國の王となるや彼女は公然フランス。イギリス。スコットラ

ンドの女王と稱せりローマ教皇を始め歐洲のカトリック教國は皆彼女の權利を承認し早晚彼女の冀望は實現されんとする勢なりしが好事魔多くフランシス二世は在位僅に一年一五六〇年殞落せしかば彼女の計畫は大頓挫を來たし彼女は悄然佛國を去りてスコットランドに歸れり彼女が將にカレーの港を出てんとして佛國の山河に訣別せる語は不幸にして讖をなしスコットランドに歸りたる後悲惨なる運命に遭遇せしは人の知る所なりとす

Farewell, brave country! Farewell, my dear France! (Adieu, la Patrie brave! Adieu, mon chér France.) 是はナポレオンが英艦バルロファンにて英國に向はんとし佛國のロシュフォル港を出でんとせし時の語なり當時英雄の胸中果して如何の感ありしならん

Father abbat. I am come to lay my weary bones among you. ウルジーがレースターの庵言に言ひし語(一五二九年十一月二十六日)

英國の Cardinal Thomas Wolsey 卑賤より起りて累進しカンターベリー大提督となり次で首相(チャンセロール)に任しローマ教皇よりカーデナルの榮職を授けられ勢力朝野を傾く然るに一朝國王ヘンリー八世とローマ教皇と衝突を生ずるやウルジーは王の怒に觸れ踵いで彼を王に讒する者あり王終に叛逆の罪を以て之に擬すウルジーはかゝる運命の激變に堪ふる能はず病を獲ロンドンに護送せらるゝ途レースター僧院に於て殞れたり

For share, get you gone; give to honest men: to those who will more faithfully discharge their trust. You are no longer a parliament. I tell you, you are no longer a parliament. シロンウエルが議會を解散せし時の語(一六五三年四月)

クロンウエルは近世の怪傑にして彼に對する毀譽紛々たれども少くとも英人が彼に感謝せざる可らざる點は革國が彼の力に因り社會的革命的慘劇を免れたることなりとす英國に於ても革命の常習として議會に於ては漸次過激の言論旺盛となり終には社會主義を行はんとするに至れりクロンウエルは之を惡み斷乎として彼の黨與なる議會を解散するを辭せず爲めに英國の革命は政治的革命に止まりて社會の秩序を維持することを得たり之に反してフランスに於てミラボー早く死して議會を制する者莫く終に社會的革命的革命を惹起し未曾有の慘劇を演出するに至れり

Fortune, like women, favoured a young king than an old Emperor. 獨逸皇帝查理五世の語(一五五二年)

獨逸の宗教改革争亂の際サクソンニ選帝公モーリッツ皇帝查理五世に反き佛王ヘンリー二世に説き獨逸を侵さしむ佛兵獨逸に入りメッツ、ツイル、ヘルダン等の要害を陥る皇帝チャールズ之を恢復せんとして努力せしかゞ終に目的を達せず乃ち悵然として大息せる語なり

Forty is the old age of youth, fifty is the youth of old age. 佛の文豪ビクトル、ユーゴーの演説中

の語

From yonder Pyramids forty centuries behold your actions. ピラミッドの戰に於けるナポレオンの語

一七九八年ナポレオン埃及遠征を行ひ六月三十日アレキサンドリア府を陥れエジプトの首都カイロに向ふ七月二十日カイロを距る遠からざる金字塔の下なる Embabel の村にて約一萬のマムルク兵と衝突し一戰之を敗りカイロ府は踵いで陥れり此役佛兵の損害死者三十負傷者約三百に過ぎざされどナポレオンは非常に之を誇張して本國に通報し且つ曰く此戰に於て敵兵殊死して戰ひ佛兵の備亂れんとすナポレオン乃ち大に呼んで曰く我兵士見よ彼のピラミッドより四十世紀の時日は汝等の働きを眺め居るなりと佛兵奮闘大に敵を敗れりと是れより歴史に於ては之を金字塔の戰といふ

Gentlemen, I am resolved never to begin an unjust war, and never to finish a just one, but witty the destruction of my enemies 瑞典王チャールズ十二世の語

一六九七年瑞典王チャールズ十二世即位す甫めて十五歳先是バルト海東岸なる瑞典領エストランド等に垂涎せる露西亞帝ピーターリポニアを奪取せんことを計畫せる波蘭王アウグスト二世及びチャールズの義兄なるホルスタインゴットルプ公と衝突せる丁抹王フレデリッキ四世の三人はチ

チャーレスの年少なるを奇貨とし同盟して各自の野望を逞うせんとすチャーレス時に十八歳憤然として起ち政をビーペル伯に委ね自ら兵を率ゐる攻勢を取りて丁抹に向ひ北歐戦役(一七〇〇—一七二一)を生せり

Get my bill passed to-morrow or this head of yours will be off. 英王ヘンリー八世が議會を脅かし、語

ヘンリー八世は一五三六年議會に僧院廢止案を提出したるに議會は之を否決せんとす王乃ち議會に臨み議員を脅かし終に之を通過せしめたり此法に依り約六百の僧院は廢滅せしかば王は其財産を沒收して王室財産に加へ一部は之を貴族に分與して其款心を買へりされば此法案提出の動機は王の私慾の満足にありしかども其結果は頑冥なる修道士の勢力亡びて英國々立教會の地歩一層の鞏固を加へたり

Give me a base, and I will move the earth. シチリア島シラクサ市の理學者アルキミデス(紀元前二八七—二一二)は比重の原理の發見者として著名なるが彼は其他數學物理學に於て幾多の發明あり就中彼が最も得意の發見は槓杆の理にして彼は槓杆の應用の力を説明し若しも地球以外に支點を得ば彼一人の力を以て能く地球を動すべしといへり

Give me back my legions (legiones redde) ローマ帝アウグスツスの語(紀元九年)
アウグスツス連りにゲルマン人を討ち羅馬領ライン河を越えて大に發展す然るにローマ領ゲルマニアの太守 Quintilius Varus はゲルマン人に對する統治其法を誤りて土人の大反抗を惹起しゲルマン人の首長 Arminius は偽つてバルスの嚮導となりローマ兵をトイトブルグ森に誘出して之を包圍攻撃し三レジオン(一萬五千)のローマ軍此陷穽に陥り全滅す此報ローマに達するや皇帝はバルスの無能一萬五千の精兵を失へるを痛歎し哭して曰くバルスよ朕が聯隊を返せと

Give me liberty or give me death. アメリカ合衆國獨立運動に際し名士 Patrick Henry が一七七五年三月 Virginia Convention に於ける演說中の語なり

Go and tell him that thou has seen the exile Marius sitting on the ruins of Carthage. ローマのマリウスの語

紀元前八八—八四年のローマの第一次内亂に方り平民黨の首魁マリウスは辛うじて貴族黨の毒手を免れアフリカに奔る(八七)アフリカの太守 Sextus 首鼠兩端を持しローマの形勢を觀望せしが平民黨の敗れたるを見マリウスにアフリカ退去を命ずマリウス乃ち此激語を以てセクスチリウスの使者に答へたり

God be praised, I die happy. 一七五九年ウォルフ將軍の語

歐洲に於て七年戦争破裂するやアメリカに於ても英佛の開戦となり佛人は土人のインヂャンと結托して英人をアメリカより掃蕩せんことを力めたり因て米國に於ては此戦役を Old French and Indian War といふ此役に於て英將 James Wolfe はカナダに進み Quebec を陥れしが重傷を受け英軍大捷の報告を聞き欣然神に感謝して死せりケベックは「アメリカのジブラルタル」の稱ある要害にして此地英人の手に入りてより難無くカナダ全部を占領するを得一七六三年パリ條約に依り英國はカナダを割譲せられたりされば名士ピットは下院に於てウォルフ將軍の功を讚して曰く *With a handful of men he has added an empire to English rule* 云々

God help me, my own children have forsaken me. 英王ジェームス二世は其加特力主義と専制政治との爲め人民乖離し一六八八年の革命となり王は佛國に出奔し英人はオランダよりウイリヤム三世を迎へたり王の長女マリアはウイリヤムの配たり父を救ふは儲置き夫のウイリヤムと共に艦隊を以て英國に入り立ちて女皇となりジェームスの次女アンナは丁抹に嫁す復た父王の急に走らすされば老王ジェームスの泣言は眞に同情に値ひすといふべし

God is always on the side of the big battalions 佛の名將チュレンヌ(Turenne)の言として傳へらるチュレンヌは三十年戦役より著はれルイ十四世時代に於て歐洲屈指の名將として推されたる人なり

God may forgive you, but I never can. 英國女王エリサベスは多くの寵臣ありしが最後に女王の寵を擅にせしはエセックス伯なりき女王の寶算既に五十を超えたるに伯は未だ二十代なりしかば寵を恃みて傍若無人の舉動あり舉朝之を惡む會ま一五九九年アイルランド亂起る大官等女王に説き伯を擧げてアイルランド總督と爲し赴き討たしむ伯は容易に大官連の陥罪に陥りアイルランド人〇邀撃を蒙り狼狽してアイルランド人と媾和し遁れ還る女王大に怒りて伯を其家に幽閉せしに伯は深く之を怨み無頼の徒と謀りロンドンに於て反を圖る事露はれ反逆の罪を以て死刑となれり先是嘗て女王はエセックスに一の指環を與へ他日非常の事あらば該指環を女王に致すべく何等の情願たりとも聞届くべきを約せりされは女王はエセックスが約に従ひ指環を送還して哀を請ふべきことを期待せしに指環は終に來らざりき後四年ノッチンガム伯爵夫人病篤し強ひて女王に請ひて其病床に來らしめ驚くべき自白を爲せり夫人の言に依ればエセックスが反逆の罪に問はれて獄に下るや獄窓の下に一少年の在るを見之を呼びて指環をノッチンガム夫人の姉妹なるスクロップ夫人に致し女王に傳献せんことを托せり然るに少年は過つて之をノッチンガム夫人に致し夫人はエセックスの敵なりしを以て之を差押へて女王に献せざりしなり女王は夫人の告白に因て始めて指環の終に來らざりし理由を了解して悲痛措く能はずして曰く神は懺悔に因りて罪を赦し給ふと聞けど朕は決して汝の罪を赦すこと能はずと女王は此事ありて後食を斷ち幾くも無く殞落し給へり

Government of the people, by the people, for the people, shall not perish from the earth. 合衆國
大統領アブラハムリンカーンが南北戦争に方り Gettysburg に於て爲せる演説中の語なり(一八六
三年十一月)

Gross never grows where my horse has trod. ローマ帝國の晩年歐洲諸國の恐怖たりしフン王アチラ
(四〇六一四五二)の廣言なり

二 夕 色 の 我

山 本 白 聲

二夕色の影合へる灯の町を行く二夕色の我かくもあるらん
とりとめて云ふこともいろ／＼の作りごととして行くが悲しき
何赤き夢よりつくまぼろしが我をどらふる十月の風
舌火傷^{ヤハ}に心むすぼる霧深き町に注げる灯のねたましき
夢つくそのあとの日はいと淋しかくまで我はどらはれしかな
黒檀の机にうつる我が腕の青きを圍み夕とはなる
自は言はずと誓ひ一言も言はずに別る午後のさまよひ

果物の赤く映れる京極の灯をなつかしみ幾度か行く
かくてあらん夜の京極をさまよへる近頃になきさめたる心
裏町はかくまで淋し人ごみの京極を出てつく／＼思ふ
この心いろ／＼に見ゆなげ出せし身に腕つきて灯を見てあれば
食後只座りてありぬ奇しき虫障子に這へば氣にかゝるかな
山門は巨人に似たり曉方の京の町をば包める露よ
秋は淋しかく云ひながらとさ／＼にハモニカを吹く君なりしかな
隣室に電話のかゝる音をきゝ興がりてゐぬ十月の夜
静かなる夜の雫を聞きながらこのごろの我思ひつゝくる
縋帯をしたる女の馬車にゐて秋の温泉路は雨そとどふる
晴れやかか一日なりけり何事も手につかざるがなか／＼によし
窓柵に顔差出し覗き見るふと何事か我を嘲笑す
新しき切符の面のローマ字を興がりて讀む君なりしかな
マンテルの襟に包まれ夕暮の明き町を行くはいとよし
なげやりし足袋のこはせの灯に光る見つゝ今宵は早くより寝ぬ
我は今何思へりと人多き廣坂を行き或る顔に湧く
風吹けば風鈴の鳴る秋の夜は氣まぐれ者のさめく聲か

欄干に白きタオルの幾筋もかゝれる朝の町をめで行く
 大海に接吻するは心地よし眞白き朝の砂のひろがり
 手袋が欲しさうなりと抽斗をさがせば古き手紙さけたり
 本棚を部屋のあここ、置きかへて嬉しがりたる我なりしかな
 奥歯よりふと出でしものかみしめば苦き味する淋しき夕
 部屋にランプアフレクの暗き中にゐて海鳴をきくわけなく淋し
 けたゝまし電車の鳴れる音をきゝふと目醒めたる我をあやしむ
 病院の黒き板扉を取り巻けるポプラの葉の淋しきふるひ
 着換へたる白きメリヤスの袖口にインキのつきぬもどかしきかな
 何となく物足らぬ夜よ置時計止りてありぬ死を語るごと
 少し角ある言残し歸りたる何とはなしに心ごよめく
 秋の空廣く澄みたる死の肌にしふれたる心地こそすれ
 青き灯をひとり寂しむこの頃の我の心をかたちづくらん
 我が誓ひ余り弱かり一時はかくてもあれと誓ひしものを
 騒しき君送り出す秋の日は審判者似てふれ難きかな
 ふと庭に落ちし蛙の暫し間を動かざる似て我は考ふ
 竹藪の前にさびしさひろがれり秋の夕を我歩むとき

淋しくも我は立ちたり加茂の水何か囁く暮方の空
 汽車に乗れば何とはなしに心地よし様々の顔をかしけれども
 マッチの燃えさしのくひ昨夜のまゝ机に残るうそ寒き朝

……沈んだうちに派手やかな音のある聲が、静かな軽い波動で、暗の夜に揺曳いて、穏やかに眠つて居る倫敦を美しい夢に誘はうとして居る、……バイリヤメント巴力門のビッグメンは實に倫敦に於ける眠と活動と死を支配する超自然の響である。祇園精舎の鐘が單に無常を教へたるに比ぶれば、ビッグメンは倫敦人にさりとて更にありがたい鐘でなければならぬ。……活動の都の鐘は、諸行無常では治まらぬ。活動と死とに安慰と節調とを興ふるビッグメンは、倫敦になかるべからざる鐘である。もし此の鐘がなかつたら、倫敦は全く素然たる活動と眠とを味はねばなるまい。——長谷川如是閑「倫敦」

僥倖といふのは、自分には自分のことを氣をつけて、敢て人の事に干渉しないことだ。一生懸命に働いた夜業のことである。朝六時に起きて、毎日二圓取れば壹圓だけでやつて行くことである。約束を間違へなかつた事である。

秋雨と笛

慶王生

六十

好きなのは「湯島詣で」の龍田だ、無暗に新らしかつて人より無邪氣に突き込んで喋り散らす所に男としての動かす可からざる誇があるんだと君は云つたね。僕だつて無論生白い神月より乃至は鬚むちやくちやら荒尾なんごより遙に龍田の飾り氣ない凜とした氣分を好くよ、けど神月だとして、不遇な優しい母に對してのあはれになつかしい追懷さへなければ湯島などに親しみもしなかつたらう、否、未通氣な、女にからまつてやさしく育て上げられた彼の頭腦には寧ろ湯島其者の存在さへ疑問に屬するだらうではないか、況んや、薄く垂れた柳の木をや、御神燈をや、細顔の凜とした品のいゝ横顔をや——すつきりした弱腰を固く締めた桃色縮緬の扱帯をや。

島田鬻にも文金高島田もあれば、鹿の子斑の潰し島田もあらうもの、さりとてはさりとては兄上も大人氣ない。

けど僕だとして無論自分の身の上位を知つて居る、考へて見た事もある、が要するに不幸は不幸、駄目な者は駄目としか説かれないではないか。残念な事には僕は、斯程の窮境に立ちながら、御上品な詩やら歌やらを作つて此惡辣な窮迫を茶化すだけの雅趣と能力、君の所謂詩才などは微塵も持つて居ないんだから、全然自分の進む可き道も知らずに、唯成るやうにしか成らない運命の手に、おとなしく導かれて往くより外に何とも仕様がななんだよ。唯僕は僕で良い事とも悪い事とも判断する暇のない位に忙しく其の日其の日を送つて、終には限りある自分の精力を思ひつき

りよく消滅さして了ふ積りに外ならない。畢竟僕なんざ、闇から闇へ葬つて貰つた方が世話はなかつて、いくら優しだつたか知れない身の上なんだからね。

君の忠言も臆には應へるがさりとて思ひ返す程の氣も起こさして呉れない、よし思ひ返したとて氣難かしの僕の氣に入る様な道が何處にあらう。島も田上も何だかグダグダ言つて呉れるが、やくざな下らない友達などがいくら彼れ此れ言つたつて、眞のない言葉なんか逆も此じねくれ切つた僕を動かすには足りないんだよ、それも既に友達離れのした君からても何か言つて呉れりやともかく、更に君が、僕の何れの道に進む可きが最も得策だかを指示して呉れて、然かもそれが自分の胸にも落ちるやうなものならさにかく、でない以上僕は、矢張り、今の状態を續け得る限り繼續さして往くとより外に考へ様もなさそうぢやないか。金が詰まれば夫れ迄の事、それで愛想が悉きたら、生じつか共倒れにならうよりサツパリ手を引いたが君の爲にも得策だらうと僕も信ずるよ、随つて僕も厭な手紙、睡い目を擦り擦り良くもない手蹟をぬたくらす必要もなし、結局其の方がいくら樂かも知れないと思つて居るよ。

終に君が永久の健康を祈る、尙僕といふ男は自暴で死ぬ程氣の良い男ぢやないから、其積りで居てくれ玉へ、序に伯母さんにも宜しく、失敬

斯様な手紙をよく恥かしくもなく、づけく自分を送つて寄越す程彼は墮落して居るんだ。自暴が書かした自暴で死ぬ男ぢやないといふ語は遂に彼岩田をして疑問中の部類から離れさせて了

つた。だ、寧ろ、彼が神月の跡を追ふのが彼にとつて最良の策と信じて居る事を表すものと云つて差支へなからう。

無論彼には複雑な家庭の事情もつきまどつて居た、金銭かねの苦勞だけでも並大抵の事ではなかつたらう、けぞ人一倍かしこい彼を此處まで思ひ込まず第一の原因とも見るべきものは授業料滞納の爲學校から除名された事である——自業自得とも言はゞ言ふべきであるがまた、金銭かねにまかせぬ彼の裏面を見れば、實際愀然な境遇にあつたんだから——。實は彼の小學時代、中學時代乃至は今の高等學校時代を通じて抜群の成績を表はして居る彼の頭腦を惜しがつて親切にいろく云つてくれる人も決して少なくはなかつたのだ、然し頑固一遍な彼は、いかに抜群の成績であらうと、惜しい頭腦であらうと人の助けを受けてまで勉學するのを屑しとしなかつた。

要するに彼が今の果敢ない運命に立ち至つたのも彼が人に救はれるには余りにかしこ過ぎたからであつた。

よく彼自身も言つて居た、「人が悪くなくちや此辛い浮世に何の面白い事が出来やう、彼方を向け、へい、此方に向け、へいといふ様なそんな男が何になるもんか、僕なんか寧ろ人の悪いのを誇として居るんだ」と、彼の人の悪いと云ふのは俗に云ふ人の悪いとは特殊の異つた意味を持つて居たのだ、然も彼は今、其彼の所謂人の悪い人になり澄まして居るんだ。

彼の父なる人のふとした心得違ひから、彼の母と其妹との間に忌はしい訴訟沙汰まで起つて其結果彼の當然共に居るべき母と別れて居るべからざる彼の母の妹、即ち叔母と共に氣難かしい父

にかしづかねばならぬ事になつた彼の境遇も實に憐むべきものだ、原はと言へば父の多淫な爲——不倫な行爲のために、父の父なる人が約三十年間心血を濺いで漸くかちえた財産も名譽も徒に蕩盡され終つて、彼の身邊には、不機嫌な父と、すばしこい繼母——所謂彼の母の妹——との毒々しい口小言と、生に追はれて、絶え間なくつき纏ふ債鬼の聲のみであつた。彼の母は其後彼の父と現在血を分けた妹との余りと云へば情ない仕打を、或は怒り、或は嘆き、延いては其身の不幸を泣きに泣いて暮らした揚句、遂に眼を病んで盲目となつた、然かも今では其泣きつづれた眼で按摩渡世とまでなり下つて、味氣ない世を——唯一人の息子が、今に何とかして呉れるだらうといふ果敢ない望みを抱いて、悲しく過ごして居るどか。

自分は岩田の手紙を受け取つてから三日といふもの、寢ても起きても彼の事のみを考へ續けた。三日目の晝頃ふと自分は、自分の中學時代の友——彼とも親しかつたが——の父が其友の十九になつた折、ふとした風邪が原で僅々一週間足らずの病らひで世を去つたのをひどく悲しんで、それ以來、誰か頭腦の良い人で、學資に困る人を一人世話したいと口癖のやうに言つて居たのを思ひ出して、それとなく頼みの手紙を出した、そしていづれ二三日中に參堂して委細をお話するからと書き添へた。

手紙を出して了ふと何となく肩の荷が下りたやうな氣がして頭腦も變にぼつとした様な氣持がする、何となく考へたいやうな、考へたくないやうな。

机に凭れて煙草を吸つて居ると自分ながら魂の抜けた人形のやうな氣がしてならない。

確か小宮豊隆氏の「寒き影」だつたと思ふが。

「床の間に置いた菜の花に春の匂ひを嗅きながら机の前にぼつ然と座つた皓一は、大方白い灰になつた火鉢の火を見るときもなく煙草許り吹かして居る。こんな心持が何日まで續くるやら、續く間は何にも仕たくない、何にも考へたくない、これで仕たと考へたと何の甲斐があらう。さう自分に言つてみても、何か仕なければならぬ事のある様な、考へなければならぬ事のある様な氣がしておち／＼と落ち着かぬ。

と斯う書いてあつたのは。

今の自分の心持は全く此通りだ、幾何技巧を弄したとて、之より以上に今の自分の心持を云ひ表はす事は出来まい。

おち／＼と落ち付かぬ僕の心は、殆んど無意識に荳を袋から抜き出さして居るのだ、そして灰を一度クルリと掻き回す、それからやうやく火をつけさして、口の側までせり上げてくる。ヒツキリなしに吸はして、遂々吸ひ盡すとシユッと音のする灰吹の中へ其の吸殻を投げ込まず、斯うした事を繰り返し／＼今の僕の心は、無意識ながらも殆んど強制的に感覺のない僕の手によらして居るのだ。

煙草の吸殻が灰吹に一杯になつても、未だ其の上へ上へと載せて見た、如何工夫して載せても落ちて了ふので夫から後ののは火入の側へ寄せて灰に突きさす事にした。母の秘藏の品を無理から願つて貰つた特別小形な古伊萬利の火入は丸い縁を並行して行儀よくさゝれる吸殻の爲に、だ

んだんと面積が狭くなる、もう一重も並んだなら火がつくに違ひない。

「寒き影」に表はれた皓一、今の僕の心と微塵も違はぬ心を持つて居る人、字こそ違へ矢張り「こう一」には違ひないと、自分——自分の名は孝一である——は漸く煙草をやめてぼつとした頭腦を抱へながら机の上にあげて思つた、頭腦を抱へた兩の掌が痙攣的に震ふのがシンミリした秋の情緒を語るに此上ない道理の様に思はれた。

夏の立つた翌日、不意に暑くなつたので、あたふたと障子を引つ外すして三尺許りの簾を二枚並べて掛けた。その簾が、それから只の一度も動揺する事なしに、初秋の薄ら寒い此頃、白つばい着物はネルでもセルでも見すばらしい見える今になつても、矢張原の儘。

昨日の晝頃から降り出した小雨が葦の一本一本の隙から吹き込んで、白木の机の上に、一つ一つと汚点の敷を殖やして行く、でも自分は決して簾を取つて障子を入れやうとは思はなかつた、何故か、自分は雨が好き、秋の夜の射る様な小雨がとりわけ氣に入つて居た。

サラ／＼と狂女の亂れ毛を風が思ふ存分なぶつて居る時のやうに何とも知れぬ「ものゝ囁き」を眼をつぶつた儘聞いて居るのが好きだつた、そして斯んな時、無心に雨を聞いて居る夜に、誰か、此照り付く様な洋燈を、足音もさせずに、スーッと持つて行つて呉れる人はないか知らず自分はよく思ふ。

闇の小雨を通して往來する人の足音が手に取るやうに耳に入る。

道一つ隔てた向ひの家の二階で華やかに笑ふ聲が刹那に乘せられてホッホッホ……と響い

て来る。厭味のない刹那の感觸にそゝられて自分は簾を捲つて顔を出した、灯を眞前にして笑ひかけて居る桃われが、ゆらくと、然し瞭然と障子に浮き出て居る。

「ひどい人だなあ」

聲と一緒に大きな手がニュッと突き出されて桃われの手から本みたやうなものを奪ふ、灯を中にして座つて居るらしい男の聲が呟く様に聞える、うるんだ聲なので何を言つて居るのか自分にはわからなかつた、がともかく、自分を主人公とした小説が出て居る——それを桃われが笑つたのが氣に障つたらしい口振だ。

「是は作り物だからね」と漸く言ひ終つたらしい、それだけが瞭然聞こえた。

「だつて柄にないんてすものッ」

桃われはまた笑ふ。

門の開く音がして、男の低い聲で訪なふのが聞こえる。漸く三日前に来た下女がまご／＼して居る間に母が玄關に立つた。

「まあ吉植さんですか、ハイ主人も在ます、さあ何卒ぞ」

洋燈が座敷に燈げられて客のひそやかな足音が、玄關から六疊、六疊から座敷と次々に迂り込んで往く。

吉植、吉植、忌はしい再犯者ではないか、今日保釋になつた事は今朝の新聞で見たが、ヒステリカルな母の神経を高ぶらすまいと、母には態と告げなかつた、其今日出獄て来た人が、その晩

既に私宅へ訪ねて来る、斯う考へて見ると自分は何がなし欺かれた様な氣がしてならなかつた。

今度は私自分でも全く覺えない事なのです、御承知でも御座いますやうが、六月の十三日のもう日暮でした、娘が丁度貴方から頂いた葉鶏頭に水をやつて居ます、巡査が參つて、一寸尋ねたい事があるから一緒に來て貰ひたいと言つて來たんだそうです、留守だと云ふと呼んで來て呉れつて言ひますんで娘はもう恐がつて、急いで呼びに來たんです、私はあの時生花の先生の所で牡若を活けやうと思つて、葉をしごく、もう五六本も折れつちまちで何だか厭な目だと思つて椽側へ出て居る處へ娘が呼びにやつて來たんです、そして巡査が來て尋ねる事があるから一緒に來て欲しいつて待つて居ますつて云ふんでしやう。もう一度あんな目に逢つて居るもんですから巡査と聞くどドキッとしました、ハイ誠にお恥かしい次第です、それから娘と一緒に私宅へ歸りますと、何だか巡査が妻に押入を開けさせて探して居るやうなんです、考へて見ましても何も之ぞと思ふやうな事はなし、多分此前の事件に就いて聞く事があるんだらうと思つて其儘巡査について參つたんです、實際私宅の事なんか彼れ此れする暇も何もなかつたんですよ、そしてそれつきり—今まで家へも歸して呉れませす—まるで夢みたやうでした。

私の居ない中は誠に御親切に度々訪ねて下さいまして、もう何とも申し様がありません」
 濕やかなうるみ聲の後と前とがやゝ鋭く自分の耳を打つ。

暫く間を斷つて居た小雨が、また降り出して、消えかけた机の汚点がまた新になる。

「何分、あの事件について、法律上の知識を持つて居るものは、全く私一人だもんですから……。

語尾が怪しく震へては定つたやうにすゝり泣きになる。

「もう甘く片附いて居たんですけど、あの重野に相談をしたのが悪かつたのでした、畢竟、今度の事もあの重野を捕げる爲に起つたので、私や井原などは、まるで飛沫を受けたんです、ハイ、保釋も拾圓ですから、今度こそは大丈夫なんです」。

父は何時までも何時までも無言、母は「成程」とか、そうせしやうとも」とか云つた様に極く簡單な語で受け答へする、それも父の無言が餘り冷淡なのを取り繕らう意義に過ぎなかつた。吉植はなほ語りつゞける。

「實は、二度目だもんですから、人様に申譯もなく、姉などはもう狂つたやうになつて——生來が氣儘な、生れを鼻にかけてる人だもんですから、尙更人様に面目ながつて此頃はもう一生戸外へも出ないなんて申して、誠に自業自得とは云ひながら全く私は立つ瀬がないので御座います、ま然し今申し上げたやうな次第で、今度こそは大丈夫なんです、其證據には重野などは毎日々々喚び出されて居るんですけど、私は未だ漸く三度調べられた許なのです。之から見ましても全く——」

又しても又しても泣きじやくりになるのが自分に云ふべからざる不快の念を牽き起さした、で自分はいつと立ち上つて梯子段をギシ／＼鳴らしながら階下へ行つた。

昨夜火を取りに來たのを竹と二人で逐ひまわして漸く捕へておいた螢籠のあつたのを幸、入れ

て置いた露虫が六疊の椽側でしきりに鳴いて居る、やゝ庭らしく作つた桓根に裏枯れた野菊が倒れそうになりながらそれでも少しは花もつけたのが、雨の夜のほんとりとした明るみの中にクッキリと浮んで居た。

椽側傳ひに行けば吉植の顔も見ずに用を足す事が出来ると思つて自分は靜かに二三歩許りつと椽側を迂る、と、初秋の冷たさが手痛く素足に染みて自分は思はずづとして身震ひをした。

自分が便所から出た時には吉植は歸りの挨拶をして居た。急いで梯子段を昇り切つた。丁度其時、吉植は六疊の障子を開けた、段の頂上からすかして下方を見ると吉植の蔭に立つた母の持つた洋燈の光が鋭く六疊の冷へた空氣にさしこんで、やゝ紫が／＼つた青い線を幾筋ともなく畫き出す、いゝ色だなと思ふ拍子に、赤ら顔の吉植が顔を出した、後ろ向きに光を受けて、殊更に長い腫毛が見える。

吉植が歸つてから父と母とはやゝ暫く泣く様に話して居た。やがて夫も終つたらしく、只折々思ひ出したやうな竹の咳拂ひの外は階下は、常の寂寞にかへつた。

雨は稍大降りになる、雨に濡れる様に窓から顔をつき出しながら自分は道の方をすかして見た。按摩の笛が調子よく鳴る。

矢張秋の夜の雨はいゝと自分は心から悦にいつて、窓に倚りながら、按摩の笛を幾度か幾度か聞き直して居た。

(III)

二人が、小徑を大曲りに曲つて行つて、こんもりとした森の中から、ひよつくり御城にぶつつかつた時にラントローウは吃驚して、ちつと立止まつた。南獨乙に住んでる人達は若いうちから斯様な景色には馴つこた。フランケンや、シュワーベンでは、こんなに一二時間も要る谿を行けば屹度城たどか、さもなければ、少くとも破壊れた塔と、半欠けの門が、谷の上の方に見へない事は殆ど無い。昔、山河の自然の地勢と、御負けに犬の糞程在る田舎貴族共が、獨立主義だつたんで、斯様云ふ御城を拵へる様に仕まつたんだ。然し、僕達の祖國(北獨乙)には斯んな古蹟は少つと許かしか無い、廣々した平原は、南國の様に岩や横に出張つてる山脈か自然の守りになるのは異つて、ちつとも自然の守りには成りや仕ない。それに、平つ坦い土地には、此んな城壁があつたにした所か、段々速く頽廢しちまう許りだ。隣所の奴等は、有價値の石を馴れ合つて分配を仕ちまつて、奴さん達の記念なんかは平原を吹き通す風が吹き飛ばしちまつて、からつきし思ひ出しも何んにも仕ちや居やしないって譯だ、だからブランデンブルの青年(ラントローウ)には面と向つて此の古い御城を間近かに見るのは如何にも物珍らしく思つたのだ。そんな工合だから、陰氣な奥行の深い城門を、此の古い御城の御客様に成る事になつたんだと思ひ乍ら潜つた時にはいよ／＼驚いちやつた。だが直きに、畫の様な、眺望を見ると、最う外の事なんか、これば

かしも頭に浮ばなかつた。古ぼけた青黒い望樓の南側は、頂天から御壕の中迄で木蔭に包まれて居る、城壁の裂け目から、小枝や緑い蔓草が芽を出して居る。廣い葡萄棚は御城の門を取り巻いて居る、其の柔かい葉と卷鬚は、優しい力で錆びた跳橋の蝶鉸と鎖に搦らみ付いて居る。御城の右側の方は鬱蒼とした森か在つて眺望の邪魔だが、左側の方は城壁越しに、奇麗な豊饒なネッカル谷の深淵から、流れに沿ふて居る大きな村から、小さな村、遠い葡萄山(山腹にある葡萄畑を云ふ)を越へて、すつと向ふの翠々とした山脈から、思ひの儘に眺められる。

「あれが、あたくし共のチーヤベルヒ(城名)で御座いますの……此の近邊が、まあ御氣に召した様でらっしやいますのね。で、あたくし共の佗び住居と、氣持の悪い荒れ城が、氣味が悪く御成り遊ばさない様に、ちよい／＼外を窓から御覽遊ばす様に御勸い致し度いで御座いますわ」

と御嬢さんが云つた。

「貴方此の古る御城は氣持か悪い城だと仰有るんですか？」とラントローウは叫んで「木蔭は茂つてますし、門の通り路には紋所が付いてますし、此の跳橋、此の壁、此の御壕のある此の御城よりも最つとロマンチックなものが、何んか御座んせうか？、ブランドワルデンの城か、何んか他のスコットの小説にある城を見る様な氣持かしませんで御座んせうか？ シッキンゲンか、ゲッでも、今が今、御城の門からやつて、來さうぢや御座んせんか……」

「只今は、せいせい、チーヤベルヒの人の位のもんで御座いますわ……」

〔註〕前號を見ざる人の爲めに) Sickingen Getz は古英雄なり。故に Von diesen Jimpun spult nur noch einer ……と、ラントーウが訪問なす事を洒落れたるなり。〕

と御嬢さんには、こゝく仕乍ら、

「でも又た、まだ其の内御一方丈此の不幸な城の内へ怪けて出て下さいますわ。此んな風な塔や尖塔は、小説で讀みますとか銅板畫で見ますと、妾くし大變好きなので御座いますのよ、でも此の城の内に住居いますのは大變寂しいので御座いますの、で、冬などは風が此の塔に當つてヒューと唸りますし、青いものと申しますと、あの、ほら、彼所に御座います塔の下のオランダミツバね、あれより外には、なしんにも見へません時などは、そりやあもう………妾くし、思い出します度毎に只今でさへゾーッと致しますわ。さあ何卒騎士様、御姫様が御手づから貴郎様を城内へ御案内致しませう。」

二人が入つて行つた庭は陰氣な日影澤山な庭だつたので。少許と御客様の興を削いだ。ラントーウは通り脱げる時ぐるりと振り向いて、馬場にしちや未だどうも少し大きさが十分で無い様だと云ふ事に氣が付くし、半崩れの塔の破片が今にも城壁の上へ落つち左様に成つてるので慄つとした。厚い城壁を噛み破つて、谷を自由に見晴らせる様にしたタイムの鋭い齒に吃驚した。そして、修繕も何にもしてない窓から隙間風がヒュー／＼吹き込む曲階段の上へ來た時に、従兄妹が此の家は未だ住めると云つた話を成る程と合点した。七八匹の犬が煉瓦を敷き詰めた大玄關で、御姫様に親し想な鳴聲をし、尾を振つて挨拶をした。隅つこの方に鎖で結ながれて棲木に止まつ

て居る猛鳥が、嫌な叫聲を發て、翼搏をした。

(註、伽嘶を洒落たるなり)

「これが宅の玄關、之れが召使共、貴郎か魔法を解いて御遣わしになれる魔法に掛つて居ります皇子と皇女で御座いますわ」

と、アンナは微笑い乍ら動物を指して云つた。暫して、

「さあ、入りませうちや御座いませんか、此の部室に父が居りますわ。」
と眞面目で付け加へた。

アンナは丈高い重い開き戸を開けた。アントーウは古風な佛蘭西式に裝飾である室越しに *terwölbing* (圓天井の張り出し窓) の内に老人か一人座つてのを見付けた。老人は新聞に見入つて居るらしかつた。娘の拶揆で老人は振り向いて、見知らぬ人を見た、娘が姓名を告した時老人は立上つて、のそり／＼ではあつたが確固した歩調でラントーウの方へ行つた。ラントーウは背の高いいかつい姿を吃驚し乍ら見て、不圖、高く匂い登つて木蔭で古るさが感付ける、あの多年崩れもしないでた望樓を回想した。六十五歳の寄る年波は額に彫まれ、灰色の薄毛が額顚の周圍に下がつて居、頬鬚と眉毛は銀白にはなつて居るが、眼は炯々として、曇りが無く、頸は、未だ若かつた時の様に眞立に顚を乗つけて居る。又甥のラントーウが握り返へせない程強い握力が在つた。

「良くシユワーベンへ御座ったな。義妹さんがあんなを出して遣したのは良い思い付きぢやつた。」
と叔父は沈んだ力のある聲で云つた。

チーヤベルヒでの接待は斯んな調子だつた。然し叔父さんの待遇振は、こんな工合に親しく隔
の無い待遇振だつたが、それでもラントローウは或る確かな不快の念がどうも取れなかつた。ラン
トローウは全く叔父さんを勘違いしてたのだつた。父の話通りに兎狩をしたり、好き好んで百姓共
の争の調停をしたり、馬に乗る話が大好きで折々友人や近隣の人達と一杯やり過す、想氣は
無いが悪る氣の無い老寄つた華族様に會ふ事だと信じてた。で、二十五年と云ふ年月と、其の永
年間廻り合せか悪るかつた叔父さんが如何風に變つたか知れないつて事に氣が付か無かつたのだ、
顔色を讀んでる様にジーツとラントローウの顔を見詰める叔父さんの沈着いた生真面目な目付だ
の、殊更ぢやないが、ラントローウの今迄の生活行動を根掘り葉掘り七綿密く質問たり、ラント
ウが話してゐる時に、時々口の邊に冷笑を浮べたり、する事や、又重々しい舉動が、馬鹿にラント
ウは窮屈だつた。

叔父さんか仕て呉れる様に自分も御叔父さんに親しく仕様つて勇氣は起なかつた、課長様に御
目通りを許された新參の腰辨の様に思へた、亦もやシユワーベン貴族に豫期が脱れた(前號参照)と
云ふ事が少なからず不快だつた。

從兄妹もラントローウか考へてた女とは全く違つてた。シユワーベンの娘は斯んな風だと人が賞め
て話したあの可愛らしい自然性と、あの飾り氣の無い性質は、アンナにも在りは在つたが、アン

ナの飾り氣の無いのは無識だからぢや無くつて、立派な確かな調子合ひから來てるし、アンナが
談話事は卓越な教育を受けてる女だつて事を證明してるから、智慧は頓智にしろ高尚なのにしろ、
自然的に、先天的なの、様で、付け焼及だの努力で顯わしたのとは決して思へない。ラントロー
ウの癢に觸つた事は、アンナが疾うに初めの間にラントローウを見抜いちまつたらしい事だつた。アン
ナはラントローウが出来る丈けアンナにする御追従は、茶化しちまい、四角四面な禮式は、知らん
顔して避けた、例へば、ラントローウが、物柔らかな伯林兒は、こんなもんだつてのを示せて遣らう
とすると、アンナは何時もラントローウを本當に、ラントローウ殿って云つた。そんな風だつたが然
しラントローウは之れ丈けの身体の動作、顔、姿、聲、の調和てる本を一度も見た事が無かつたつ
て事丈は認めない譯には行かなかつた。アンナの Wesen (行動、性質) は總てアンナが今丁度着
てる通常衣の様だ。其の通常衣つてのは單調した地味な色合のやつなんだが、夫れでもアンナの
美しい娵聘とした姿を素敵に引きた、せて。趣味多く華優く見せる、又た夫れが素敵に地味な
衣服に奥妙な魔力を與へてる。これは、ラントローウが思い出せる範圍ぢや、未だ流行雜誌にも決
して説明して無い御粉飾の秘法なんで、十分教育があるからつてよりも、調和のとれた精神の徴
象と思われた。

ラントローウはアンナがこんな風になつた理由は御叔父さんと、自分か初め案内された部屋の工
合で知かると信じた。壁と家具の華麗なのが目に影いた、今は色が褪めてるが、百年も前には賑
かしく思われた。厚織の純帳か、鍍金が今は暗綠色に變つてる留木で押へてある、巧華な彫刻が

してある弓型脚の幅の広い肘掛椅子、鮮明な色糸で巧妙く鸚鵡と花鉢と、すゝと昔に死んだ愛犬が縫縮になつて敷物が、飾つてある。きんきに祖母さんや曾祖母さんが冬の日を幾日もこの七面倒臭い仕事に掛つてたんだろ。又該作品が祖母さん達は人間の趣味が考へ出したもの内が一番完全な品だと思つたかも知れないが、今ま孫や曾孫達の目から見れば、尊い追懐の材料にならないとしたら、立派な物でも何んでもありやしない、馬鹿げ切つた、可笑なものだ。だが之等の品物も叔父さんの氣高い姿の前で見ると、古色があるのと永年の習慣で神聖に見へた。チャーヤベルビでは流行變遷なんかつて事から超然として居るのを觀、父から種々叔父の不幸な事や不遇の境遇を聞いたのを考へ合す時は、暫時の間だつたとは云ひ乍ら、周圍にあるものを奇怪なものだなど思へたのが恥かしかつた。又アンナや叔父さんが、嚴肅した品の良い衣服を着ても居たら、尊敬しなまや居られない様な「清貧」を感じた。夫れ所ぢや無い、壁や家具や、又此のびか付か無い粗末な室内着服の前へ對して、自分の最高度にきつちりした當世風の服装を見ると、自分は、智惠の在る人なら馬鹿くしいつて雲煙看過い妄想、に支配されてる馬鹿者の様に思へた。

こんな事がチャーヤベルへ宿つた初めの晩にラントーウの心裏に與へられた印象だつた。つまり眞面目に此の印象を受けてたのだつたか知れないが、城の時計臺が八時を報つた途端に室の終端の觀音開扉が颯と開いて、七ツ下りの縁取の上衣をだぶくに着てるポトイが入つて來て三度小腰を屈め、眞面目腐つて、

Le Souper est Servi.

(晚餐の準備が出来ました)

と言つた時には、ラントーウは笑はずには居られなかつた。叔父さんは生眞面目な顔して小腰を屈め乍ら、

Ste vous plait.

(御進意がつたら)

と云つて容色良しのアンナに腕を借して徐々と食堂へ行つた。

四

食堂の觀音扉を見たのと、食堂を一寸見た丈で、ラントーウは種々の事を回想し出した。ラントーウの母は、自分の父のシユワーペンにゐる不運な城の話や、自分の死んだ祖母は、某富貴の御老中の御姫様で、其の人のチャーヤベルヒ家へ御持參物だつた素敵も無い立派な品物等の話をする時には、此の天地創造の畫天井や、雲間から太陽が出てる様な工合に天使がブリエルが吊り提げて居る重い冠狀燈の話や、厚地絹の黄色い純帳の話が度々出たものだつた。ラントーウの母は小供の時分に、此等の贅澤品を古い物だからつてんで尊敬つて見て居たものだが、それからもう、少くとも三十年から四十年経つて居る。

叔父さんのチャーヤベルビ男は、食事中に、ラントーウか此の部室を物珍らし氣に見廻わして居るのを見て、

「之れが家族室ぢやよ、ずつと昔、園亭と云ふてな、俺の御先祖達は此處で飲酒やるのが慣習ぢやつた。俺の死んだ祖父は、こんな工合に室禮たり飾り付けたりしましたぢや。祖父は多趣味

な人ぢやつてな、若い時分永らくルードウィッヒ十四世に宮仕へをしてみましたぢや。祖母も由緒ある貴婦人でな、二人共城内を斯んな工合に仕切つたり飾り付けたりしましたぢや。」

「ルードウィッヒ十四世の朝廷に？」とラントーウは吃驚して叫んで「最う夫れから大分、年代で御座いますね、其の時分から、まあ何人御客様が此の客間へ御來でしたらう！」

「澤山の人達と長い年代ぢや……。いや嘗はチャーヤベルヒも榮へたもので、御客連中は帝國の大々名の御客になるのと同じ位に心得たものぢやつたよ。未だ騎士制度が榮へ居つた間は、此の城中の生活位に愉快な生活は何處へ行つても無かつたもんぢやつたよ。其の頃は俺共の巾は利くし、言ふ事は鶴の一聲ぢやつたよ。俺共でも佛蘭西までも皆同じに貴族で、男爵と云ふものは自由なものでな、自分の御主人様と尊めて居る皇帝と神様より外の者は一切何も尊ばなかつたものぢやつたが、今は……。」

註(古獨乙に於ては男爵は皇帝の直臣にて、王の下に非らず)。

「御父う様！」

とアンナは、父の額に青筋か立ち疳癩玉が破裂する前觸の赤黒い色が頬を染めた時、言を挿んで、父の手を捕まへ乍ら優しい調子で

「御父う様、此の御話は御止め遊ばせよ、ね、此の御話は御毒だつてのを御自分でも御承知ですわね!!!」

「馬鹿娘」と老人は中つ腹だつたが又艶やかな娘が請願む聲に動かされて「永久其の話を仕て

来て何んともない俺が何故体に觸るのぢや？、ラントーウは、俺共の今の境遇しか知らんのぢや、大騒動の眞最中に生れ居つて種々の制度がもうずつと以前に變つて仕舞つて居る土地に育つたのでな、ぢやが生みの母の御先祖様が何んぢやか、はつきりと想像か付かんで居るから俺が教へて遣らうと思つとるのぢや。」

男爵は筒様云つて、定紋打出しの銀蓋が脱してあつた大きな杯を取り上げて飲酒け、永い御談議をやる勢を付けた。たがアンナさんは心配そうな、何卒つてな目付きで、ラントーウに父を目示した。ラントーウは此の合圖を呑み込んで、此の話から御叔父さんをさらさせ様と努めて、未だ杯をテーブルの上へ置かない前に、

「御尤です」と口を挿んで「プロシヤでは事情が異つて居りました、が然し、私の國のプロシヤと同じ様な國が歐洲に御座いませうか、如何で御座いませう？他國は面積と人口がずつと勝つて居るとは認めますが、あんな小っぽけな國で道義が勝れて居ります國は決して何所にも無いと存じます、近代のヌバルタで御座いますね。風土氣候が良いのでそんな偉大なものか出來たのではなく、偉人の天才がプロシヤを創りましたのですな、偉人共は居睡りして居る力を呼び醒す事を知つてますし、又た、如何な位置を得なければならぬと云ふ事を國民共に、教へましたからな。又プロシヤ人になつたと云ふ事は、プロシヤが成立したと申す事で御座いますからな。」

老男爵は話を靜かに耳を濟まして聞いてたが、最後の言葉を聞いた時、箇んな皮肉を云つたのでラントーウは顔を赤くした。

「隣りのウ・イリー將軍の息子は、御前の話を聞いたら、オ、獨乙國よ、獨乙國よ、御前が分裂したら御前は不幸になると世間ぢや思ふて居る、と云ふぢやろ。俺しも亦若い時分二三年服務したよ、八十四年の戦役ぢやつた。其の時分は未だ兵士は王事に一生懸命ぢや無かつた、それぢやで俺は王事ちう事を知らんがね。だが近い内に隣のウ・イリー將軍が俺を訪ねるぢやろから、御前は將軍と王事に就いて話しなされ。」

「夫れは兎に角、佛蘭西人に對して御不快と云ふ事とナポレオンに對する御惡くしみ、と云ふ主要な点が私と一致して居りますのが、しんから嬉しう御座います。宅の方では、殘念だが南獨乙ぢや今でもナポレオンを未だ一種の英雄として尊敬して居るし又、云ふのも馬鹿くしい事ですが、多くの人が人類の恩惠者だと崇拜し居る、と主張して居ります。」

「大きな聲で言つちや不可んよ君、此處に居る此の若い貴婦人と全く仲違いしちや困るのぢつたらね。」

と老男爵は云つて「彼女は非常なナポレオン式な女だよ。」

「で御座いますからつて、貴郎は妾くしを惡く御思ひ遊ばさないで御ざんせうね」とアンナは眞赤に成り乍ら「妾くしナポレオンが大人物だと申しますのが御氣に召さない方を、直に呪いは致しませんもの。」

「大人物?! 惡魔を亦大人物とは、そりや又甚麼な譯なのぢや?」と老人は目に稜を立て、叫んで「彼奴が盜賊の様に王位を盜むのに都合の良い機會を覗い出しと云ふ事か? 彼奴が立派な王國

を銃剣先で倒して、申し分の無い自然的な制度を、少しでも勝れた制度でも置くかと思へばそれもせず、打ち破壊しちまつた事がぢや、大人物ぢやよ!」

「貴郎は何んでらつしやるから左様仰有るんで御座んすわ、あの……………」

「アンナ、アンナ!」と言葉をさへぎつて「彼奴が俺達を不幸な者にしたからと云ふので、それで俺しが左様云と思つとるのか? 彼奴が此の谷と此の森を俺しから引奪くつたからか? 俺しや御先祖様に奉公しちよつた者共を他の人へ呉れをつたからか? 彼奴が遣した、あまりぞつとせん御客が俺しに未だ殘つちよつた、ちいと許りのものを、洗いざらい奪りをつたからか? 彼奴等はチーヤベルの古るい家紋を、上へ外國の印章を捺して抹消しくさり、俺しの家蓄を調査べ上げて見積をしくさり、葡萄牙烟は一尺曲尺(ONE INCH)凡そ日本の二尺三分で量る、森は疎ぐつて仕舞つて俺しの主な財源を賒取して仕舞つたぢや。あの日には、俺しは、此の俺と此の俺しの家の没落を實際感じたよ。ぢやがな、旗本制度は改良されて仕舞い、夫れ許りぢや無うて、コルシカ生れの男が、最早、獨乙皇帝も獨乙國も無いのぢや、と宣言したが、その様なるに遭遇さない譯に行かなく成つたのぢやないかな?」

「情け無い事で!、ナポレオンは事實私くし共に先より都合良くしちや呉れやしませんので御座いました。」

とラントーウは云つた。

「御前達、正當に御前達こそ自身が惡るいのぢや。」と老男爵は益々急性性込み乍ら言葉を續け。

「御前達は久しい以前から帝國と云ふものに對して知らん顔して居り又最早社會に對して眞心を少しも持たず、自分達の名を擧げて得意にならうと思つちよつた。恐らく夫れ所ぢや無い、殘餘の同志が團結して居る間は恐ろしいので、獨乙帝國を一寸一寸と二分して行かうとするのが見たかつたのぢやらう。スバルタに居る者がギリシヤ人に外國人と云われた時に、ごんな風になつたか御前達は知らなかつたか？」

我慾と分離の此の世紀に罰が當れば良い、自分許り可愛かる、野心を偉大と心得て居る馬鹿者共の此の世界に罰が當れ！」

「でもねー、御父う様……。」

とアンナは言葉をとへぎらうと思つたが、なに、老男爵は仕舞の言葉を捨台詞で立上つたので、チーヤベルヒ城の召使の小男は、老年の御主人様の合圖で蠟燭を二挺持つて傍を急いで行つた。

「御寢み。」と言つて老男爵はラントーウの方を最う一度回顧いて「折々俺しの疝が高ぶつてる様に見へても氣にせん様に喃、俺しの性質ぢやから。ゆるりとお寝みよ」と前よりも安心して言い足して「胸糞か悪かつたら良い夢でも見れば良いさ、喃う。」

アンナは感動して父の手に接吻した。老男爵の立派な姿は徐々と戸口の方へ行つた。ラントーウは見聞きした事で莫迦に面喰つちやつたので、灯を持つて主人を案内した下男が、ごんな滑稽な姿態をやつたか見逃ねちやつた。下男は、ふわ／＼した服が殆ど床の上を曳摺り想に垂れ下つてる、長い縁取りの袖で、銀の燭臺を持つてる手が全部り被ぶさつてるし。カルファリーエンベルヒ

へ膝で擦つて行いく大ーきな巡禮の見へた。だから後から從いて行く人に益々位が付いて見へた。老男爵は佛蘭西風の客間の、御祖母さん達の額の下を通つて行く時に、大昔の畫像が歩るき出した様に見へた。老男爵が部屋を出ちまつた時、アンナはラントーウに一禮して立ち上つて、或る窓の傍へ行つた。アンナが無言で居るんでラントーウは、以前にはまあ、琴線に觸れまいと一生懸命避けてたのだが、今夜はいよく觸れちやつたなど、考へた。アンナは外の闇を眺めた。ラントーウはアンナの側へ近寄つた。ラントーウは、生真面目か悲しげに話すよりも茶化しちやつた方が餘程わけなく誤解は解けるものだつて事を度々試めして知つてる。それをやつてアンナの御氣嫌を改善せうと思つた。所が、アンナの側へ行つた時に、其の目付きに吃驚しちやつて、談話も口から出掛つて引込んぢやつた。空は黒ずんでるが高く眞青で南の方の空丈け月で明るくなつてる。こんな空をラントーウは生れて初めて見た。月の光りが森や葡萄畑が奇妙な陰畫を作つてるし、谷では月の光がチッカル河の小波に反射して金波銀波は輝らめいてるし、御寺の黒い塔の尖頂もきら／＼實に美麗に光つてる。此の、夜の淡うとした月の光でアンナの顔は蒼白く見へた。そしてあの艶やかな眼の中に涙が漂つて居る。寂ーんとしちやつて何一つこゝりとも云わなかつたが、今初めて遠くの方から上手な笛の音が聞へた。緩るやかな如何にも柔かい月の光と、うつこりと溶け合つて、地合に沁み入る月の光が笛の音か、笛の音が月の光かと疑われる様だ。アンナは樂し想に笑顔を作つた。嬉れし氣な眼付きで、遙つと遠い谷底から飛び出てる森の梢を、じいつと見詰めて、すいっ、すいっ、て云ふ深い呼吸使は笛の響に合せてる様だ。

暫く經つてラントーウは、

「夜分でも、まあ何んて御所有の谷は絶景なんでせうね。谷の上に天井の様に蓋ぶさつてる空は、何んて奇麗なんでせう、月も此の静かな、世界の一角を照すために出来る様で御座んすね。」

と云つた。

「アンナは丈けの高い弓形窓を開けた。」

「外はまあ、未だ何んて温暖いので御座いませう！」とアンナは懐かしそうに谷を覗き込んであらッそよッとも致しませんわ。」

と云つた。

「でも、樹が彼方へ屈つたり當方へ屈つたりしてゐるぢや御座んせんか、風で必度ざわ／＼、云つて居ますでせうよ。」

とラントーウは答へた。

「否え、ちよ／＼とも」とアンナは繰返して、云つて、自分の白いハンカチーフを窓の外に出し、「御覽遊ばせ、此の軽いハンケチでさへ、翻らりとも致しませんわ。ではあの、樹の古るい物語を御承知遊ばしてら、しやいまして？、木の葉を戦がすのは夜風ぢやない、木の葉は今叫いて獨り言を云ふのだ、そして木の葉の言葉が解る人に丈け種々な秘密を経験事が出来るのだ。とか申しますわ。」

「ではまた、大概誰が吹奏者だつて事が經驗るんで御座んせうね。」

とラントーウはアンナを一層鋭つと見詰め乍ら云つた。何故かつて云ふと、あの音を、今でもアンナが未だ窓の外に出してゐるハンカチーフとで、御互に何か合圖をしてゐるらしいんで妬げちまつたからだ。

「木の葉で御座いませんでも、妾くしが教へて差しあげませう。」

とアンナはハンカチーフを引込め乍ら。

「あれは、情女の夜の御慰みにと思つて吹いて居ります元氣の良い獵人で御座いますの。」と云つた。

「それにしては距離が遠過ぎるぢや御座んせんか、音調が十分明確して居ないぢや御座んせんか。」

「下の村ですと、上の此の此處より余程と良く聞へますわ」とアンナは無頓着に云つて窓を閉め、「また、愛の耳は嫉妬の耳より遙と遠方から聞く事が出来る、と申す諺が御座いましてよ。」

「巧言！」とラントーウは叫んで「ですけど、嫉妬の目は愛の目より遙と遠くまで見えますよ。」

「そりや左様で御座いますわ。でも日中許りで夜分ぢや御座いませんわ。」

此の全く故意らしく無く出た言葉を聞いてラントーウは穴へでも入り度く成つちやつて、伏目になつちまつた。彼所の森で笛を吹いてるのは此の無邪氣な娘の情人だと一寸の間だけと思ひ込

んだ馬鹿さ加減に自分乍らあきれて仕舞つた。

「では貴郎、御寝すみ遊ばせ。」とアンナは燭臺を掴ち乍ら云つて、「何にか素敵な夢でも御覽遊ばせな。始めて御泊り遊ばした晩の夢は正夢で御座いますつて。ハンスや！男爵様に御み燭を御見せ申して塔の部室へ御伴ををしまよ。」と云つた。

註「ハンス」は下男、男爵とはラントーウ

下男が側へやつて來た時にアンナはラントーウに今度は佛語で「あゝ、あゝ、あんなに父が徹氣目録に成つて議論致します事件を父と御話し下さいません様に。父はそりや、疝癩持ちなので御座いますの、でも罪を悪んで人を悪ますの方で、只だ意見に就いてで御座いますわ。で、前以て御告知申して置きませんでしたのが妾くしの落度でしたわ。明日細かく御告知致しませう……御寝み遊ばせ！」と云つた。

ラントーウは此の奇妙てるが然し優にやさしい性質を考へ乍ら下男に従いて行つた。アンナの氣象を呑み込み、舉動を判断しやうと心を碎いて居るラントーウは妙痴奇隣な高い圓天井の部室の中の、陰氣な、廊下や廻りくねつた螺旋梯や古風な Gardinenbette (周圍に純帳が垂れ吊つてる寢臺)を始め種々な品物が以前には眼を丸くして見たんだが。今は目に入らなかつた。(未完)

靈的革命と肉的革命

佐藤曙汀

青年の元氣は有りとしあるものを赤い血で支配しやうと云ひ、赤い血で染めぬからと云ふ。然り而して此の紅血の流れた處には何のさまたぐるアルプスはない。そして何處迄も押しぬいて押しぬいて、ごん底も見ぬかなければ止まないと云ふのが、此の元氣の特長であり轉じて青年の特権である。丁度ニイチエが極度に自我を働かした處に超人があると云ふた様に青年の元氣は善とも云はず悪とも云はず何處迄も自己の發現に伴なつて自我が突き通して其處に眞の自己を見出さうとし眞に自己の満足を得やうとする。然らば此く迄に強い元氣を導いて行くものはそも何であらうか。私は此處に常に衝突のみをなして元氣を自己のものたらしめやうとする二個の大勢力を認めない譯には行かない。二大勢力とは何であるか、即ち肉的革命と靈的革命とが其れである。

づつと古代にあつては或る二三の先覺者を省いては余りに此の二大勢力の衝突と云ふものはなかつた。其の主なる原因とも云ふべきは彼等が靈的革命を起すべき最上の端緒たる生活に對する苦痛と云ふものが欠けて居たからで又一方彼等の生活を満足さすべく充分の食物があつたからである。彼等は西に行かうが東に行かうが全く自由であつて彼等は到る處彼等の食物を見出し彼等の住居を見出した。斯くの如く生活の容易なる時代にありては彼等は生に對して榮達も欲しなれば名譽も願はず自覺もいらなければ金錢もいらなかつた。従つて靈的革命なんかと云ふものは起らなかつた。只命是れ従ふで思ふ存分肉的生活を續くる事が出來たのである、此んな状態はソク

ラテスやプラトンの時代を見ても明白なる事であつて彼ソクラテスが友人の某國の法律を定めんとした時其の法律の中に極めて露骨に男女間のことを記したものがあつた其規定を茲に記すことは憚るが此れによつて見るも如何に其の時代の生活が低かつたか如何に肉の満足を得るに容易であつたか解せらるゝであらう、従つて生に對する自覺そんなものは起る筈がなかつた。

それが農業時代も去つて商業時代より工業時代に入ると人口は非常なる力で増加して來た。到る處生活に對する苦痛の叫びがする、有限の土地から限りなく増加する人の口を満すだけ十分の米が得られやう筈がない、此んな有様で世の中は益々世智辛いものとなつてしまつて道には一片のパンさへ落ちて居ない、落ちて居ないばかりではないダーウインの説に依ると人間も進化するものと見えて一人では生活が出来ない、如何しても團體でなければならぬと氣がつくと社會とか國家とか云ふものが成立する、そして社會とか國家とか云ふものが、益々必要であると感じた時彼等の責任や義務は非常なる重いものとなつてしまふ。斯んな有様で人間はだん／＼利巧なものとなり力あるものが社會を征服する、征服せられたるものはや牧場の羊である。彼等には何らの力もない。ナポレオンと云ふ恐ろしい男が軍隊を率ゐて過ぎた處には一の食物も残つて居なかつたと云ふ。百姓一揆の親分フシントンは終に亞米利加と云ふ偉大なる土地の主人となり、秀吉と云ふ何處の馬たか知れんものが日本を統一する。斯んな事が、青年の頭腦や幼年の腦裏を痛切に刺撃する。そして可憐なる青年の頭に人間は肉ばかりの満足を願つては生活が出来ないものだと云ふ強い感じが、しみ／＼と應へた時青年の頭には強いそして深い靈の革命が起るのである。

一方社會が文明になるに従つて慘憺たるものと化してしまつた。此方では戦争があれば彼方では天變地異がある。子を負ふて迄も車を引かなければならぬ女、勞働で固くなつた手、青醒めた顔色、恐ろしい機械の犠牲となつた男の慘酷たらしい死骸、是等は青年の心を如何んなに刺撃したであらうか、一方では斯んなみじめな状態から救ふてどうか人間を神の温かひ情の國へ導きたいと、クリストとか、ムハメッドとか釋迦とか、彼方からも此方からも奮起して盛に人心を引きつけやうとする、こんな事に先づ觸れ易いものは青年の心である、元氣ある青年の涙である。一方劇であるとか小説であるとか美術であるとかと云ふものが目の邊り恐ろしい社會とか悲惨なる生活など、云ふものを見せ付ける時元氣あり奮氣ある青年の心は之でも瞑して居ると云ふ譯には行かなくなる。不自然なる社會を打破しなければならぬ、爛亂せる思想界を統一しなければならぬ、此んな力ある聲が四方から起る、起る聲を聞いては青年の熱望は更に更に高潮に達する當然の結果として青年は先づ自己を改良しなければならぬ。自己を改良する結果として青年は先づ肉的生活を避けなければならぬ、然し自然の力は恐るべきものであるを如何にしよう。自然は従はるべきものなり、誰か／＼かく云ふた通り人間は如何にしても自然に征服さるべきものである。青年の心が靈に向つて進まうとすればする程丁度ゴム球を地面に打ち付ければ付ける程反作用が大きいと同じ事靈的革命が強ければ強いただけ反作用たる肉の革命が盛になる。造化の神は余りにいたづら者である。此處に於てか前に云ふた靈的革命と肉の革命との衝突が生ずる。青年の心には大なる悶が生れる。頭は何處迄も天に行かうと云ひ足は何處迄も地を追求しやうと云ふ。

元氣は中間を慾追しない。否慾求する事を知らないのである。宇宙間には天と地とのみあつて空間のある事は更に知らない。況んや空間のはてが地平線に達した時天と地とを同時に得るものだとは夢知らる筈がないのである。否々知ると雖も元氣なるもの、性質として空間は歩行し得ないのである。そして極端に足を追求し極端に頭を慾求する。御はんや長右衛門は足のみを慾求して同時に之を求め得た人である。クリストは極端に頭のみを追求した一種の不具者である。藤村操に至つては兩者を求めて兩者を得なかつた憐れなるものであると反對に鳩山和夫は兩者を求めて兩者を得たる大幸福者である。さはれ運命の神は和夫の運命をして常に一般的のものとはならしめない、多くは操となりて死し、御はん長右衛門となり終らしむるものである。運命の神も亦惡戯者ではないか。

更に轉じて兩者間の微妙なる作用を見やうと思ふ。靈の大なる使命をもたらせる頭は甘い言葉で足に云ふ「君天に行かうぢやないか、天に行つて見給へ、到る所美しい花が咲いて居るぞ、黄金は山の様に積んであるのだ、そして天にはね君！冬なんかと云ふ嫌な氣候は少しもなくて年中春なんだよ、それに天國の人は決して死なない老いもしない、若々しい美しい姿で年中花園の花の亂れの其の中に黄ろいのや白い胡蝶と遊ぶ事が出来るんだよ。果物もある、林檎やバナ、なんか到る所にブラ下つてる、之を食べて見たまへ、其を甘い汁がポタリ／＼と垂るぢやないか、そしてね君我等は現實ともなく酔ふてしまふのだ」然し足は振り向きもしない、冷やかな態度で云ふには「汝、天に忠なれと叫べるものよ、汝はなれ自らを偽れるを知らざるか、汝にして眞に誠の一

字を愛すとせば汝は先づ地に忠ならざるべからず、本心を欺く事勿れ然して偽りの天に従ふを止めよ、見よ見よ、紅き血は迸りて心臓を燒き胸を爛れ今や全身をもたが火焔もて包み終はらんとしてゝあるにあらざるや、目的があらざる理想があらざる、只不可抵抗力なる自然の法則のまに／＼、そが壓迫と制肘とに服従する事こそよけれ」と。然し頭はかゝる言論のために其が樂園をば棄てんとは思ひもよらぬ事であつた、然も天に向へるあるものは地に向へる或るもの、天の言葉を聞きて天に走りたるものと等しく地の言葉を聞きて地にはせ加はつたのである。然しながら再び自覺と云ふ一種の奇しき方が、地に走りたる者をばシミ／＼と攻めた時地の或る者は天に馳せ去つたのである。かくて天と地換言すれば頭と足とが、其の絶叫の極に達した時が即ち青年の心の一大煩悶時代なのである。此の時代にあつては頭は決して足は自分の味方だとは思ふて居ない、足も頭が自己の味方だとは勿論考へも付かないのである。何ぞ知らん足は頭がなくては生活が出来るものではないのである。頭も同様足がなくては生活の意味は決して見出されない。昔ギリシヤの哲學者が星學に熱中した結果溝の中へ陥つた時通りかゝつた一老婆が御前の身体が地球上にあるかぎり足はやはり地面を歩いてなければならぬと云ふたさうであるが尤もな話と云はねはならない。靈と肉とは出來得るかぎり兩立さすべきものである。靈にのみ生活が出來得る人は幸福であるが其れは自然が許さない、許さないが故に私は兩立さすべきが其の取るべき唯一の方法であると云ふのである。私は肉を離れて靈のみを求め様とする人、凡ての幸福は靈にのみ存するものであるとして肉について何等考へない人を笑ふと共に私は煩悶は青年の特權であり、盛な

る煩悶に陥る間か青年であると云ひたいのである。最後に私は凡ての青年と共に他の部類——白頭、幼年——此等の人の到底考へ能はざる煩悶の人となつて青年と云ふ強い自覺を更に更に深く味いたいのである。(終)

四高短歌會詠草

大谷正信

姿見に映すわが影わが横に共に映れる白き石像、

殘暑未だ透りし文に返せるに起す秋雨の二字まづ悲し、

飛々の立木の蔭にうごめくは羊なるべし雪深き牧、

川ありと瀬音に知るも霧込めて木末のみ見る谷の鉾杉、

翻る葛の葉裏の蝸牛も描かれてあり暮秋の森、

裏庭や三逕の菊鄙めかす一本芒賞で刈らざる、

繪葉書の忘れな草の繪の下に名の頭文字のみを記して、

橋もなく渡舟もあらぬ川土手の行けど行けども穂芒の風、

尖塔の壁悉く蔽ふ蔭を渡る夕風一つ星見る、

篠原一慶

愚かにも我等鳴子の空鳴りに驚かされて逃げまどふかな、

生き埋めの吐息かわれと聞きわかぬ灯あかき夢の窓を吹くかせ、
 人かげの胸のすだれにともすれば映つるけはひをなだめつゝ生く、
 只胸に生く灯たふとし消ぬぬれど寂しくあれど生く日なつかし、
 目くるめくわが世をつづるきざはしを静かにはしく人のおりに、
 とにかくに結ぶこよりの短かさを元に切れたる後のさびしさ、
 雨に生くる夏草ごころ夕闇の戸に目をまろびあへぎ寄るとき、
 黒き影あまた群り思ふこと崩しては積む夕闇の空、
 夕されば暗き窓よりわが心ふと浮ひ出で虫の音をきく、

鳴澤寡愆

目とづればわが終る日に咲くらしき疲れし花の一つ咲く見ゆ、
 肉色の月も悲しや海峡を笛ならしゆく外國の船、
 我が生のしるしか秋の日光になえたる花のかなしくゆるゝ、
 秋明るく梢に光る銀色の鬼蜘蛛の巢にかゝる落日、
 群衆のひとり／＼に悲しみを小さくちぎりて投げんとぞ思ふ、
 河岸の路死をたくらめる少年の腫に光るたよりなき色、
 赤蜻蛉亂れて飛べり深紅の光り静かに翅をぞ透く、

杉本 整

秋の日に千草の原に身をなげてしばしは我れを捨てし思ひす、
秋の日の淡き光はひな菊をめぐるやもめの手にもまとはる、

山本 與吉

朝月は塔にかゝれり西山は夢より續くまぼろしのごと、
一人夜の町を歩めり様々にたくらめること胸に抱きて、
一音の鳴らぬハモニカ投げやりて夕の街の灯をのぞき見る、
抽斗をあけてしばらく考ふる黒き柱にわがうつる顔、
をとなく座りてあればいとかなしひそくよる夕暮の色、
鬚そらぬ人はたくまし人間の獸に裏切るそれだけながら、
夢續くその後の日はいとさびしかくまで我れは囚はれしかな、
夕暮の山を背にして浮き出たる温泉の灯の心よきかな、
とりとめて云ふ事もなしいろくの作り事して行くぞかなしき、
あはれ世はこのいたましき骸をば仇の如くのぞかんとする、

小原 正義

京に来て三十三間堂の前むれにはなれて芝草を藉く、

古雑誌の中より出でしそのかみの友の葉書を繰り返し讀む、

後より先こす俤の一つづゝ晩秋の夜の淋しさ刻む、

耳鳴りのする夜はものゝむさ苦し書の金文字などいたく目につく、

母と別れ七年祖母と住む家の裏の畑に菊の花さく、

踏切の柵に身をよせ何氣なく汽車の行方をつくづくと見る、

裏町の物干台に残されし一枚のシャツに似たる淋しさ、

古すゝけし障子を洩るゝ日光に朝のけはひのさまよへるかな、

平泉 澄

故郷を戀ふ旅人の秋の夜の夢ひかれ行く海の遠鳴、

生くとしもなく生くる日は悲しきや歌なき日記のつゞく秋の日、

しのぶべくあまり烈しき不安さよ伏して泣くべき膝をこそ戀へ、

秋風の吹く夜はかなし蠟燭の焦げたれたる詩の亂れよ、

去る影の淡きが故にひたすらに強き光りと濃き影を戀ふ、

力なき夕日の光身に浴びて若き女の白壁による、

川田 茂信

何がために我れは生くると仰ぎ見し秋の夕日のうすら光りよ、

吾が光りとはに沈みぬ闇の淵に毒蛇住むてふその凄淵に、

井田 虎男

海見ゆるそのこと我れにうれしくて登るに馴れし夢香山かな、
 淋しきは床に入る時夜毎はぐ日曆いつか薄くなること、
 寝ねかねて明けし小窓にしみぐと旅の夜更けをなつかしむかな、
 様々の思ひを乗せて一筋に走る汽車こそ心にくけれ、
 さらぬだにビールの櫃を巻く藁の手ざわりにさへ秋はつめたし、
 黄昏の秋のレールの傍に咲ける小さき糸萩のはな、
 夕映えや邊りまぎにならぶ白樺の葉裏さびしき秋の湖、
 うす紅く燈臺の灯の吐息するかげに高鳴る北國の海、
 緋襷も小傘も寺の鐘の音も共に時雨れぬ三條の橋、
 召しませと花のせて来る女等のよき聲つゞく白河の里、
 「巻紙の盡きなん限り筆とらむ」かく書きそめて夕月を見る、

徒 然 (一)

井口 白汀

鮮かな光を浴び乍ら斜らかな道をさまよひつゝ家路につく私の胸の中にはいろ／＼な迷想や空想が行き歸している、底深く見せている小流れの水の面に纏れた僕の顔が映つたとき僕はあらゆる宇宙の常軌を脱した落魄者であると感じずには居られない、僕の眼窩に輝く恨み悲み喜びのきざしが瞬間々々に變り行く自己の薄命には歎かずには居られない、そして霧をふむやうな感じと雪にころげ込むだ刹那に覺へる冷氣とに圍まれて僕は世間のあぢけない範圍に僕の人生の一秒一秒を繰り込んでしまふのである。

朝からしど／＼と降り出した小雨もからりと晴れた或日の午後三時僕は矢張り同じ思想に抱かれてそして同じ憧憬に燃えていつしか蹣跚とした歩みに僕は家についた。

秋の眺めは三尺の窓を通して鋭く僕の感覺作用をひき起した、ぼかした様な白雲が澄んだ秋の空ににじんんでいる、骨ばかりの桃の木には萎れた葉が三つ四つ。かきたてる様な風がたほやかな運動を無理に強ひている、離れては重り重つては、はなれて熾烈な夢も自然の權力にとがれどがれて淋しい形骸のみが哀れを語る様に淡く疲れた僕の胸に印した、又しても吹いて來た木枯にすげなく桃葉は一つ二つとび散つた、凋落の呻吟は僕のせまい庭に満ちた、そして彼等が無音の中に發した生活のひびきにつれて僕は葉の行末をズート眺めた、折から遠くから琴の音がコッソコッソと洩れて來る。

午後三時！僕はこの時のめぐり來る毎に一種の痙攣に捕へらるゝとしていつも彼の琴の音が僕のひきしまつた感情の緒を解きはじめたときには僕は常に幽幻の中にひきこまれる、僕のあらゆる

る理解力と根限りの判断とは全くあの音々の音波に中絶せられる、僕が秋の午後せまい三尺の窓から青い空間をながめてあらゆる俗悪とあらゆるイリュージョンとを洗ひ去つて僕の心が無限から無限へと自然凋落の、をくりかへすとき鼓膜をゆるがす管弦がいやに胸に應へるとき僕は例の空想や迷想を思ひをこさずには居られない。

× × × × × × × ×

僕等は時として自己に比して大すぎる希望をもつ事がある、大なる慾望に捕へらるゝ事がある、然も僕等のスタンドポイントをはなれて僕等のやるせない悶への外に享樂せんとして馬鹿げたとも思はるゝ想像を煽動せしむる事がある、僕等は現在に死んでなほ空漠として懸絶したフェーチュアの中に熾烈な幻影のはのめきを眺めるのである、僕等の現在といふ高いプライスを拂ふて迄も冷かな未來に醜き自己の暴露をせねばならぬであらうか。

僕等が生を確實に味ふといふ事、生を純粹に消化するといふ事は少くとも僕等の希望と形ちなければならぬ、淺猿しい痛烈な生活を打ちつゝけた僕には勿論自己嘲笑もある、自己の運命が僕の進む一步の前に凄い笑の幻影を漂せている儀の現在生活に於て尙ほも儀は自己の力を感ずる事が出来るのである、僕の永き過去に於て徒らに灼爛として美しかりし僕の境遇に昏睡して全く實生活を放棄した僕の單なる思想界の裏には脆弱な盲像の骨材が見出された。

然し乍らこの衰頹した經歷——この自己意識の失せた時代——から僕のつかれ切つた四肢に一時の刺戟を與へてくれるものがある。

このかくれたる事實——少くとも僕にとつてはかくれたる事實——に對して僕は大きな驚異を認めるのである。

そして徒らに殘酷を極めた自分の虐待にも堪へて來た僕のライフの一部に細くも知覺し得らるる自己の力があせた僕の面貌に一掬の鮮血を注いでくれるのである、深い／＼人生の凋落の底に沈める、自己存在はやがてこの自己の力によつて復活せらるゝのである、自己存在自己認識といふ事がやがて骨ばかり皮ばかりのボディに温い自愛の念を勃然として湧かしむるのである、僕等はあらゆる努力と奮闘によつてこの自愛をつけたい。

然し乍ら僕等が自己の力を認識する反對に僕等は又悲しむべき事を見出さざるを得ない、僕等か自己方認識に伴ふ當然の結果であるかもしれない、僕等は自己の内にならに漂ふてゐる力の覺醒に立つた刹那に見ゆるものは心の沈澱である吾人の沈滞した生活のどん底に埋もれてゐる心の沈澱である。

吾人は生活の經驗に自己力を認識する然し乍ら自己批判の念は狹霧たちこめた生活幻影のどん底に沈んでゐる心の沈澱を目標として更に深く／＼本体に迫つて行く。

自己批判の流れが複雑多端な生活組織の中に含まれてゐる自己の力に對して破れたとき堰きとめられたとき僕等ははじめて自己生活の中を太かれ細かれ統一してゐる、そして闇の中に葬られてゐる自己認識を明確に發見し得るのである、そしてライフを集圍する係累と矛盾！そして無意義にこれをなめて悲しんだ僕等の靈の刺す様な呻吟と何の洞察も透徹もなかつた自己の影がむし

ろあはれつばくなる。

眞に人生を味はんとするもの眞正に生の享樂に感せんとするものには痛切な反省の生活でありたい、繊細な官能の氈動に集ふ美しい迷夢の曉に悲み歎つ一種の型に捕はれた僕等の覺醒には眞面目に生きんとする希望に伴はれるそして深刻な反省と正當な自己批判の中に漂ふものは眞摯な人生を形くるものである、反省！少くとも失敗者たる僕にとつてはうたゝ敬虔のひゞきがあるのである。

(二)

悲しい演劇を見てなく、そこに云ひ知れぬ味がある、或る人はこれを狂愚といふかもしれない、しかし濃かな情緒がしぼられたときに僕の心の奥には涙の泉が涌かざるを得ない。實際をはなれた後者のこなしと假設的な紛装、そして非實際的に認識している僕の眼それらのものに對して一刹那の變化に人生のいひ知れぬ玄妙にうたれたとき動もすると僕は次第／＼に實際にひきこまれる、矛盾も齟齬も僕の實在からはなれて僭行的なインスピレーションが涙腺の底からく訪れるまに殆ど無意識的に流れ出る涙滴の中にはヒーローのすべての境遇がひし／＼とあたる度毎に特殊の閃きがある、實在と寫生との間を充填している温き悲哀がいつも僕の感情の一部を占領している。

(三)

孤獨をたのしむ生活、僕は出來得る限り此種の生活を欲求するものである、寂寥の味は未だ執着をはなれないそして迷想の圏内に漂浪している僕の燃えやすい血潮にとつてはあらゆる物象の中にひそんでいる隱微の消息に接せしめる。

孤獨の存在しているところはすなはち僕にとつての一つの慰藉である、僕等は生から起因した呻吟を脱却して大自然の中に侵入した目前は孤獨の世界である、物質的存在かつはなれて生に接したときは澄める空の如く磨ける玻璃のようなものである僕等の日常生活のコンフォートはこゝ發生する、單に自然を友とする、これが黒く濁つた血に更に新な力を注いでくれるものである。

生活の價値とは、人間が生活を全体として觀照する時の意識であつて、生活の意義とは生活を構成する諸要素の關係より、それを觀照した時の意識である。而して此れは生活慾の發現して居る處には必ずばたらいて居る事實であるから、自分は誰れにしても、人並に生活を持續して居る間は、生活の價値を疑ふとか、其の意義に感ふとか云ふのは、彼れに取つて、非常な矛盾である。

——田中玉堂「書齋より街頭へ」

利根川の邊

小原生

百二

上野の國を流れてゐる利根川は、兩岸が大抵斷崖になつてゐて、それが前橋市の傍へくると、左岸は一帶に平坦になる、そしてかなり廣い土地となつてゐるので野菜を植えてある畑、稻田、豚小屋などが其の中にある、人家も處々に三四軒宛あつて、美しい天氣の日などは其の軒の竿に幼兒の着物が干されてゐるのが見えた。

その平坦な所が終ると又高地になつてゐて、その上に前橋市の公園がある。

公園の土手には古い、大きな櫻の木が列んでゐる、その直ぐ下は、少し以前には急な流であつたが今は川の勢は向岸へ行つて、唯僅の水がゆるく流れてゐる。向岸には青く茂つた中から處處地の色を表してゐる崖が、烈しい川の流を前にして長く續いて、其の上には形の綺麗な榛名山が聳えてゐる、その中で最も美しい形の、榛名富士と云はれてゐる山が、それらの連山の中程に當つて、其の頂を現してゐる。左には薄く、鋸の齒の様になつて見ゆる、妙義山が聳えて、心持のいゝ程晴れた朝などは、その右横から急に高く淺間山が見えた、淺間の煙は、大概は空の雲とはつきり區別は附かぬ。

前橋の公園から見ると、恚うした種々の山が見られる、その中で榛名山は最も手近にある、向ふ岸の上から一帶に地がだん／＼高くなつて、山の裾野をつくり、それが美しい曲線をなして、

山の中腹まで昇つてゐる。

夏には、随分堪らぬ様な暑い晩もあつた。そうした晩は前橋の人は公園へ行つて涼んだ、月のない、星がきら／＼光つてゐた晩であつた、利根川の急流は物すごく音を立て、流れてゐる、星あかりに、流が激して、白く碎けてゐるのが見える。こんな晩には晝見れば温和な榛名山は、恐しい怪物のやうに、利根川の上へ、ぬつと現れて見えた。

そのこのペンチには、笛を吹いてゐる者もある。美しい、細い聲で唱歌をうたうてゐる女の子もある。夫婦で小供まで連れて、涼みに來てゐるものもあつた。

直ぐ近かの、利根川に架けられてある鐵橋を、汽車が通る音がする、氣持のいゝ風が時々、川の面から吹いてくる。

月の良い夜は、榛名山の中腹まで、薄紫色に見えた、流に映つてゐる月も見えた、月の夜は榛名山は氣持がよい。

「榛名山が美しく見えます、そして此の前に利根川と云ふ有名な川があるので、一層ひき立ててゐます」

「そうですね、然し此の川は暴れ川です、先日、この直ぐ上流で筏に乗つてゐた人が溺れました、架橋演習にぐる工兵も時々危険な目に遇ひます。それに、一年に一度ぐらいは洪水が出

て、そこらの畑は皆な荒らされます、群馬縣の費用は、この川の工事に大半使はれて終ふんです、縣民にとつては敵です、それに、この公園の土手が崩れた日には、前橋全市が流れて終ひます」

「此の土手は餘程、高いから滅多に崩れることはないでせう」

「まあ、さうです」

「あなたは、何をお読みになつてゐるんですか」

「これですか、これはつまらぬ詩集です」

「こんな美しい月夜に詩集をお読みになるなんて、なか／＼風流ですな」

○

天氣のいゝ日に、公園の土手を下りて、河原を傳ふて、平地になつてゐる所の畑の中を歩いて見るのは氣持がよかつた。

川の跡であるから一帯に砂地である、振り返つて見ると前橋市の方には、煙突が、處々に畑を吐いてゐる。平坦になつてゐる所は川どの境が附いてゐないで、ずつと見渡す限りの平原をなしてゐて、その遠い端に赤城山が高く聳えてゐる。

河原の中を、流に沿ふて上ると、農家が二三あるのに、時々出合す、そして砂地が、大きい石を混ぜてゐる、少し廣い個所に出る、そこには工兵の架橋演習のための廠舎があつた、向岸の崖から、こちらの低い土地にまで、釣り橋が架つてゐる、工兵が舟に乗つてその附近に作事をして

ゐた。

廠舎はかなり大きい。そこから道が附いてゐて、前橋の方へ行かれる、其の傍には、道を挟んで兩側に、一膳めし屋、飲食店、お焼や、駄菓子屋、などが列んでゐた、飲食店には首の白い女が顔を出してゐた。

其の道から左へ折れて少し行くと、何時の間にか河原を出てゐた、そこには前橋の郊外で家も少しはある、どれも小さな、氣のきいた家で、かやぶきの中にあつた、前橋の方へ指して歸ると左に赤城山が見え、右には利根川の向岸が、もはや遠く見える。

不圖、心を惹かれる様な音楽が聞える、こんな個所で、こんな良い音を聞かうとは思はなかつた、氣を濟してぢつと聞いてゐるとオルガンで、「荒城の月」を奏してゐるらしい、そして行く手の家から洩れてくる、其の家の前へくると、オルガンに合せて、唱つてゐる若い女の美しい聲までも聞きとれた、其の家はかやぶきである、がす燈を出してあつたが、町の名を書いてあるけれど、家の名はなかつた。

○

前橋から澁川町まで電車があり、澁川から伊香保まで矢張電車がある。前橋から出た電車が、村を三つ四つ通ると、利根川の岸へ出る。右は山が迫つてきて、變な崖で終つてゐる、その下に四間程の道路があつて、道路の左は一段低く利根川の河原になつてゐる、電車はその道路の崖に寄り沿ふて走るのである。

崖には長い草が生へてゐて、走つて行く電車の窓を打つてゐる、こんな所が五六町も續いてゐて、電車道で最も見晴しの良い個所である、車窓から榛名山も見える。

この道がうね／＼と曲つてゐるので電車が、曲り角へくると、いやな脳に喰み入る様な音を出して廻る。此の崖の終る所から電車は急に左へ折れて利根川の橋を渡る、その橋は白いペンキで塗つた、随分長い橋である。

利根川の水の勢は、電車の通る橋の邊では左岸にあるが、下るに従ふて、右岸に去つて、工兵の演習地の傍を過ぎ、それから公園を遙に望んで、急にまた左岸に轉ずる、その轉じた水勢は公園の直ぐ下にある、前橋舊城の後の石垣に突き當つてゐる、それからは左岸に沿ふて、鐵橋をくぐつて流れて行く。鐵橋の架つてゐる所は兩岸が高い絶崖になつてゐて、そこを流れてゐる水は青い、深い淵をなしてゐる、絶崖には出入があつて、その引き込んだ所へは水が廻つて流れこんでゐて、出てゐる岩の角へは、突き當つて白く碎けてゐる。

「この處には、丁度、大蛇でも住んでる様だね」

「ほんとに、おつかない所です」(終) 一、二十一

かすかなる聲

—杉田さんにさう—

井田 虎男

此の宵を我れは忘れじとことはに思出多き日はなしつゝ。

廢園に敷きし落葉のかげにきく秋を弔らふこほろぎの歌。

時の來て別れなん日のありといふ悲しきことを思ひ出づる日。

鹿よびてパンやる晝の春日野や憂えもつ子も旅にしあれば。

此れといふ用もなければ／＼と出づるになれし夜の片町。

木屋のかをる頃とし願ひ居しを悲しき夢にくりかへすかな。

ついでと町より町へ野より野へ翔る燕の快きにも。

我が胸の温室のうちに培ひし花は育たで初冬に入る。

雲白う千切れて飛べる野の末に我が見出だせしそがれの蝶。

露あはき水引草の花かげに灯籠いだきて蟲の音をきく。

晝となれど風寒き日よ岩の上に日なたばこなごせし日戀しき。

一筋に母を思へる秋の夜の我れをとりまきこほろぎのなく。

柳の葉はら／＼と飛ぶやるせなき歸りてやがて母にものかく。

ニツケルのランプの臺に我が顔のうつるを見ても心うれしき。

弟の飼へる子龜が瞳を閉ぢて砂の上になり故里の家。

冷やけき運命を祕めてはら／＼と夕風に散る川柳かな。

しとやかに秋の光りの木屋の花に流るゝ朝の一とぎ。

川岸にならぶ土藏と白壁と帆柱にはゆる秋の夕雲。
裏門より女の死躰架ぎだす夕暮さむき病院の秋。
片町は肩ざわりよきネルを着て人込みの中を夜行くによし。

大正元、一一、一五、夕

呪

平泉 澄

散りかゝつた薔薇にさす秋の日の淡い影の様に、もしくは古い梅の樹に纏つて居る鳶の様に、私の寂しい心に付き纏うて、いつもいつも私を呪ひ、追懐と冥想とに泣かしめるものは皐月頃の蛙の聲と二人のKとです。

右も左も前も後も、ギャクギャクギャクとなく蛙の聲につままれて初夏の夕のおしかぶさる様な空を眺めながら苗代田の畔に立つ私は今にも氣が狂ひそうに思ふのです。

——ギャクギャクギャクギャク——

あゝあの聲

あの聲は地獄の底であらゆる苦しみを受けて居る亡者が、その白い手を舉げ、その細い腕をのばして私を呪うて居る聲ではあるまいか？

そうだ！

そうにちがひない！

あゝ彼等は誰一人心を打明けける可き友も無く、弱き身と寂しき心を持ちて、悲しき世に一人旅せる僕をも、あんなにまで呪うて居るのであらうか！

新緑の香りが鼻をうつて、梅の實が大きくなつて、竹の子が皮を脱ぐ頃になると、毎晩蛙に苦しめられて居る私は實に氣が狂ふ様に思ふのであります——男子と云ふ強き誇と十八といふ若き誇とを持つて居ながら——

鳳仙花がだらしなく散つて、月見草に睫毛がうるほふ秋となると日本海の海の遠鳴りは、夜半の夢を破つて私の弱い心を千尋の底におびき寄せようとする。

と、私は私と同名の果敢なく散つたK二人を懐ふのであります。それは二三年前の事でした。

秋も更けて田の稻が多くは刈り取られ、隴の所々に残された菊も霜に老いて、秋鳥高く飛ぶ頃でした——放課後をいつも学校の圖書館でくらし、夕暮の寒い風にふるへながら中學校を出た私は、きまつて八九歳の少年の群にまじつて十四歳ばかりのきたない着物を着た少年がさびしげに遊んで居るのに遇ひました。

少年は私と同名の白痴だと知つたのは間もなくでした。

學校からの歸途は私の頭はいつもこの少年の事で一ぱいでした。

中學の脊後には小高い城山があつた。石垣の跡、天主閣の跡、茫茫と草の生ひ茂つた城の跡に一

つの古い沼がありました。

夕方この山に散歩してこの沼の畔で冥想に耽る癖のあつた私は、白痴の少年が父なる人につれられて白痴の薬になるといふ荆棘の根を掘りに来て居るのに會つた。

しんとして更け行く秋の夕暮、木々の枝は腕たるげに伏し、葉はしのび音に寂しい歌を歌つて居る森の中に、聖衆來迎の光の様な夕日を浴びて、白痴の少年は父と共に一生懸命にいばらを掘つた。

古い沼には末枯れた葦の葉が亂れて井守が浮いたり沈んだりして居た。私は獨歩の短篇で見た白痴が城山の石垣の上から鳥の様に青い空を飛ばうとして落ちて死んだ話を思ひ出した。

二年ばかりたつてKは死んだ——彼の悲しい寂しい一生は短くして靈魂は永久に土に歸した。

圖書館から夕おそく歸つても、城山の沼に散歩しても、Kの姿はもう見る事が出来ませんでした」と間もなく今一人のKが死んだ。

私のクラスに私と同名のKと云ふ男が居ました。小學校では二つ上級でしたが中學で落第して同級になつたのです。

山國の春はおそい、南の國ではもう雪が溶けて若草が萌えて田畑が耕されて居る頃に私等の村は雪が二三尺も積つて居て吹雪となだれとに苦しめられて居る、そして私等は南の國を戀ひ、春の光を憧憬れて神祕的な空想に耽るのであります。

四五年前の丁度其頃でした——私は彼と共に赤根川のほとりに立つて冬の日に映してキラキラし

て居る雪の野を眺めながら、雪の降らない國、南の國の話をしたのを覚えて居ます。ヴェニスの人商の話をも初めて聞いたのも彼からです。

そのKは今年三月卒業試験の頃になつて、身体が青くなり、手足に粟が出来て、いつも火鉢にかがりついて居ながら、飢えに飢えた犬が慈悲を乞ふ様な寂しい腫で物を見つめる様になつた。

卒業！待ちこがれたる卒業式は夢の様に過ぎた。五年間同じ窓に學んだ友は羽音勇ましく西に東に都に森にちりちりに別れた。

再び自由の山林に歸つてあくまで自然の風光に浴し、ほしひまゝに思索に耽つて居た私は或日散髪屋でKが死んだと云ふ話を聞いた。あゝKは死んだ。果敢なく死んで了つた。

私と同名の二人の若者——一人は白痴で一は鈍才であつた——はかなくしてその一生を終つた。一年の中、私にさへ詩の出来る頃は初夏と秋とです。

そして初夏は蛙の聲に、秋はKに呪はれて居る！

彼等に呪はるゝ時私の胸の嵐は幻想に狂ふのであります。あゝ彼等はいつまで私をその執着深い蔓を以て縛つて居るのでせう？

四高俳句鈔

經藏の曝書 又寺行事 秋晴れて	繞石	蜻蛉や潟の夕汐藻流れに	乙贊堂
ポト部は 七浦めぐり 秋晴れて	尺鮒を 逸す浩歎や 飛ぶ蜻蛉	蜻蛉釣窓に 呼ぶ母柿を手に	同
句意終に 畫意に秋晴の 三湖見し	流れ餌に 競ふ家鴨や 赤蜻蛉	流し餌に 競ふ家鴨や 赤蜻蛉	同
約 悉く 果たす揮毫も 秋晴れて	温泉寂れの 舟底蜻蛉道に 飛ぶ	温泉寂れの 舟底蜻蛉道に 飛ぶ	同
國寶門 臨寫の三日 秋晴れて	ほの暗き 棚に 夜寒の 何の壺	ほの暗き 棚に 夜寒の 何の壺	同
統監旗 今日 彼の岡や 秋晴れて	夜寒さや 白の目立 立つる 壁隣	夜寒さや 白の目立 立つる 壁隣	同
行軍の といろ 渡る橋 大河秋晴れて	漆搔鷲の 脛湯を 見つけたり	漆搔鷲の 脛湯を 見つけたり	同
野飛々 山と 積む乾草や 秋はれて	乳足りを 山羊吼えも 牧場秋晴れて	乳足りを 山羊吼えも 牧場秋晴れて	愛松
囀にかゝる 鳥も 捕り漆搔きもして	塔下鳩の 餌に 下りる 秋の 晴間哉	塔下鳩の 餌に 下りる 秋の 晴間哉	同
コスモスは 束ねあり 畫室半ば 成る	開張を 急ぎ 打つ 柵柿 赤き 寺	開張を 急ぎ 打つ 柵柿 赤き 寺	同
賣残りの 蟹一つ 店に 夜寒の 灯	左遷なれど 柿に 閉居を 親みぬ	左遷なれど 柿に 閉居を 親みぬ	同
鳴子振つて 来る 辻占も 夜寒頃	温泉宿柿に 雨けふる 宵を 泊りし	温泉宿柿に 雨けふる 宵を 泊りし	同
二階には 客なきも 灯や 夜寒宿	ふところの 柿暖う なりに けり	ふところの 柿暖う なりに けり	同
コスモスに 垣なき 姉妹 官舎かな	招かれしを いつも 柿畑に 月浴びて	招かれしを いつも 柿畑に 月浴びて	同
釣場蜻蛉に 笠占も せり 丘の 虹	乙贊堂 鐘の 大小に 寺格云ひ 合へり 柿見せ	乙贊堂 鐘の 大小に 寺格云ひ 合へり 柿見せ	同
	柿の 収穫 馬迎ひも 驟つれたちて	柿の 収穫 馬迎ひも 驟つれたちて	同

針閑暇を 鳥餌擦る 日向コスモスに	愛松	佛餐の 冷えコスモスの 移り香も	山雨樓
乳母が 家を 訪ふ 追懷や コスモスに	同	蓬湯の 香も 沁む タオル 蜻蛉夕	同
缺しきり 入るゝ 庭木や 蜻蛉晴れ	同	蜻蛉や 蕎麥の外れは 有磯海	同
客を 呼ぶ 辻馬車や 蜻蛉しきり 飛ぶ	同	草す 寺記 史料 闕如も 夜寒かな	同
煙草火種に 人しきり 待つ 蜻蛉哉	同	蜘蛛の 巢の 落ちしを ころ 夜寒哉	同
玉を試めし 琢ぐ 砂選るや 夜寒灯に	同	コスモスに 繩張れり 微雨 雫して	白聲
毀れ鏡に 猶顔 寫る 夜寒かな	同	壁條に コスモス 畑 寺領 朗ら	同
俳十夜 一題 一句に 夜寒かな	同	礦砂運びの トロール 蜻蛉道に 飛ぶ	同
劇の人となりて 鬚剃る 夜寒哉	同	無樹の 山 晴れて 麓 沼 蜻蛉 飛ぶ	同
二番漆 また 搔きに 疎林 尻射る 日	同	晝月も 見て 越せる 山 蜻蛉 飛ぶ	同
歸農 動く 先山 買ひや 漆搔く	同	紙干せば 丘 照れり 野に 蜻蛉 飛ぶ	同
秋晴れて 遷宮の 跡 雁 鳴ける	山雨樓	耕地 整理 来て 何 焚ける 蜻蛉 晴れ	同
川床の 一枚 岩や 秋晴るゝ	同	崩れ 峽の 赤う 照る 蜻蛉 宮 晴れて	同
宮焼けて 鳥居 残り 柿の 秋	同	箕埃りに 蜻蛉 閃かす 橋に 居て	同
柿の 秋 舊名を 追ふ 亭 成りし	同	水工事の 沙汰と 夜寒の 法話 役に	同
塋域を 相すや 柿林 近き 丘	同	酒座はてゝ 掃けり 夜寒 翌 晴思ふ	同
登山口 コスモスに 素湯 賣る 茶屋も	同	鍛透ける 沼 光り ちらゝ 漆搔く	同

朝市の景云へり漆掻くやめて
廢學三年既に鬚あり柿の主
追憶の佗しさに柿を貪食りぬ
師の遺言暗んず日頃柿熟す
外科室の水音やコスモス散る日
開墾に杭建てりコスモスの丘
畫寓訪へば牧場見ゆコスモスの窓
病後踏む足試し蜻蛉晴れの野へ
蜻蛉や蘆寂れ湖の落日見て
授戒果てぬと我々知る蜻蛉野路を來て
言葉詠りも夜寒旅路に買ひ馴れて
下山僧の夜寒の町に抱ゆ物
夜寒泊りも三山探景失望に
庵主他行に裏山漆掻を見に
象眼の君哀む漆掻くを見て
とぶような飛脚を見たり秋晴る
秋晴れを千秋樂の角力かな

白聲 漢籍の積れる窓や柿落ちぬ
無明燭 柿たゞく寺の坊主や腰ひくし
同 柿に烏江村秋を深うせり
同 柿熟し除隊兵まつ農夫かな
同 わらぢふむ足は空にと秋の晴
同 柿の本に人磨見ゆる夜更かな
同 秋晴れて故山を思ふ昨日今日
同 秋晴れて向山より河北瀉
同 串柿の軒に吊られて飯時分
同 合せ柿まだ澁かりき一夜哉
同 コスモスの古き下宿や今如何に
同 卒塔婆に力なげなる蜻蛉かな
同 峯入りの裏行場割愛や秋日和
同 退役の叔父が畑いちり秋晴れて
同 柿摘むも技巧あり誇る柿の主
同 花影 校林開墾賦役に柿の寄進ある
同 展墓日を樽柿が鏡開きもす
花影 同
不 同
同 二
同 畝
同 水
同 影

史蹟訪へ遺墨保存寺にコスモスが
晴信號コスモスは晴雨計臺ほこして
迎火にすがるもの化身蜻蛉にや
交代待つ監的壕や飛ぶ蜻蛉
塔下洋人が郷貫詮義もす飛ぶ蜻蛉
軒並みに丸薬莖や飛ぶ蜻蛉
京よりす疏水舟過や飛ぶ蜻蛉
裏聞きの嫁品評もす夜寒灯に
収穫祝ぐ納屋狂言も夜寒かな
むくつけきもの熊野がり漆掻

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

至誠と活動

崇敬の念止む能はず七百の健兒が伏見桃山の御陵に参詣す
べく決定せられたのが俄かに變更せられ些か失望の體に見
ぬた時しもあれ名士佐藤海軍大佐が來澤の報に接し一場の
講演を願つた此に其概要を掲ぐる事にした。(十月廿三日)
私は今度大演習で佐世保へ行く途路天晴會の請
を容れ當地に立寄ることにした、私が此地に來
たといふことを聞いて其機を逸せず捕へられた
のは確かに内に充實せる活動の氣があつたもの
と思ふ。

現今の思想界は眠れるやうで眞面目といふこと
が缺けてゐるやうであつたが、畏れ多いことあ
つて以來物質上に進歩せりとも思想上には缺け
てゐるらしくあつたが漸々に變調を來した、一
般に世は「僞」であるとか考へて居たものも先帝御
大患當初以來大に面目を異にして來た、舉國一
致御不例の一日も早く御快癒あらせられんこと

自己を愛し、自己に執着して行く心さ、自己を冷かに
批判して行く心さ、此の矛盾した二つの心持の中に、
自己は豊富にされて行く。—— 田山花袋

を祈るといふ風が明かとなり、乃木大將の死の如きこともあり、世の思想は漸々まじめになつて来た、私は乃木大將殉死の際其感想を問はれた其答は次の如くである、「大將の生涯は「誠」の一字にある具體的にいへば眞摯の二字である、大將の意中には眞摯以外に如何なる分子をも認むることが出来ない」と、至誠は活動の源泉、至誠より出でざれば眞の活動の意義を全うするを見ずと感じてゐる、それで活動と至誠といふことに就て話して見やう。

此度日蓮上人を發表せんが爲め天晴會に加入することとなり今日に及んだ、上人は如何なる人であつたか又其活動を如何にしたか、凡そ世の學問といふものは普通私の説として寶庫にあるものを持ち出すに過ぎない、學問研究は時を追ふてなされる世界人類の爲めであるといへる、兎に角急ぐべき性質の者でない、明日なるもよ

し又明後日なるもよろしい、然し世の中の實社會の事は非常なる速度を以て活動しつつある、社會に對し師友に對し家庭に對し凡てのものに於て爲さるゝ所のものは活動して一刻も停滯することはない、恰も飛行機を動かすやうだ、然かも其槌を取るに當り時と處とに應じて變更し自由に運用するとは甚だ六ヶ敷い、其槌を如何に動かすべきか、其變化の複雑すると共に其進行を定むる上に混亂を生じ來る場合がある、かかる時に臨んで或靈的のものがあつて自分を指導するものであると考ふる時、此に大なる勇氣を生じ其雜關を切抜け得るのである、吾々は護國の爲めに盡す神は吾々を守るといふ信念によりて働き得る、若此信念なくば落膽する失望する、確たる一の信念あつて初めて我が天職を盡すといふ護國の精神に指導せらるゝのである、一の自信一の信念より困難に處して迷はない、

此に於て活動といふことが基因すること大なるものである。

これが我國民の生れた所以である、世には止むなく統一者を要求して主宰を出し其下に活動せ

活動にも種々の意味がある、活動は靜止に伴はねばならぬ、然かも物質的精神との二方面がある此兩々相俟つて初めて成功するものと考へる、私は神と己れとを結んで離るべからざる温かみを以て進みゆくものだ、此點に於て日蓮上人を鑽仰する、上人は至誠と活動の人である日本を廣く解釋したるものは上人である、我國は特有の國家を有して居る、凡そ世には國家の成立に二種の區別がある一は自然に成れるもの他の一は人工的に造れるものである、人間の腦中にある靈は身体の存在を満足にせむが爲めに起つたものである。それであるから靈、精神といふものゝ爲めには身体を粉碎するもよろしい、身体の爲めに精神あるにあらず、此一大意味ある國家の存在の爲に各人は生れたものである。

此れが我國民の生れた所以である、世には止むなく統一者を要求して主宰を出し其下に活動せんとするものがあるが之れは我が國家成立の意義ではない、家長ありて此に妻子あり、眞理は初めより不生不滅常住の實在である、世は變化する事あるも常住なる者は眞理である。日蓮上人は常に世に日本程貴き國は無いと言はれる、又日本を呼ぶに小日本と大日本との二つの名稱を用ゐられた、我が同郷の友人であつた故高山樗牛は日蓮上人を以て非國家的といへるは其小國家といへる處のみを見たからで形而上より見れば小日本であるが、日本存在の意義は確かに大日本の意である、日本は一天萬乘の君ありて治められる而して日本の天職は不滅にして常住のものである、宇宙の眞理と伴ひ之れを實現せんとするのだ、此點に於て吾々は上人を崇拜する。

上人には一點の私なし俯仰天地に耻ぢずして働世の中の事は全く自分の爲めのみに善をなすもけるものである、然かも非常に涙もろき人である、然らざるものは偽善である、其弟子が牢中に寒を凌ぐ状を悲みて佐渡に渡つたことがある、身は魚鳥となるも誠心を宿る佐久間大尉が死に至るまで陛下の爲に盡し、信ずる所は眞理である梵天帝釋何ぞ恐るゝ、其部下のものを安んぜんことを願つて死んだ、に足らんやといひながら然かも情に厚い人であつた、法の爲めに進むには身を鋸に引かるゝ共彼の先帝陛下の御大患にあらせらるゝに及んで撓まずと云つてゐる、而して一方では世法と融は心中何心なく御快癒あらせられん事を偏へに合するものであるといつて俗を離れず然かも之れと伴はない、其行ふ所は眞理によつて天真爛方に報せられた、將軍の死に至つては利己の意熾である。

今日は天晴會が縁となつて一場の縁を結ぶこととなり期せずして此に上人の鑽仰の一點を披瀝するに至つた、之れ全く明治帝の崩御乃木大將の死等が因となつて居ると思ふ。私は知人三栗博士から一つの話を聞いた、或時一文士が博士の所に來り言ふには「實に困つた私は思ふに益々眞面目にならんことを決心した、彼の文士

の如きものとは大に異なる所である、先帝御大まで勇進すべきものである。……云々

(文責在記者)

患に就いては其起つた所以を深く疑つた、之れ恐らくは陛下が身を以て國家の爲めに過勞し下さつたのである、而して大に修養に御心を煩し給ふた、之れに反し吾々は眞面目に考を起すこと

(巢山生記)

熱烈なる快辯を以て衷心の叫びを眞摯率直に披瀝せられたる大佐の熱誠に對し吾人は深く謝する次第である。

とが少ない恐懼の至りである、陛下崩御遊ばされて以來日を経るに従つて敬慕の情に堪へない、之れ全く陛下の御高德の然らしむる者である、吾々は陛下の御在位中に下し賜はつた詔勅

を、
殘滓のみさなりしインクの壺一つ今日も残れる古机かな
あすさいふ日の戦ひを打ち忘れのびしまゝなるわが手足かな

を轟轟と感ずる、陛下は敬神の念が深かつた而して國民の毒思想に迷はされざらんことを深く御軫念あらせられた、然るに翻つて願ふに畏多

——尾上柴舟「永日」

くも 明治天皇の大業を忘れんとする風潮すらも起らんとする傾向がありはせまいか、私は反省したのである、私は自個の赤心を述べ、日本國存在の大意義宇宙の眞理に向つては飽く

な、
ふくらめる椅子の背皮にこゝちよき夢をのせたる日もあり
しかな

故郷の友に 平泉 澄 か。

青桐の花がほろほろと散つて思ふ事の多い秋となりました。

すべての友が羽音勇ましく飛出したあとに只一人故郷に残つて居る君にとつては、この秋はどんなにか悲しい事せう。

——神をも信せず自己をも信せず、只一つ頼んだ友の心、それも今や離れんとして居る——

私は君の葉書のこの言をどうしても忘れる事は出来ない。

神を呪ひ人を呪ひ自己を呪ふ君のすさんだ心は、僕の心までも疑つて居るのか。

あゝ僕は實に泣き出したくなる——もし故郷に居るのだつたら直ぐに飛んで行つて君と心を打明けて話すのだが——

君は何故にそんなに世を信じないのだ？

君が中學を出る時次の様な事を云つたじやないか。

君が中學を出る時次の様な事を云つたじやないか。

——僕はトルストイを慕ふ。自由の天地の中に自由に生きて、靜に自然を味ひ、詩に耽つて居たい——

そして今や君の考へ通りになつたじやないか。それに何を煩悶し何をくやしがつて居るので

す。詩も作れず、自由の樂園にも遊ぶ事が出来ず、只自己を呪ひ世を恨んで居る。

私等の心はいつも二つの矛盾に苦しめられて居る。一は肉体的欲望で功名や富貴などの人の心を誘ふ看板を出して私等をおびき寄せようとして居る。一は心靈の聲であつて清淨な眞實な世

界に導き人間を神に近づけやうとして居る。世の人の多くは滔々として前者の醜い淵の中に流れこむ——丁度それが人の行くべき正當の道であるかの様に。

君の自然を愛する心、眞面目な生活をしたいたい

君の自然を愛する心、眞面目な生活をしたいたい

君の自然を愛する心、眞面目な生活をしたいたい

思ふ心、それが友の飛び立つけた、ましい羽音に驚かされて、この肉体的欲望の潮流に捲き込まれたのではあるまいか。

さうなると現在の自己がいやでたまらない、世を嘲り神を嘲り友を嘲る様になる。この邊を眞面目に深く考へて貰ひたい。

友から借りたビョルンソンのアルネの中に次の詩があつたのを、私はうれしきと誇と無くして讀む事は出来なかつた。

嘗て吾は思へり

若し世に出で、運命と戦はゞ

實に吾も偉き人となるべしと

.....

「立て若人よ！力のあらん限り戦へ」と

野心の聲は高く叫びたりき
されど乙女は吾に教へぬ(言葉なく)
神の與へ給ふいともうれしき事は

名を擧げるにも偉くなるにもあらで

人として完たかる可き事なりと

君よ、世の愚人を對手とせず、大なる心靈界を對象として考へ給へ。

——徹底せる生活

私達は之をさへ得れば十分である——名譽や富貴を得ずとも。

品性を完全にすべき道如何、たゞ日々を最後の日として過ぎ、激せず、怠らず、偽善を行はざるにあるのみ

——マールカスアウレリアス、

扉 佐藤 曙汀

我がふめる土の響は天地のしづまを破り命おびえぬ。

三十の女の髪はやゝ淡き淡きも吹けやはつなつかせ。

青き火と濱燈臺の赤き火と二つひかれるやみの來しかた。

青き沼八月時の白き風渡るをみつゝたびゝの行く。

秋たてばよろこびあらずほゝえめと白萩咲くか我や敗人。

汽車の音よ知らぬ他郷にさまよへる若旅人に涙あらずな。

石見ゆる田舎の道を旅人はとんぼを見つゝ淋しげに行く。

反射する白き瓦の家つゞき家も眠れるなつのひるかな。

花を見て楽しむ我をなぐさめず八月の日はたそがれて行く。

燈はゆれて緋の御衣の半面は暗き御堂にあかあかと見ぬ。

初夏の草のしげみの中に行き歌うたいは思ふ子なりし。

ほとゝぎす古き並木の反響にきこりの斧の音絶えて居し。

つかれたる心抱きてクローバに横はる時物はかなしき。

しぐるゝや明るき谷をへだてして暗黒色の山ぬるゝ見ゆ。

若ふして見たる腫は幼けとき見たるひとみと異なりて見ゆ。

死を思ひ海のほとりをさまよへば白雲我を慰めてあり。

道淡し何を己れがむくろぞとひやゝかに見し我

が命かな。

幾度か願ひし事のさちなくて神を呪へるはかなかる我れ。

むせび聲すゝり泣く聲にび色の空氣のしたの劇場の夜。

悲みをうすめんとして幾度か眠らんとして能はざる宵。

白萩や化粧の匂ひひそめたる大宮人に似しも似しかな。

かすかなるうめき聲しぬ淋しさを抱いて寝ねぬ風やみし宵。

ときはなつ髪先の先よりはつ秋の長きなぎさが漂ひてあり。

うまいする乙女心の味ひに母なる人は若がへりしぬ。

高らかに歌へば深き晩秋の香りは脈をしみゝくどうつ。

燈はゆれず讀經の聲のしめやかに緋の御衣を掠

めてぞ逝く。

漁夫の妻あまた集り砂山に十一月の海なりをきく。

美しき糸もてつゞり悲の胸緒にせよと賜ひたりしか。

神呪ふ照し給はぬ神呪ふ神も呪へと我は願ひぬ。

ふる墓の倒れしあとに八月の眞晝の中に晝顔の咲く。

文科大學より 尾崎 生

(前畧)鳥兎早々小生が帝大英文科に入學仕候より早や一年有半となり申候四高出身にて英文科に入學仕候同窓は木村秀夫、菊池龍道、百橋遊芳の三氏之に小生を加へて四名に御座候始めはて

んで様子が判らず四名共時間表の作成に困難仕
候已に御承知にも候はんが英文科は三年間に十
九單位を修了せざるべからず専門の英文學の九
單位以外に言語概論、文學概論、心理學概論、美
學概論、哲學概論、國文學史概論、近世歐洲文學
史、希臘羅馬文學史、支那文學史を修了せざる可
く候

らず其外語學試験として獨佛二外國語の中其一
を擇ばざるべからず小生等四名は皆佛語を擇び
申せしが小生のみ試験に及第せしは何處の風の
吹きまはしか望外の喜に候小生の經驗によれば
成る可く早く成る可く多く一回生二回生の時に
概論を修了仕り卒業間際に狼狽せぬ事最も必要
と存候就中心理學概論は是非共一回生の時に修
了し置く事必要と存し候蓋し心理學概論は概論

中最も分量多く三帖ノートに片面に書きて五六
冊は必ず要すべく且つ授業時間が午後四時より
五時或は四時より六時といふ妙な時間に候へば

English Phonology
History of English Criticism
English Prose diction
English Poems

English Dramatic

の五單位にてロイド教授の死亡以來其他にテニ
スンの詩 In memoriam の講義とレトリックの講
義と受持たれ候其熱誠なる勇氣と盛なる根氣に
は全く感服仕り候松浦先生は詩の講義に候ロー
レンス先生の講義中最も有益と存候は第一のフ
オノロジールなる可く從來目茶苦茶なる發音をな
せる我々に取りては實に暗夜の燈に候其他の講
義も有益に候へとも寧ろ學生泣かせと申す方至
當かと存じ候第二のクリチズムの如きは受験
僅かに四五名に候ひき

本郷の一角より 越藤生

つは問題の多き故に有之候
要するに大學とても高等學校と同じく勉強家が
最後の勝利を得る點に於ては毫も變らず只規則
がルーズなる點に於て大學生らしく感ずるのみ
に候(下略)

これは本年四高出身の越藤恒吉君が余に寄せ
た書翰の抄録である。越藤君は獨逸法科生。
で主に該大學に關する部分を抜く。(其月生)

(一)

僅かに四五名に候ひき
何分一年に一回即ち六月に試験するのみなれば
何つれも分量多く平常よりノートの整理最も肝
要と存じ候試験は皆二時間づつに候然しローレ
ンス先生の試験は二時間にては到底不可能にて
午前十時より十二時までが定めなりしが其實は
午後の二時半乃至三時頃までかゝり申候是れ一
涼しくなりました。
夜が長くなりました。古めかしく燈火親むべき
頃などと云ふ迄もなく、靜かに机に向ふ事も出
來る時節になりました。こんな際につい機會を
失して差上げようと思つて居り乍ら申譯け
のない御無沙汰を致しました。御詫に何か御報

致しようと思つた。相變らずつまは思ひ及ばぬ事で、何んとなん厭な氣持が致し
らない手紙になる事ならんと書き出さぬ前から。然しおとなしく騒の靜まるを待つて教室
心配して居ります。殊に言文一致で書くのは如へ入ると最早一つの席もなく、止むなく教壇の
何にも失禮の様でありますが、先生と對談をし、上で或は窓框の所で、或はスチームの上で筆記
て居る様な情調の下に書きたいと思つて特に御をせねばならない。イヤそれどころではありま
許しを御願ひ申すわけで御座います。

(二)

扱て二十四日の朝、かねく聞いて居た事もあ段教室でありますから、上の方に居る時には、
りましたから、少しは早いかと思ひ乍ら七時頃 教授によつて聲の通らぬ事もあります、黒板の
に登校致しましたが、決して早い事はなく、八文字の讀み得られぬ時もあります、何んとか取
時から始まるのに、はや法科三十番教室の前は 縮の方法がないものかとは誰れしも思ふ事だが
黒山の様に人波を打つて居ります。小使が來て 年々歳々同一の状態で同一の騒を繰返して居る
七時半頃に戸を開けるや否や我れ勝ちに押し付と云ふ事です。之が爲に遠方から通學して來る
ける。足は踏まれる、帽子は飛ぶ、中には眼鏡 人は實に氣の毒な目を見る事があります。わざ
を飛ばされて困つて居る人もある。インキ壺が わざ登校しながら一字も筆記せずして歸へる人
袖にからまつて身動きの出來ない人もある。秩 もあります。此の騒は法科大学のみで他の分科
序ある中學や高等學校に居る人々には此の光景 大學では決して見れない事です。以て如何に法

科學生の多いかわかります。三十番教室は最に高等學校の寄宿舎生活は最も美しいホームで
も大きくて優に五百人を容れ得るが、それが上 長く忘れる事の出來ない楽しい思ひ出となる事
の様な有様になるのですから、まづ、六百有余と、寄宿舎に居た人々の親密な交りを見る度毎
の學生が耳をそば立て眼を引き吊つて教授の一に、さうした機會を得なかつた私は羨ましい事
言一句を聞き逃さじとあせつて居るのです、冷に感じて居ります。

(三)

かに之を傍觀したならば正氣の沙汰と思はれな
いでせう。今更高等學校時代の平和な親しい黨次に私は私共法科一回生が修めねばならぬ各科
陶を受けた時代がなつかしくてなりません。無目に付て御話しを申し上げたいと思ひます。

論教授と學生との間に親密な關係も出來難く、憲法講義の事を申上ぐるに際し、御存じの穂積
學生と學生との間に於ても新たに友人を求め 八束先生の逝去せられた事を先づ私は悲しみま
などは殆んど不可能の事であります。社會の人す、新聞紙が報じて居る通り、去る五日午前八
となつて互の境遇が利害の念を直接に感せしめ 時何分かに突然なくなられたので皆々意外とし
る様になると色々複雑な關係や情實が起つて、た所であります。兎角此の一兩年は法學界に禍
とても隔意のない友人を得る事は出來ないでせの多い年で、民法の大家梅博士を失ひ、明治大
う。然うすれば高等學校時代に打解けた親しい 學の校長として令名のあつた岸本博士がなくな
友を得なかつた人は終生友なきをかこち乍ら淋 られ、續いて中央大學長の菊池博士が死なれた
しい生活をせねばならないかも知れません。殊のであります。然るに今や又憲法學者として我

國のオーソリティーたる穂積博士の訃を聞く事になりました。私共法學生にとつての損失は莫大なるものであります。

穂積博士の帝國憲法に關する意見は憲法大意と云ふ國民教育的の著書と大學の講義を素として補足せられた憲法提要(縣立圖書館にあります)この二冊に遺憾なくあらはれて居ります。博士は三年前の紀元節の日宮中に出仕せられての歸へるさに發病せられて以來兎角健康すぐれず大學の講義も休み、ひたすらに療養せられたが遂に斯うした不幸な結果を見る様になつたのであります。私共の憲法講座を受持つて居られる、

法學博士上杉慎吉氏は博士の衣鉢をうけられた唯一の人で、日常博士に深く師事せられ博士の居常を最もよく知つて居られる人です、上杉教授が去る七日の日教場で博士の事に就て大要次の様な事を語られました。(中略、其月生)

兎に角穂積先生を失つたのは同じく私共の不幸だと思ひます。然し今後愈々上杉教授は穂積博士の意のある所を体して帝國憲法の講述に努力せられる事と思ひます。余談に互りましたが、憲法は一週四時間の講義を一回にて全部を終へる豫定であります。

(四)

民法も憲法と同じく一週四時間、一回で總論を終へる事になつて居ります。教授としては富井博士が講座に立たれます。富井教授も近來健康すぐれず、殊に氣管を損せられて居るので二時間の講義は甚だ苦しうに見えます。聲が低いので教室の窓は一枚たりとも開放す事はならぬ事になつて居りますが、それですら語尾を聞き落す事が間々あります。富井先生には民法原論と云ふ著書があります。私は民法の講義を聞くに及んで石川先生より教はつた法學通論が如

何にもよく役立つので深く感謝して居ります。

石川先生は各大家の説を遺憾なく紹介して之を詳しく批評して下さいました。丁度富井博士から聞く民法は石川先生に教はつた事を復習し乍ら少し詳しく立ち入る様な氣が致します。今年の四高の法科の人は石川先生に依て原書を使い乍ら、傍ら先生の講義を筆記する事になつて居るとの事ですが、實に幸福な事で、熱心に先生に質疑して勉強するのは大學へ來ての後非常なる助けとなる事と思ひます。英法の人も石川先生より習つたテリ、の法學通論の爲に非常なる便宜があつたこの事です。尙富井博士の講義振りには實に手に入つた慣れたもので、一言の無駄なく、言々句々ジリ／＼と學生の腦裏に彫り込む様に説明せられます。此の様な大家の教を享くる私も亦幸福な事であります。

(五)

刑法は牧野、泉二兩教授洋行中だったので、司法省參事官谷野格氏が講師として總論を一週二時間宛講義せられます。可成、實際問題に就て其意味を明にする様つとめるこのことわりであつたから、大審院判決例等を参照せねばならない場合も多い事と思ひます。刑法を研究して司法官にでもならうと思ふ人は暇々に圖書館にある法律新聞や雜誌を讀んで居る方が有益だらうと思ひます。

(六)

羅馬法は一回生の最も難物とする所で、春木博士が熱心に講義せられると、愈々ノートが多くなつて咀嚼に苦しむ事となると云ふ話であります。その第一の理由は用語が全部羅句語であるが爲と、邦語の参考書が皆無であるが爲です。それ故高等學校では是非羅句語を學ぶ必要があらります。私もスタイネル先生の御世話になりま

したが、殆んど忘れて居るので、今更熱心に先井先生に教はつた歴史そのまゝです。だから歴史の生の教を受ければよかつたのにと後悔の臍を噛ノットは大切に保存して置く必要があると思んで居ります。春木博士が二時間で羅旬語は大ひます。私共は陰乍ら浦井先生に深く御禮を申体斯うした變化をするものだと、無數にある面して居る次第であります。

(七)

倒な各品詞の變化を立板水的に話された所で、
 覚え込まれる道理がありません。やはり高等學
 校時代に充分力をつけて置く事が肝要でありま
 ず。春木博士は有名なる篤學の先生で、羅旬語で
 の演説なぞ易々たるもので、且つ英法一回では
 テリー先生のコンモンローを講述し、その餘暇
 羅馬法に關する著書の完成に努力して居られま
 す。又講義の熱心な事も他に類を見ない程で、
 英、獨、佛、羅旬の著書からの引證も章、節、ペー
 チ等一々指示し責任ある論證をせられます。
 此羅馬法を學ぶに際し、四高出身の人は浦井先
 生の歴史により莫大の利得を致します。羅馬國
 々の推移や、羅馬法典成立の事に關しては浦
 金井 延著 社會經濟學。

田島 錦治著 經濟 原論。
 小林丑三郎著 純正 經濟。
 小川郷太郎著 經濟 通論。
 津村 秀松著 國民經濟原論。
 福田 徳三著 經濟學講義。
 浮田 和民著 經濟學之原理。
 神戸 正雄編輯 經濟 全書。
 氣賀勘重譯、フイリップポウィッチ氏經濟原
 論等

その他經濟雜誌七八種、及經濟辭典などもあり
 ます。外國語の参考書と共に余り長くなります
 から省畧致します。

(八)

●●●●●
 國法學は野村教授が一週四時間講義せられま
 す。之は政治科の學生には必修でありますが、法
 科には選擇であります。法科の學生は二回で比
 較法制史、三回で破産法、四回で海商法の中二

科目を選擇必修せねばならないのです。野村教
 授の講義振は演説して居られる様で美しく筆記
 をとると云ふ事は中々に六ヶ敷のです。野村博
 士は筆記させる方針でなくその要点を取つて覺
 え込めと云ふ事ですが、慣れない私共には一方
 ならぬ困難であります。奥田博士、坪井博士等
 も同様筆記を殊更にさせぬ方針であるさうです
 から、多少突飛に早い講義に出會ふと云ふ覺悟
 も必要であります。大体は浦井先生の講義を
 落さぬ人は大學の講義に更に驚く事はないので
 あります。

國法學とは云ふものゝ野村教授は主として比較
 憲法に重きを置かれて講述せられるのでありま

(九)

●●●●●
 外國法は英、獨、佛の各科により、その國語の原
 書により研究するのでありますが、私共獨法科

では未だ教科書到着せないので目下は筆記をします。
て居ります。英法科はテリー先生のコンモン、尙、地方的偏見を以て申し上げるのではありま
ローを使つて居りますが、一日優に十五六ペーせんが、數多からぬ教授の中、上杉、野村、谷野
ジ進むこの事でありませぬ。

(十)

誇りある氣が致します。

(十一)

●●●●●
獨法科は鳩山、穂積兩氏共洋行中なので三瀨教
授一人で一週四時間教へられます。外國法の兼
修は卒業する迄ありますから、何處迄も語學の
力は大切かと思ひます。
由御風聲下さるならば、之に過ぎたる幸はあり
ませぬ。(大正元年十月十二日午後)

(十二)

叙任辭令

大体上に申上げた様な有様ではありますが、高等
學校時代の楽しい親しい、趣味ある生活は失せ
て、如何にも堅苦しい、獨立獨歩の、頼りのない
所へ投げ出された様な氣が致します。何等意義
ある生活をせなかつた、高等學校時代が無暗に
惜しい様に思はれますが、今更致し方のない事
で、今後コツ／＼と努力しようと思つて居りま
大正元年八月二十六日
講師ヲ囑託ス 佐藤 直丸
生徒監心得ヲ命ス
任第四高等學校教授 陸軍教授 青木 芳彦
叙高等官七等 十級俸下賜
八月九日

八月二十六日

陸叙高等官二等

教授 今井 省三

文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職
ヲ命ス

助教授、關 操

八月二十九日

講師ヲ囑託ス

陸軍歩兵少佐

高橋 溪次郎

九月十日

八月三十一日

依願囑託ヲ解ク

講師

小林 平藏

叙正七位

教授 西 英盛

同

弓術師範

本多 政由

同

教授 山本 鬼一

体操副科弓術師範ヲ囑託ス

楠 正路

九月十二日

賜三級俸

教授

今井 省三

陸叙高等官五等

教授 高島 喜市

依願免本官

任第四高等學校教授(七等)

野村 行一

十月三十日

教授 篠原 一慶

同(七等)

石川 鐵雄

叙從七位

教授 野村 行一

六級俸下賜

教授

西 英盛

同

教授 石川 鐵雄

八級俸下賜

教授

星野 信之

十月三十一日

文官分限令第十一條第一項第四號ニ依リ休職

教授

水蘆 幾次郎

講師ヲ囑託ス

今井 省三

ヲ命ス

任第四高等學校助教授

山田 喜久良

北辰會日誌

卒業證書授與式

薰風に若葉の香りを運んで来る七月五日午前九時、厳かな第二十四回卒業證書授與式は至誠堂に於て舉行された。美々しく纏ふた朝野の貴賓、瑩雪の苦を破衣に宿した、我等が先輩送る者にも送らるゝ者にも歡びの色が漲つて居る。

スルノ念ナカルヘカラス是洵ニ國家カ諸子ニ囑望スル所ニシテ亦諸子カ本校教養ノ旨趣ニ副フ所以ノ道ナリ諸子旃ヲ勉メヨ

明治四十五年七月五日

文部大臣 長谷場純孝

次ぎに溝淵校長の告辭がある。

告辭

卒業生諸子諸子多年勉學ノ功成リ茲ニ卒業證書ヲ受領スルニ至リタルハ諸子竝ニ諸子ノ一家ノ爲ニ又國家ノ爲ニ大ニ慶賀スルトコロナリ諸子

祝辭

本校教育ノ實績年ト與ニ舉リテ本年亦幾多有望ナル卒業生諸子ヲ出セルハ本大臣ノ欣喜ニ堪ヘサル所ナリ

ハ更ニ進ンデ大學ニ入學セントスルヲ以テ大學ノ修業ニ關シ一言注意スルトコロアラントス

願フニ諸子ハ將來地位ヲ社會ノ上部ニ占メ國民ノ儀表タルヘキモノナルヲ以テ獨リ專攻ノ學術ヲ大成シ以テ國運ノ進歩ニ貢獻スル所アルノミナラス高尚ナル人格ヲ鍊成シ國家ノ綱常ヲ扶持

大學ハ國家ノ須要ニ應スル學術技藝ヲ教授シ及其蘊奧ヲ攻究スルトコロニシテ體育ト德育トハ大學教育ノ直接目的トスルトコロニアラズ思フニ是レ大學ガ學生ノ身體ト道德トヲ輕ズルガ爲ニアラズシテ大學々生ハ既ニ高等學校ノ教育ヲ

終リタルモノナレバ學校ノ指導ヲ待タズ自ラ進

計ラントス是レ歐米人ガ其學習時代ニ於テ自動

ンデ心身ノ修養ニ努力センコトヲ要求シ且ツ之ヲ期待スルガ爲ナリ近時社會風儀ノ頹敗ト不健全ナル西洋思想ノ侵入トハ學生ノ身體ト精神トヲ軟弱ナラシメ剛健實質ノ風漸ク尠ナカラントス諸子善ク思フ此ニ致シ自ラ彊メテ徳性ノ發達ト身體ノ強健トヲ計ランコトヲ期セヨ

的ニ工夫研鑽ヲナセル結果ニシテ同時ニ歐米ノ文物制度ガ我邦ニ比シテ一層急速ノ進歩ヲナス一原因ナリトス故ニ諸子ハ大學ニ於テ熱心ニ教授ノ教ヲ聽カザルベカラズト雖獨リ之ニ満足セズシテ或ハ圖書館ニ或ハ研究室ニ入りテ獨立ノ研究ヲナシ以テ知能ノ啓發ヲ計ルト共ニ自動的

更ニ學術技藝ノ習得ニ就テ一言セン我邦ノ學生

研鑽ヲナス良習慣ヲ得ンコトヲ努ムベシ

ハ概シテ受動的ニ教師ノ教ヲ受クルコトニ偏シ自動的ニ工夫研鑽ヲ爲スノ風ニ乏シ故ニ其學習セル知識確實ナラズシテ自由ニ之ヲ應用スル能ハス且ツ學校ニ於テ獨立ノ研究ヲナス習慣ヲ得ザルヲ以テ學校ヲ終ルト同時ニ書籍ヲ擲テ願ザル者多シ歐米諸國ニ於テハ學者ノミナラズ實務家ニ至ル迄常ニ書籍ニ親シミ一ハ以テ自己ノ修

惟フニ維新以來我國運ハ實ニ長足ノ進歩ヲナセリト雖殖産工業其他百般ノ文物制度ニ於テ猶ホ歐米諸國ニ及バザルトコロノモノ多シ故ニ吾人ハ歐米人ニ比シテ幾倍ノ努力ヲナサザルベカラズ加フルニ支那ハ武昌ノ變亂以來國內ノ動搖未ダ鎮定スルニ至ラズシテ内治外交益々困難ヲ極

養ニ資シ一ハ之ニ依リテ日ニ新ナル學術研究ノ結果ヲ知リ之ヲ自己ノ事業ニ應用シテ其改善ヲ

ノ問題ガ將來如何ニ解決セラル、カハ我國運ニ至大ノ關係ヲ有ス故ニ我邦ハ列國ヲシテ擅ニ支

那ノ問題ヲ解決セシメザルニ足ル實力ヲ具備セ 澤ニシテ校長閣下諸先生ノ多年ノ薰陶ニ因ルコ
 ザルベカラズ思フテ此ニ至レバ吾人ハ實ニ一日レ生等肺肝ニ銘ジテ忘ル、能ハザル所ナリ而シ、
 モ心ヲ安ンスベカラザルモノアルヲ覺ユ諸子ハテ今又文部大臣閣下ノ祝辭並ニ校長閣下ノ懇篤
 今後三年或ハ四年ノ星霜ヲ學窓ノ裡ニ送ルベキナル教諭ヲ辱フス生等不敏ナリト雖モ益々奮勵
 モノナレバ専心學理ノ研究ニ身ヲ委ネ未ダ國家シ兩閣下ノ高論ニ背カズ各々所定ノ目的ニ突進
 社會ノ實際問題ニ携ハルヲ許サズト雖今ヤ帝國シ鴻恩ノ萬一ヲ報ゼンコトヲ期ス謹ンデ答フ
 最高ノ學府ニ入り他日國民ノ上流ニ位シ其指導 明治四十五年七月五日
 者タルベキモノナレバ常ニ思フ我邦ノ狀態ニ及 第四高等學校第二十四回卒業生總代
 ボシ以テ自ラ戒メ且ツ奮勵スルトコロナカルベ 吉田常次郎
 カラズ一言ヲ述ベテ告辭トナス

明治四十五年七月五日

第四高等學校長 溝淵進馬

最後に卒業生總代の答辭が聞かれた。

永久赤煉瓦の母校を後にして青空に隠れる雲雀
 の様に櫻はる散る都へ、一二百の校友が新に觸
 れる大學生活、そら若い胸は如何に響くだろう。
 (M生)

答辭

本校茲ニ生等ノ爲メニ卒業證書授與ノ盛典ヲ舉
 ゲラル生等ノ光榮何モノカ之ニ過ギン生等魯鈍
 ノ資ヲ以テシテ此光榮ニ浴スルハ誠ニ聖代ノ恩

卒業生姓名

第一部英法科 六十四人

新木榮吉 石川 堀 朋近 石川
 加藤貞國 新潟 山本龍作 静岡

林 德一	廣島	杉坂富之助	富山	松岡虎夫	岐阜	野村篤一	愛知
中納 健松	石川	岡 弘二	和歌山	杉田 久	福井	富樫六右門	富山
秦 茂雄	秋田	東 讓吉	兵庫	原 正一	東京	伊藤 仁	長野
長野 歳重	埼玉	小崎 恭人	新潟	林 廣	長野	高橋正三郎	福島
笠原壽美雄	三重	宇野義一	富山	藤江 孝	静岡	北村與三郎	石川
石川 功	静岡	黒田吉郎	静岡	田村英之	徳島	須藤二郎	三重
多和田立雄	岐阜	岩佐剛一	三重	木村作治	大坂	中西頼三	愛知
木原光雄	和歌山	中田秀雄	福井	湯川榮三郎	和歌山	中村 昇	福井
大西恆太郎	東京	河野 隆	大分	黒石丑吉	兵庫	米谷他平	石川
白井 演	石川	白井兵庫	茨城	野田慶一	和歌山	杉山清一	山口
村谷彦治郎	巖手	布川亥四郎	新潟	第一部獨法科 二十四人			
山本重晴	新潟	山田吉朗	北海道	吉田常次郎	富山	越藤恒吉	石川
松田泰二郎	愛媛	平手多計比古	石川	寺島三郎	富山	榛村專一	静岡
今村眞彦	石川	山添恆治郎	京都	塚越悦郎	埼玉	曾 天	支那
笠川胤平	千葉	瀧谷健藏	北海道	日高豊一	鹿児島	古川六郎	千葉
居石 茂	佐賀	鈴木忠之丞	千葉	八木力三	静岡	志保谷正義	石川
國友榮五郎	石川	小坂義雄	長野	野本謙治	新潟	金子要人	埼玉
關川重雄	北海道	山名不二雄	山口	鳥山成三	富山	伏間教順	富山
石川義雄	埼玉	渡邊退助	新潟	伊江朝睦	沖繩	堀居辰次郎	北海道
大坪不二馬	鹿児島	田原喜嗣	石川				

關 芳雄 青森 長谷川清一 新潟
 松山高四郎 大分 岡崎武夫 富山
 西村敏吉 滋賀 寺崎定造 兵庫
 稻葉一也 新潟 片岡憲三 富山

第一部文科 十七人

河瀬嘉一 石川 永井警隆 富山
 波邊 鼎 石川 高宮儀助 新潟
 高木卓爾 岐阜 辻 隆三 山梨
 鈴木一貫 愛知 中 性慶 富山
 今淵正太郎 青森 宮下憲三郎 東京
 津山玄道 富山 照岡祐兼 石川
 千家鐵磨 島根 小柏丑二 石川
 河野 潔 宮崎 布川 豐 福井
 古谷榮一 神奈川

第二部工科 三十三人

野村伊兵衛 石川 林 千秋 石川
 竹内 孝 福井 堂徳清之助 富山
 藤井隣次 富山 富井義司 長野
 高桑謙二 石川 南日良吉 富山

第二部理科 五人

匹田敏夫 岐阜 鑄木外岐雄 石川
 原口忠次郎 佐賀 鈴木市太郎 福島
 村尾 亨 長野
 菅野新八 富山 加藤廣造 岐阜

第二部農科 十三人

洲崎哲二 富山 井上 功 新潟
 池原啓三 富山 佃 貞寛 岡山
 十倉頼介 京都 和田國友 大坂
 中川久男 福井 高田楠雄 長野
 金森虎男 福井 佐藤三千三郎 新潟
 鳥居武雄 山形 石田昌勝 新潟
 吉田平次郎 石川 南 茂松 富山
 南 俊治 北海道 松井式部 山口
 笠原傳七 東京 瀧川竹四 東京
 伊良原國市 徳島 土橋光太郎 長野
 渡邊忠次郎 千葉 西岡道隆 和歌山
 垣田馨兒 山口

第二部藥學科 一人

稻生豐作 東京

第三部醫科 四十三人

中川 諭 福井 天田謹四郎 新潟
 石川一佐久 東京 宗廣純吾 石川
 室橋民衛 群馬 笠森周護 石川
 原 勇三 長野 榑野 嚴 新潟
 田村彦三郎 石川 橋本隆敏 福井
 松野 龍 富山 村田美喜雄 京都
 春名顯一 東京 増澤 肇 長野
 吉野三郎 富山 宗田久松 山形
 山田卓爾 福井 越田瑾持 石川
 武重 薫 長野 八賀益造 岐阜

遙拜式

八月一日

先帝陛下崩御の御報に接するや本校にては不
 取敢近縣の學生を召集して哀悼の微意を表し、
 越えて九月十三日午後十時、畏くも
 御靈柩將に青山靈場に至らせらるゝ頃、全校生

徒を靜勝館に集めていと嚴重に遙拜式を舉行せられ。又在京生徒中一部三年永田憲雄二部三年居村淳一三部三年栗原三郎の三氏をして、生徒を代表し文部省指定地に於て靈輦を奉送せしめられ。其他の在京生徒約五十名も、同所に於て奉拜することを許可せられたり。

於穆我カ至仁至聖允文允武ナル

大行天皇陛下俄カニ神器ニ背キ臣子ヲ棄離シテ登遐シ給フ億兆驚愕措ヲ失ヒ擗踊號眺考妣ヲ喪フカ如シ嗚呼哀哉伏シテ惟ルニ
陛下天資英明維レ仁、太一ヲ體シ維レ德、乾元ヲ含ミ幼冲 聖祚ヲ踐ミ

神武震發時艱ノ屯困ヲ濟ヒ以テ維新ノ宏業ヲ樹テ給ヒ 內文敷ヲ布キ武備ヲ整ヘ大憲ヲ欽定シテ統治ノ洪謨ヲ垂レ外善隣ヲ懋メ修好ヲ格シテ國權ノ伸張ヲ規リ給ヒ國威此ニ由リテ八紘ニ揚リ皇澤此ニ由リテ六合ニ洽

ク盛徳前古ニ軼キ鴻烈萬世ヲ照ス生キテ斯ノ隆昌ノ治ヲ睹ルモノ誰カ

聖壽ノ無疆ヲ祝セサラン前キニ

聖體安カラス宮掖謚カナラサルモノアルヲ傳フルヤ普天卒土憂懼爲ス所ヲ知ラス萬民一齊深ク聖容ノ安毅ヲ期シ奉リ日夜泣祈涕禱至ラサルナシ何ソ料ラン妖氣終ニ滅セス天日光ヲ沒シ 龍駕倏チ遐ク元宮ニ徂登シ給ハントハ嗚呼昊天無情遂ニ億兆ノ孚誠ヲ容レス傷哉 臣進馬 等幸ニ聖代ニ違ヒ 皇恩

ニ霑浴スルコト至テ大ナリ報效未タ就ラスシテ一朝 大喪ニ會ス痛哭何ソ堪ヘン自今以往益々 聖旨ヲ遵奉シ夙夜淬勵各其道ヲ守リ以テ涓滴ノ微衷ヲ致サントス茲ニ謹テ哀悼ノ意ヲ表シ奉ル

大正元年八月一日
第四高等學校長正五位勳五等臣溝淵進馬

誠恐誠惶頓首謹テ白ス

第四高等學校長 臣溝淵進馬職員生徒ヲ率キ茲ニ謹ミテ齋壇ヲ設ケ遙ニ

明治天皇ノ靈輦ヲ拜シ哀誄ヲ捧ケ奉ル

恭シク惟ミルニ

天皇天縱ノ資ヲ以テ乾元ノ徳ヲ具ヘ夙ニ維新ノ大業ヲ建テ以テ列聖ノ宏猷ヲ恢張シ嚴ニ憲章ヲ欽定シ以テ國政ノ典刑ヲ明彰シ之レヲ内ニシテハ教育戊申ノ二大詔勅ヲ發シ庠序

教學ノ洪基爰ニ定マリ萬民修齊ノ要旨茲ニ

樹ツ之ヲ外ニシテハ日清日露ノ二大戰役ヲ經テ 皇威八紘ニ互リ國光四海ニ炳キ文運日ニ進ミ武威月ニ揚リ萬物殷賑黎民維レ雍

ラク其盛徳鴻業古今ニ冠絶シ東西ニ度越シ中外ノ齊シク瞻望仰景スル所ナリ 臣進馬等草莽ノ賤魯鈍ノ才ト雖モ常ニ 聖訓ヲ服膺シ各其分ヲ守リ其業ヲ勵ミ寶壽ヲ無疆ヲ禱

リ 皇恩ノ萬一ニ報イント欲ス何ソ圖ラン

倏チ今日ノ大故ヲ見ントハ嗚呼哀哉悲風

六合ニ充チ黯雲萬嶽ヲ鎖シ日月光ヲ失ヒ億

兆聲ヲ飲ム 靈輦一タヒ軻ヲ發セハ何ノ時

ニカ復タ鸞輿ヲ迎ヘン 臣進馬等東向稽顙涕

淚交々至リ言フ所ヲ知ラス嗚呼哀哉

大正元年九月十三日

第四高等學校長 臣溝淵進馬誠惶誠恐謹

テ白ス

始業式

明るい水の里から、色濃い緑の山から、日に焼けた赤銅色の皮膚に健康の二字を漂はして、四百の古い生徒が歸つて来た。

明るい水の里から、色濃い緑の山から、純白な四本筋ときらつく北斗の星章に、軽い誇りを泛べて三百の新しい生徒がは入つて来た。此二組の爲めにシンシクと人の世の力を感せし

むる秋九月十七日の朝嚴肅な始業式が靜勝館に
舉られた。

溝淵校長の森嚴な訓示、四つの綱良が同じ態度
で讀まれた時、強く／＼至誠の力が我等のハ
トに刻せられた。

老いて益す／＼壯んなる三竹生徒監の訓示は更
に一層の生氣を興へた、タイムの流れに棹さし
て此に北辰一歳の目ざましい活動の舞臺が廣れ
んどする。此日與へられた森嚴な氣呵は蓋し永
久の我等の財産であらう (M生)

行軍記事 (北軍)

各部第三年級山中方面へ

何か重大なる任務をうけたかの様に、黒く武
裝した一隊が靜かに停車場へ急いだ日の朝、今
まで降りじきつてゐた雨は僅かに晴れたけれど、
雲は矢張り鈍色の暗い影を投げて、秋のすがす
がしい情調は痛ましいまでに毀されてしまつて

ゐた。かうした天候を氣づかう微かな憂色は眉
字にも見えたが、輝いた瞳にも結むだ唇にも、

抑へきれぬ緊張した心持ちを覆ふことが出来な
かつた。次第に明るくなつてゆく郊外の野に沈
みきつた空氣を震動させてとゞろくあの男々し
い砲聲は、すでに護謨鞆のやうに張りきつてゐ
る彼等には、只快い幻想を興へるばかりであつ
た。秋草の亂れ散らばつた中に伏してあはた
しく梢を離れてゆく鳥の姿に、自分の銃劍のひ
らめきを映してゆく瞬時の陶醉は、早くも皆の
胸一ぱい蟠まつてゐた。

當日の部署は左の如くであつた。

- 統 監 溝淵進馬
- 統監部員 三竹欽五郎
- 同 大谷正信
- 同 石川鐵雄
- 統監部書記 上村茂次郎

統監部記録係 井田虎男

衛生部員 福岡喜洋

演習總指揮官 高橋溪次郎

北軍第一中部隊長 大野平作

中隊附 小谷仁十郎

第一小隊長 渡部生一

第二小隊長 脇本鎰郎

第三小隊長 石溪曉昇

特務曹長 小野淡路

曹長 田島太郎

記録係 鳴澤寡愆

南軍第二、三部中隊長 山崎増太郎

中隊附 松本慶昭

第一小隊長 石端良平

第二小隊長 中村政吉

第三小隊長 高田昇

特務曹長 佐倉鐵太郎

曹長 高森卯太郎

記録係 吉岡關太

強いと思はるゝばかりの風は、乗り捨てた汽
車の行方を見送つてゐる人達の頬には冷々と感
せられたけれど、近くに見える海岸の砂丘の土
色から輝き渡つて来る日光の穩かな温みは、吾
等にはね返る様な氣分を起させ初めた。そして
磨りへされて白いレールの上面は眩いばかりに
反射してゐた。かくして若い戦士はすでにいつ
の間にか大聖寺驛のプラットフォームを去つた
のである。停車場前の廣場には、行儀よく並び
立てられた又銃線の傍へ、田舎町の人々が物珍
らしそうに群集してゐた。

すでに日は正午に近づいた、敵を前に控へつ
つも、悠々と辨當をあさつてゐる北軍戦士の糞
落付は實に物凄いはかりであつた。かうしてゐ
る間にも、隊の幹部連はあらこちに集まつて何

事かを議してゐる。其手の上には小さい一葉の地圖がしつかと握られてあつた。十二時三十分、町端れの南郷村へ這入るまで中隊は大聖寺の町を肅々と通過して來た。此處で中隊長から本日の想定并に教示を與へらるゝことゝなつた。

北軍 想定

一、福井方面ヨリ北進スル敵ヲ迎撃スル爲北軍主力ハ北陸道ヲ南進シ十月七日夕刻迄ニハ動橋附近ニ到着スヘキ豫定ナリ。

二、北軍主力ニ先行シ成シ得ル限り遠ク前方ノ地域ヲ領有スベキ任務ヲ有スル北軍ノ前遣大隊ハ七日正午頃大聖寺附近ニ達シタル時敵ハ二縱隊トナリ其主力ハ北陸道ヲ一部ハ竹田越ヲ北進スルノ情報ニ接シ大隊長ハ大隊ノ主力ヲ提ケテ北陸道上庄司谷附近ニ向テ前進シ別ニ學生中隊ヲ山中方面ニ派遣シ河南附近ヲ占領シ大隊ノ背後連絡線ヲ警戒セシム。

學生中隊が大聖寺ヲ出發スルニ當リ再び左ノ情報ヲ得タリ

竹田越ヲ北進セシ敵ハ今朝山中ニ到着シ目下兵力ノ休養中ナリ。

演習ニ關スル教示

一、敵ハ白帽。

二、空砲ハ現在携帯セル分ヲ悉皆使用スベシ
三、赤旗一本ハ歩兵一小隊ヲ示シ、紅白旗一本ハ歩兵機關銃二挺ヲ示ス。

同時に中隊長より命令を降された。渡部小隊は尖兵となりすぐに踴躍して前進し殘餘二個小隊は本隊として三百米の後方より進み、かくて本日の隊形は確立せられ堅實拔くべからざるの概があつた。

平坦なる山中街道は秋の日蔭に白くうねつて左方に廣く開いた田圃の上を渡つて、汽車の響が何とも言へぬ豪壯な氣を送つてくる小春日の

日光はむしろ熱いと思ふばかりになつて、戎衣の上からぼか／＼と暖みを透いて這入る。右に聳いてゐた山がふとなだらかになつたと思ふといつしか別れ路の所へ來た。左方の新道へ斥候を放ち、本隊は悠々と坂路を昇つて行つた。次第に黒く重なつてくる戰雲は頭上にかゝり。戰士は只無言の儘山道の狹路を絶えず進むでゆく。

黒瀨村を眼下に見下し、やがて降り様とする

坂路の頂界線に立つて、山脈と山脈との間に挟まれた一面の平原を見出した時、私達の心はず

でに高潮に達せんばかりに浪打つた。おゝ今日の戰場!!! 幾多血烟の立ち迷ふあの物凄修羅場の様

に亂れてゐる私達の感傷に何の反應も起さずして、山村の自然は只平和な秋の日に眠つてゐるのだつた。此村落の家並みを出つる頃更に斥候は本道の右方を馬車線路の方向へ送られた。

と間もなく右方の高地より、けた／＼しい銃聲が刈りとられた田圃を越えて耳を劈いた。ふと視線をむけると森林の中から白煙が勢よく洩れて見える。統監の軍馬は晴れた秋天に高く嘶いて、風雲は益急になつて來た。機を見るに敏なる吾中隊長は、右方馬車道方面に軍の大勢力を集中せんとして忽ち左の命令を發せられた。

一、黒瀨北端ヨリ第二小隊ヲ荒木田方面ニ派遣シ敵ノ左翼ヲ脅威セシム

二、同時第三小隊ニ機關銃二挺ヲ屬セシメ黒瀨南方約四百米突ノ高地附近(線路東側)ヲ占領セシメ猛烈ナル射撃ヲ開始セシム
時正に午後二時。

吾北軍尖兵の職に當れる渡部小隊は、多數の白帽軍より發する彈丸を物ともせず、頗る不利なる味方の地形にも拘らず、勇敢に散兵線を張りて惡戰苦闘死するも動かざるの氣概を示し

た。戦は正に酣ならんとし敵軍の守備嚴として の戦況を語つてゐると總指揮官より今日の講評 抜くべからざる時、突如として右方の間道に表 があつた。

豫期ニ反シ本日ノ演習ハヨカツタ。先ヅ北軍 ニツキテ言フト、北軍ハ必ズ河南ヲ取ラナケ レバナラス、ソレニハ必ラズ今ノ地點ヲ占領 スル必要ガアル。始メ大聖寺ヲ出發スルニ當 リ全軍ノ三分一ヲ尖兵トセラレタガ是ハ最大 限度ノ數デアル故、本日ノゴトキ地形ナラバ 其半分モシクバ其三分二デヨイカト思フ、次 ニ尖兵ハ重大ナル任務アル故最モ敏活ニ機先 ヲ制セネバナラス、本日ノ尖兵ハ其點デ少シ 遺憾デアツタト思フ、連絡兵ハ道ヲ間違ハヌ 様注意セテバナラス又斥候ノ報告カ餘リニ來 ナカツタガ之レハ全軍ノ行動上重大ナ關係ヲ 持ツテ居ル故必ズ報告セネバナラス。尖兵ハ 餘リニ敵ト接近シ過ギタカノ感ガアツタ、之 ニ反シ本隊トノ距離ハ又餘リニ遠イ。三倍以

稍狼狽の狀を呈した敵軍の陣形を見たる吾北 軍は、機至れりとして全軍を一線に散開せしめ、 尖兵小隊と合して茲に戦列は實に數町の長きに 互り、雨と降る銃丸を意とせず踊躍して敵軍に 肉迫した。

やがて本隊の右方に起つた劉々たる進軍の講 と共に、遂に全軍は敵陣めがけて突撃を開始し、 凄絶なる白兵戦を演せんとして茲に戦争中止の 令は下つた。

線路を夾みて敵も味方も共に壯烈なりし今日

上ノ敵軍ヨリ攻撃サル、モノ故當然今日ノ尖 兵ハ全滅スベキ位置ニアツタ、少ナクトモ七 八百米ハ距離ヲ置カネバナラス。本隊ガ馬車 道ノ方ニ出デシハ賛成、二挺ノ機關銃ト其掩 護ノ下ニアル歩兵トハ優ニ敵ヲ壓迫スルノ効 ガアツタ、突撃モ同感ダガモウ少シ敵前へ來 テ兵カ散亂シナイ様ニ一致シテ欲シイ 次ニ南軍ニツキテハ、第一線ハヨカツタガ援 隊ノ位置ハ餘リニ近イ、且ツ援隊ハ皆敵ニ暴 露セラレテアツタノデ大損害ヲ受ケタ、須ク 殘濠ヲ設ケ本隊へ來タ彈丸ノ餘リガ援隊へ到 着シナイ様ノ地點ヲ選ブベキデアル、第一線 ハ元氣ガアツタガ笑ヒ聲ノ高カツタノハ遺憾 ダ、最後ニ敵ハ大聖寺ニアルヲ知ツテ居ルモ ノ故、斥候ハモウ少シ遠方へ出シテモヨイ。

以上鳴澤生記

湯の宿の記

井田虎男

「温泉の宿へ」といふことが、私にはたまらな く嬉しかつた。

講評を聞いた後、私は大聖寺川の高い岸から、 青くよごんで居る淵や、白い波頭を見せて行く 流れを遙か下に見ながら、河内屋與兵衛が「長 崎へ〜」とまだ見ぬ長崎に憧れて居たやうに、 私は「山中へ〜」といふ胸の叫びに合せて、水 際に萩の繁つた岸を、瀬音を聞きつゝ歩んだ。 午さがりの日の光りは、對岸の松林から岩に 照りつけて居る。

雑木林に添ひ、松の茂つた山裾を繞つて、私 等二三人が、隊の後について行くうちに、旅仕 度をした男と女とに、幾度か逢つた。

私はなんだか、なつかしい氣がした。温泉と 旅人と山路といふ事を考へながら、林を縦に切

る馬車道に添うたり、岩石の突き立つた丘の裾誰れか、後で話合ふ聲が聞えた。を見返つたりして、溪流に望み、山懐に抱かれ此處の土産の玩具や漆器やを賣つて居る家がある。何處かの川沿ひに月見草の咲いて居たのを私宿屋が並んで見えた。斯んな風をして、ドヤドヤ乗込むことが、そんなに彼等の好奇心を刺戟えられてあつた。名を聞くも胸をそゝる蟻蜂橋したんだらうか。物珍らしさうに何の軒からも、の畔りから見る夕月の影とを聯想して、私は思何の二階からも、不思議な顔をして、皆が眺めはず田島君の肩を敲いた。

桂清水で湯を醫してから樹蔭の、岩壁に倚り細帯の女や浴衣の男が、睨きつゝ笑ふて居るのながら、巻煙草に火を附けた。此泉と對して、さへあつた。

御城山の前面に、嘗て猫岩と呼んだ大岩がある。かうした雑踏な温泉の町を通つて、私等は總湯うすく色附いた葉は、老秋の美しさを、しきりの近くで隊伍を解いた。わア〜といふ人並をと思はせるのであつた。

此處まで來ると、もう村の入口で、湯の香ひで、靴の紐を解いた。時丁度五時。

の漂ふて來るのをおぼへる。松並木の間から、疲れては居ても、何となくゆつたりした心持黒い家の屋根が見える。此の夕空の斷れ雲の下ちで、八人が座敷に車座に座つて、今日の戦況に、かう家並みを見た時、「到頭來たね……」と、を茶を啜りながら話し合つた後、私は獨りペラ

ンダへ出て、町を眺めて居た。向ひの宿屋の二階の欄干に手拭や着物が干してあるのが見えて何處からともなく、をかした浪花節がきこえて居た。

食後私等八人は、嘗て着たことのない派手な浴衣に細帯を占め、手拭をぶら下げて、此れも初めての赤緒の下駄を突掛けながら、白鷺湯といふに行つた。疲れた身体をばかりと浮かして居るとたまらなく心持ちがいう。石で疊んだ浴室と樋を傳ふ湯、軽いさやかな香ひ、私は忘れがたい嬉しさをおぼえながら、

湯槽にて我が枕する腕は望の月夜も及ばぬものを、

夢いまだ多きが如し春の湯にうつりて匂ふ我れのまなざし、

湯槽をば水晶宮になぞらへぬありて耻なき身の清らさに、

かたはらに睡蓮咲くと誰れ云ふや湯槽に浮

ぶ我れの圓肩、

半身を湯より出して見まもりぬ白沫たてる

山あひの川、

眞白なる我が身をめぐり湯の湧けばいかづ

ち伏せてある心地する、

憎くげなし湯槽にとなる穴倉に似る小座敷

に三味線の音、

山の湯に我が圓肩のうつれるを白き月夜と

思ひけるかな、

晶子さんの「青海波」の中にあるこんな歌を思

ひ出して、私は口ずさんだ、兩隣の浴槽からは浪花節やら薩摩琵琶やら謠曲やらが若々しい聲に聞える。野次る怒鳴る、いやはや浴槽内は彼

方も此方もワア〜と、今迄聞えた谷の響もお留守になるといふ元氣。私は聞くだけでも、それが嬉しかった。

歸つてから、間もなく點檢があつて、私等は對した時、私は何うしても輕々に過ぐるに忍び
すぐ床へもぐり込んで仕舞つた。落附かない旅なかつた。

の宿に、枕を並べた私等八人、暫くは面白い話 歸るとはや膳が運ばれて、集合にも、もう間
に花も咲いたが、いつか静かになつて仕舞ふ。 がないやら皆急がしさうにして居る。膳に向ひ
皆はごんな夢を結ぶだらうと考へつゝ、ささらさ ながらも、耳をすますと、馬の嘶やら、ヒヨツ
さらさらと梢の慄へを聞きながら、私も衿を ヒヨツと云ふ鳥の聲にまじつて、溪のひびきが
かき合せて、ぢつと目を瞑つた。

翌朝は早く目がさめた。楊子を啣へながら、 のだらう。私は初めて訪れた山中といふ温泉宿
障子をあげてベランダに出ると、一帯に淡う霧に、心ゆくばかり胸をそぐられた。

が、つて居て、シーンとしたうちに、何となく 一晩の休息に元氣を恢復した戦友の皆は、昨
く緩乎した快さがおぼへられる。集合までの時 日よりもなほ愉快な色を顔に染めながら、彼方
間に、大分あるので、私はすぐ仕度して下へ下 からも此方からも集つて、いろ／＼に今日の戦
りた。流石此の近くには、絶景奇觀の目を驚か 鬨を話し合つて居た。

すものが澤山ある。黒谷、小赤壁、道明淵、芭蕉 心地よい朝の空氣を切つて、物珍らしげに圍
碑、蟋蟀橋、高瀬など、或は怪岩奇岬として峙ち、 繞する人々の群れに見送られながら、街をはな
或は巨樹亭松天を摩し、或は清流激して白玉を れたのは七時少し過ぎだつた。私は大隊長から
碎き、右視左顧、實に山容静かなうちに此等に 貫つた想定を見ながら、隊の後に従ひつゝ……。

第二日(守備軍)

吉岡生

四、赤旗一本ハ歩兵約一個小隊ヲ示シ、

北軍(守備軍)想定

紅白旗一本ハ歩兵機關銃二門ヲ示ス。

一、山代、山中、竹田越ヲ經テ九頭龍川河孟 出發

ニ進出セントスル北軍ニ先行シ長谷田南端 午前七時半、小谷中隊長の命令が終ると共に出
高地ヲ占領シ以テ主力ノ來着ヲ待ツベキ任 發した、歩武堂々として野道を横切る軍列は、
務ヲ有スル學生中隊ハ十月八日早朝動橋ヲ 實に目覺ましいものである、仰げは空は霽れて
出發シ午前八時長谷田南端ニ達ス。 ふんわりとした雲が、遙か南の端に動いて居る。

此時迄ニ中隊ノ知り得タル情報左ノ如シ。

上原に至つて、凹き處の叢間に數名の斥候を殘

(一)兵力未詳ノ敵ハ昨夜竹田越ノ西 して敵情をうかゞわしめて、本隊は更に背進し
南麓附近ニ宿營シ尙敵ノ一小部隊ハ既 して、長谷田南端の高地に着いた。此處、天然の城
ニ國界ヲ通過シ本日午前八時頃ニハ山 砦をなし、一見して難攻易守を思はしむる、我
中附近ニ來着スルノ豫定ナリ。 軍は此地利を用ひて、敵軍を阻むにしくはなし

演習ニ關スル教示

と、其背部に隠れて靜かに時の到るを待つたの

一、敵ハ黒帽、

である。

二、此中隊ハ帽ニ日覆ヲ冠ス可シ、

斥候衝突

三、空砲ハ現在携帶ノ分悉皆ヲ使用スベ 忽ちにして、亂次なる銃聲が小丘の彼方に響ひ
た、斥候の衝突!!疾走し來れる一の斥候は、情

報をもたらしめて曰く「敵の歩兵約百數十名將にり、敵は約一個小隊の援兵を得て勇氣數倍し、山中を發して前進せんぞす。敵の斥候は已に我道路を中間に挟んで展開し、全線を擧げて躍進斥候と衝突せり。

戦闘開始、

茲に於てか小谷中隊長は第一小隊をして、高地の前面の小高地に進め残る第二、第三の二個小隊を、高地一帯に展開し、此れに二門の機關銃をも加へて、敵表はれなば、一擧に全滅し呉れんと、只管其の到るのを待つ、時は九時二十分。高地の右方は次第に高まつて、右翼は一帯嶮しき山となり、左方は道路を隔て、廣き平野が展開して居る。遙か前方の森林中に起る銃聲は、戦機の漸時に熟するを思はしめる、間もなく、敵の尖兵を阻止する目的を以て、前進せしめたる我一個分隊は、勢に乗じて進み來れる優勢なる敵兵のために、一時本隊へ向つて引き上げねばならなかつた。戦風はいよく烈しく吹き來

り、敵は約一個小隊の援兵を得て勇氣數倍し、道路を中間に挟んで展開し、全線を擧げて躍進し來る、砂塵は砲煙と共に天に捲き上り、地を蔽ひ、飛び散る火花と殷々轟々たる銃聲とは、壯絶凄絶の光景を加ふ、敵は小高地に強襲する事數回、如何せん遂に我が第一小隊に退却命令は下つたのである。敵は山なす犠牲を物ともせず、更に突撃に移り、我高地に肉迫又肉迫し、我軍死守して動かさず、あわや阿鼻叫喚の修羅場も瞬間に迫る………休戦喇叭は一響高く響き渡り、十里の山野は腥風何處へか去つて跡をも止めず、只心地よき微風の森の梢をかすかに動かすのみ、時は正に十時。高橋指揮官の講評は左の如くである。

近キ演習トシテ喜ブ。

一、尖兵ノ動作ハ時日ト異リ、尖兵長ハ、ヨク上官ノ意ヲ奉ジテ迅速ニ部下ヲ動かス觀念ヲ失ハザリシハ可ナリ、其動作ニシテ若シモ敵ノ側面ノミヲ犯シテ進ミシナラバ大ニ成功セシナランガ、只平地ヲ眞直ニ進ミシ故直チニ敵ノ斥候ニ見破ラレシハ大ニ遺憾トスル所ナリ。

一、北軍斥候ノ最初ノ動作ハ其當ヲ得タリ、然シ其出現セシ場所ハ適當ナラザリキ、幸ニモ敵ノ斥候ガ道路上ニ出デシ故安全ニ退却スルヲ得シガ、若シ敵ニシテ側面ヨリ大軍ヲ出サバ捕虜ノ辱ヲウケンカ或ハ無益ナル死ヲ遂ゲシナラン。

一、北軍陣地ノ占メ方ハ大ニ可トス、總テ山地ノ戰爭ハ成ル可ク高キ所高キ所ト地ヲ占メテ以テ低キ敵ヲ攻撃スルガ原則ナリ。只惜ムラクハ川ノ前方ヘ兵ヲ進メシ事ナリ、川ヲ背ニ

シテ兵ヲ止ムルハ退却ニ際シテ橋ニヨラザル可ラズ、ヨシ退却ハセズトモ後方部隊ノ連絡ニ非常ナル困難ヲ感ズルノミナラズ、一朝優勢ナル敵軍表レンカ忽チニシテ不利ナル位置ニ陥ルハ必然ナリ、余ガ假リニ司令官ナリセバ余ハ全軍ヲ高地ニ止メシナラン。

一、北軍ノ重層射撃ハ餘リ効力ハナカリシト思フ、カ、ル地位ニアリテハ重層射撃ハ成ル可ク避ケン事ヲ要ス、余ノ考ニヨレバ前部ノ兵ヲ後部ノ兵ノ右方ヘ延長シテ射撃セシムル方有利ナリシナラン。

一、南軍ノ突撃ノ元氣ハ大ニ可ナリ、然シ地形上、高キ丘ヲ越ヘテ而シテ敵ニ突撃スル事ハ非常ナル困難ナリ、其元氣ハ大ニ嘉ス可キナレドモ實際ニ於テ果シテ有効ナルヤ否ヤ疑問ナリ、突撃ノ際ニハ氣勢ヲ添フルタメニ喇叭ヲ用フ、故ニ喇叭卒ハ臨機應變ニ獨斷ヲ以テ

其氣勢ヲ添フルヲ要ス、今ノ場合ニ喇叭卒ガ 殘の A 迄に校庭の南の端には赤い薔薇が寂し
 モ少シ時機ヲ捕フル事ニ心セシナラバ大ニ全 とうに乾枯びた香りを投げて居る。すがれた轡
 軍ノ意氣ヲ振起セシムル事ヲ得シナラン。 蟲の夜の寢床にもと。堰かれた清水のスツキリ
 一、何レニセヨ本日ノ演習ハ學生トシテ好成绩 と月を宿すには私語の道を作らねばならぬ。清
 ヲ收メ得シモノニシテ指揮官ノ大ニ満足トス められたエネルギーの歎き、有意義な Heart
 ルトコロナリ。 の響！我等は是非ともヘモクロピンに充た此を
 Potentialの Energy 及 Kinetic Energy に變ねばならぬ。

行軍記事 (第二年級生徒)

神祕を宿した大空の雲に、黄く色付いた柑子の ぬ。
 香りに、秋は來た。
 今しがた鼻の大きい夫婦づれの毛唐が投げ捨てた 導火線である。
 葉卷の吸殻から、のゝ字を巻いて十月の澄みき 骸子は既に投げられた。ガラントした生徒控席
 つた青空に立のぼる紫の煙。午後四時の公園に には墨痕鮮に書かれたピラ一枚秋風に煽られて
 は淡い秋の香りが漲つて居る。初鮎がスツツと。 一人私語してる。
 艶つぼく化粧して居る柳の下を、往來した犀川 來る十月十四日發第一泊の豫定を以て石川
 の河邊りには野菊の群れが可愛らしい聲で秋を 縣粟津村附近に行軍演習舉行候條左の通り
 讚美して居る。詩が生れる秋！歌が出来る秋！ 心得べし。
 貪婪なドス黒い冬が北國の空に擴がる前に、名 一、當日午前七時半迄ニ靜勝館ニ集合スベシ

一、ゲートルヲ袴上ニ穿テ靴ヲ用フヘシ

一、外套ハ必ズ持參スヘシ是レ無キモノハ參

加スル事ヲ許サズ

一、病氣ノ爲メ從軍シ能ハザル者ハ行軍缺行

届ニ醫師ノ診斷書ヲ添ヘ教務課ニ差出スヘ

シ

一、行軍歸校ノ翌日ハ休業トス

第一日(十月十四日)(北軍記事)

小氣味よく澄みきつた十月の空、樹間には尙曉
 の星三つ二つ瞬ひて居る。じはくと初秋の香
 が胸に染みて何となく人の世の力が感ぜらるゝ
 朝である、眞青にのびた草も名なし半に盛られ
 た自然の珠が、スツキリと磨かれた靴の下に轉
 ぶ集合の譜が曉の夢を破つた頃には、既に固め
 た武士の鎧のすれすれの音に我等の胸は共鳴し
 て居るのである、當日の部署は左の如くである

統 監 淵 溝 進 馬

ハツハと雪白の泡を吹いて居る名にし負ふ悍馬
 △△の鞍上高く、高橋總指揮官が與へられた訓
 辭は嚴肅なものである。主に列車中戦闘及宿泊

統監部員 三竹 欽五郎

同 八波 則吉

同 林 並木

同 市村 塘

統監部書記 山岸 勘太郎

軍 醫 渡邊 宗一郎

北軍中隊長 小谷 仁十郎

參 謀 大野 平作

第一小隊長 北川 榮一

第二小隊長 仲井 俊雄

第三小隊長 金子 正夫

特務曹長 橋本 秀雄

曹 長 合 滿 義 郎

記録係 槌山 眞

に關する注意である。

出發之卷

七時半喇叭を先た、せて貔貅怒々長蛇の如く停車場に向つた。

を止めんとするのである、黄金波打つ加州の平野。ハシヤギきつた秋のそよ風。時折りに道ばたのハザから。ブンとした親しみのある稻穂の香りが鼻をつく。

朝清めされた柳並木の廣坂街には塵一つさえ舞ふを認めぬ。朝の大氣を揺がす入口チャマな音の間に力なき赤蜻蛉二三疋名残の戯れ哀れで波のそより。整つた靴の響き。戎衣を拂ふ無心ある。美川驛の手前から鐵路にそうて、いたいの風さえ今日はなんとなく軽く感ぜらる。戸口けなコスモスが咲いて居る。ゴーツと去る汽車に立つた、商人の口邊にも偽はらざるの笑が上の追風にひよる長いデリケートな胴体がぐらつて居る。

「踏切の左右鐵路のはるく」とたいすくなる平和の氣。太平の象！。秋の山村には血も無く叫びもない。

が快きかな(草花)

金澤停車場から汽車に投る。ギラ／＼と秋の日

”Return with your shield or on it”是れぞ是

に光つて居る永遠の無限に續く鐵路一條戎衣にれ二百の若き戰士に引出とした光彩ある花向け月を宿す可く血汐の庭に急ぎ立つ戰士を載せてではないか、磨ききつた銃にもたれた勇士の胸打振ふて居る。嗚呼軽い哉我懷の筆よ。今し我を廻るよ／＼戰の思ひ。

は一枝の筆に墨含ませて辰門史上光彩ある活劇 時の間に過ぎ行く驛又驛、村又村、山川、赤い

砂丘の彼方には秋の海が、佐保姫の玉の御手になだめられて、ジハ／＼と岸を颯る許りである。

瀧東側ヲ經テ迂廻シ敵ノ右側背ヲ脅威セシム 演習ニ關スル教示

十一時小松驛着。驛前で又銃休憩。南軍は時を

一、敵ハ帽ニ日覆ヲ付ス

うつさず進軍した。小さな町に整つた公園、其

二、空砲ハ現在携帯ノ分ヲ悉皆使用スヘシ

所に女教師に引率された一團の幼稚園生徒が丸

三、赤旗一本ハ歩兵一小隊ヲ示ス

く輪を作つて桃太郎の御稽古である。

四、紅白旗一本ハ機關銃二挺ヲ示ス

正午晝食を取る、公園の紅葉のかげで。

總指揮官 高橋歩兵少佐

〇時二十分。小松市場で、我軍の想定は下された。見渡せば蓮代寺三谷の森がボーツと黒すんで中に一抹の紅を顫て居る。其行方は透迤として波の如く南に北に走つて居る。

第二軍第一日(黒帽軍)

北軍想定

一、大聖寺以北ヲ領有スヘキ目的ヲ有スル北軍

は將に切れんとする。

ハ北陸道ヲ南進シ十月十四日午前 五十分

戰鬪の卷

頃歩兵ノ先頭ヲ以テ小松南端附近ニ達シタル

〇時三十五分小松市端に於て戰鬪隊形に移つた

トキ兵力我ヨリ劣勢ナル敵ハ今朝粟津停車場

北軍は時を移さず粟津方面に向つて進軍する。

附近ニ停止シ爾後前進ノ模様ナキヲ偵知シ之

中隊命令に依つて中居小隊尖兵となり小隊長の

ヲ攻撃スルニ際シ、別ニ學生中隊ヲシテ木場

指揮の下に勇躍前進を起す斥候が幾度か放たれ

た。

傳令が縦横に飛ぶ南淺井村は無事に通過された。只見る戦雲漠々として戦士をめぐるミリウの空氣に殺氣満々紅の色を彩つて居る遠く願望すれば連山悉く是れ黄雲、墨繪の様な木立から上騰さる紫煙一縷、三谷の里を暗示して居る。俄然

淺井の南端で數發の白煙が上られた——斥候の衝突——時に一時十五分、斥候の報告が届いた。

曰く「淺井村附近にて若干の敵兵出沒す敵の斥候の如し」本隊は淺井村端に於て一時停止、尖兵隊からは益々斥候を放つて行く——搜索する、殊勝にも我れに二三發送つた。南軍斥候は衆寡敵せざるの理を知つて何時の間にか消去つた。

一、四〇分三谷村通過。仰ぎ見れば且々たる一條の道路を挟んで晝尙暗い三谷の南方には、左右に松柏樹の丘陵がある、此丘陵を越て彼方は一帯の高地、遠く左方を見れば満々たる木場の湖、

秋日を受けて瑠璃の如く輝て居る、沈黙した大

きな水。其所に我等は靜の力を見出すのである、絶好の交戦地！只地の利を得たものこそ本日の勝利者である、斥候の動作が著しく機敏になつた俄然白煙は上つて息せき切つた一斥候が報告をもたらず。

「敵は前方高地に散開す、但し敵の主力の奈邊にあるやは不明なり」

北軍は直ちに左右の樹林に散開する。間遠に彈丸が空を切る。屍山血河は尙將來である。散開の儘で北軍は進行を起し、丘陵端まで出陣する。見渡せば刈り取られた稻田を前に控えて連綿たる一圓の高地に、白蟻の様に南軍が見事に散開して居る。敵を見ては何條黙すべき。殷々たる

銃聲は山を壓し「打てい——」の號令は、重煙を傳へて九天に振ひ、地爲めに轟く許りである、對峙久しく何時決するとも見えない。小谷中隊

長は、北川小隊をして、左の森林の中を迂廻し南軍の右翼を衝かした。時に機關銃は既に所定の位置に据られて、「コトカタ、コトカタ」と陰氣な音色をたて、バラ／＼と彈を降らす。

機や既に熟した。秋陽に輝く長劍を閃して小谷中隊長は大聲叱呼只一聲突撃!! 今や全線は砂塵を卷て眞一文字に突撃に移る、敵も劍戟を揃へて我に迫る、悽愴なる白兵戦が渦の様に起らんとしたとき平和の響はひゞき初めた。

宿泊の巻

午後五時過ぐる頃、栗津村に向つて行軍。一時の猛戦に軽い疲れを覺えた戦士、互になつかしい話を取かはして六時に近く栗津の里に入ると、

アーンと香る湯花が慈母の様な親しみじ我等を迎る、山間の秋の湯。只穩かなものである。糶白の上に鶏が鳴て秋の日足西へ——とたそがれて行く。電燈の明るい窓からは時節柄、デカンシ

ヨの一節も洩れぬ、午後九時の點檢も終つて健兒の夢は明日の巷に逍遙はんとするのである。

(M 生)

伏見桃山御陵參拜記

御寶壽の幾千代までもと六千萬の蒼生のひたすら神かけて祈れるかひもなく遂に御登遐あらせられたる明治天皇の御陵を伏見桃山に定めさせ給うてより御大喪の悲に沈んだ國民はせめては御陵前に額づいて民草の誠の露を捧げんと希ふて居るのである、幸にしてよき機會は我々を

して此の至誠を實現するを得しめたのであつた。

秋空高く晴れ渡つた十月二十六日の夕悉く赤心を抱いた我が友六百有余名は續々と金澤驛に馳せ集つた、七時二十分發の我が特別列車は轟々たる響を擧げて金澤を後に南へ指して走り出して、丁度晚秋十五夜であつたらうか缺けたる事

もなき美しい月は飽くまで澄み渡つて明鏡の様だ、遠く彼方の金ヶ崎の燈臺より黒澄んだ日本に中天にかゝつて居る、草も木も野も山も川も海に投げける閃々たる光明は感慨多き旅人に何か海も一とし柔かな月光に抱容せられぬものとしてを暗示する様に、磯打つ波は月光をうけて蛭々はなく車は恰も日中を行くが如くである、四邊銀蛇の走るが様う、美しい自然は言ひがたき印象としてたゞ蒸氣の音車輪の響のみ静かな夜の象を我等に與へたのであつた、幾つかの隧道の氣に反響して遠くへとひいて行く、野にも山關をくれば既に近江路である、朝霧に込められて益々まばらになり車の音に夢破られた山鳩居る羽音高く水鳥の三四が彼方に飛んだ。

は心の深い奥に秘められた或物をそゝるが如くに心細う鳴き出した、各室内は極めて静肅であつた、出發に先き立ちて校長よりの訓示があつたとはいへ熱き血潮の湧き立ち易いのは若人の常ではあるに今宵は各自ひたすらに謹慎の意を表して聲高に笑ふものもなく或は夢路をたどり或は感慨に耽つて居るのである、無心の汽車はひた走りに走り大驛小驛幾度か去來して今や北陸線の絶景と稱せらるゝ敦賀灣に近づいて來日朝六時過ぎる頃であつた、幾度かやんごとな

き雲客公卿を送迎した此の光榮ある停車場の少しは裝飾をも施されないのを見るにつけても皇室の御質素を窺はれて先づゆかしさの念が胸に湧くのを感じた、明治天皇御陵御開門は八時といふ故に先づ程遠からぬ桓武天皇の御陵前に拜跪した、たゞ見る鬱蒼たる松の木立に蔽はれたる神々しい御陵、掃き浄められたる清らかな白砂など森嚴な感に打たれてたゞ有りがたさに堪へぬ心地せられた、桃山の一角に「御香の宮」といふ古社がある、我らは御陵參拜の準備を備ふべく其の宮にて約三分の休憩時間を與へられた、宮は太閤の朝鮮征伐の時戦捷を祈念したといふ古い由緒のある社だと聞いた、所々残つて居る建築の美は桃山時代の遺物でもあらう、社の後には輻車を曳き參らせた名譽ある數頭の牛を觀覽せしめてあつた、八時頃我らは隊伍を調へて御香の宮を發して愈々御山陵に向つて參拜

道を辿つた、あまねく津々浦々の果よりひたすらに赤心込めて集ひ來つた參拜者は老いたると若きと男と女とを問はず續々として極めて雑沓を呈して居た、新に開かれた參拜道は十町餘りの山道である、左右は美しう開かれた畑地つきにて落ち残る柿の赤さや霜に惱む亂れ菊は緑深い茶の葉の色と美しくも又た淋しい色彩の調和をなして居つた、あか／＼と照る秋の日影を身に受けてあらゆる階級あらゆる服装の老若男女のうね／＼した山道を辿るのを見れば實に此れ一幅の風俗畫である、御陵に近き所に至つて道は左右美事なる孟宗竹の大藪の暗き迄に生ひ繁つた爪先登りの阪となつて居る、スクスクと簞え立つ大藪を縫ひ行く我らは御陵前に出づるに先立ち既に一種名狀すべからざる崇高な念に打たれたのである、見馴れぬ皇宮警手と近衛衛兵とに嚴然と守られたる御門を通れば直に御

陵前の廣地に出た、其の一隅には御大葬當時に、椽の白木作りにて極めて御質素なるは深き御使用になつた葱華輦が置かれてある、銅の金叡慮の程も忍ばれていとも畏しく拜せられたの具鈍色の絹、極めて御質素なものである、あゝ、であつた、時しも梢を拂ふ秋の風に緑一入濃き秋雨しめやかに萬物涙に濕ふ悲しき夕八瀬童子松の木立に張渡された黒白の御幕は靈あるもの奉輿參らせて永久の大御幸に急がせられた當時の光景も自から目のあたり浮び出で、畏しとも畏し。

御寶穴前に最敬禮した我らは云ひ知らぬ敬虔の翁も多く見受けた、目に見ゆる物として涙な氣に打たれて萬感交々胸に迫り豫期せぬ涙は止めもなく頬に流れたのである、辛うじて正面を

仰げば若き松樹の繁みを背景として御數屋を拜至誠の涙を捧げ終つた我らは下向途より桃山驛せられた、あゝ、御稜威四海に赫々として輝き給に戻り直に自由行動に移つた、或は大坂に或はへる叡聖文武なる明治天皇は十善の御身にしあ京都に或は近き郷里に各其の欲する處を擇んでれど朝露の如き果敢なき人間界の數には洩れ給三々五々別れ去つて終つた。

はず彼方にて未來永久の御眠に就かせ給ふかと京都市東本願寺に集合したのは午後八時五十分思へば又しても涙は雨と下るのであつた、御數であつた、十時前七條發の我が汽車は北へ北へ屋並びに幄舎はまだ木の香も失せぬ様に拜せらと我らを運んで呉れた、兼ねての熱望の滞りな

く達し得たので心の緩んだのであらう車中は悉高遠なる理想と雄大なる抱負とを有する我四高く夢路を辿つて覺めたるものとは殆んどな講演部が此に活動の序幕として演說會を開くに、列車は少しの遅延もなく豫定の如く翌朝七至つたことを述べて降壇。

時半頃無事金澤に到着した。

一、明治を憶ふ

中山君

かくの如くにして我が校の桃山陵參拜は少しの肅然として立ち開口一番桂公の言を借り併せて澁滞もなく終つたのである、我々は學校當局者明治を追想し、條約改正、憲法發布、朝鮮問題並びに代議員總代諸君の御心勞を深く感謝する等に論及し、日清日露の兩戰役日韓合邦等あり、内外相埃つて國民的改革の進捗見るべきものありと雖も、猶ほ國民の元氣を振興し、法政界の改新選舉界の刷新等吾人の要求すべきこと多大なるを主張し、青年の覺醒すべきことを警告し

MM生

講演部報

第一回演說會

十月十九日午後六時より例の如く至誠堂に於てた。

花々しく第一回の例會を開くことになつた、秋

二、人生の花

井村君

は凋落の相を示すが北陸に寓せる數百の雄士秋風に配するに人生の花を以てする可ならんは、舌頭に利劍を振つて亂麻を絶ち、剛健の氣か、「海行かば水づくかばね」の歌は大伴氏が腕を鳴らすの時は來た。

開會之辭

巢山委員

人をして起たしむるの慨あり、至誠は人生の花

成功の母、之れを孟子は論じて浩然の氣といふ、國民性の有るは各人各家各地方に各種の氣風あ古來至誠の士は不朽の生命を有すと、爽かな語ると同じことで其基因する所は其地形人種風俗等を以て論じた。

三、自由の聲

海老名君

世界各地の宗教には各人の自由を捉縛せるものありとすも本來の美風を失はず明治當初よがあつた、吾々の自由は徒らに迫害に任かすべからざり國民的活動帝國的活動をなせりと、我國民がきでない、吾人は主義に忠實なるべし、忠實な特有の性格によつて活動せる跡を尋ね、猶ほ論らんとするには自由を貴ぶべし、ウバニシヤッド歩を進めて歐洲諸國民に及ぼし、殊に英國人の自由思想は爆發して大聖釋尊を生めり、歐洲性格を賛し、我國人日本民族より偉大人物を出の殉教者の死に對しては深厚なる敬意を表す、さんことを渴望した。

彼等は身朽つるも其主義の爲めに自由の爲めに

五、活動

甘蔗君

死して然かも勝利を得たるものとすと、大に信活動とは何ぞ太陽も活動し月も活動し地球も活仰的に自由を叫び併せて宗教内の反撃を難じ動する、何物も活動する、かゝる活動界にありて常に受動的のみ活動せんとするものあらば

四、吾國の將來と國民性

佐藤君

そは消極的にして吾人の取らざる所だ、豊臣秀

謙遜に登壇の辭を述べた、而して國民性は將來吉とかナポレオンの如き大人物は必ずや大なる其國家に及ぼす影響は實に大なるものだ、凡そ活動をなした、日露戦争に於ける働きは我國民

の活動力を發揮したのだ、世に活動を否定する

七、所謂新人に與ふ

角田君

ものあらば彼の自殺を企つる弱志輩と擇ぶ所が時勢の推移の然らしむる所か何事も自己より打ない、吾人は文明の今日交通機關の發達せる時算し、其利害關係のみを論せんとする風潮の時代にほそれに順應すべき活動の氣風を要する云る今日、一大颶風を起し、一大波瀾を起して新云と、益々高尚にして雄大なる活動を絶叫し滔時代を形成すべきである、吾々は現代に甘んじ滔と論じた。

六、明治の華

竹田君

益々新興せる時代を作らんとするものである、

維新の志士吉田松陰が小塚原に空しく其臭骸を世には薄志なる一病的思想の潮流を惹起せんと曝らしつゝも、其志や不朽に傳はりて時代の大勢するあり徒らに不平を訴ふるものもある、殊にを左右した、一代の榮華を盡した平家は壇の浦文學者流には眞の藝術を味識する能はずして却の藻屑となつて滅びたる時の宗盛の死、千歳にて其害毒を社會に及ぼすをも顧みざるものを出汚名を殘し冷笑の種となつた、死は一にして月しつゝあることを恨む。

籠の差がある。

八、犯罪に就いて

三家檢事正

嗚呼乃木大將の死、追懷す乃木將軍の一生、其犯罪には中々種類がある、抑々犯罪とは如何、至誠盡忠以て責任を重する所實に武士道の粹で犯罪とは法律上刑罰の制裁を加へた命令又は禁ある、明治の精華である、大將の心事欣慕措く止に違背したる作用、有籍人の不法行為である、能はずと。かゝる定義の下に竊盜、強盜、詐欺等主なる犯

罪が如何なる地方に多く行はるゝか此に其最も 長野には昔は小大名が各所に割據せしに反し金澤の多き地方より順次に列擧して見やう。

竊盜の多き地方、東京、福岡、名古屋、大阪、札幌、野は交通開け金澤は比較的遜色あり、長野は高

等、少き地方樺太、根室、金澤等、原にして土地の形狀上理性に強く金澤の人は幾

強盜の多き地方、東京、千葉、浦和、大阪等、少き分情的である、此等の点より權利の主張に甚しい

地方は樺太、奈良、金澤等、 詐欺は、東京、大阪、札幌、神戸に多く、千島、樺 犯罪は法律上命令禁止等に背いた不法行爲だ

太、金澤、福岡等に少ない、 が、それはどうして出来又之を如何にして少な

其他横領、賭博、放火、殺人、障害等に關しても統 計は大体右のやうな順序を示して居る、此等は 所だ、犯罪者に對しては刑罰を以て犯罪を防遏

人口の多少、交通の便不便、人情風俗の相異、徳 するといふことが普通認められてゐる、犯罪者

性の充不充、文明の智識の進不進等種々なる原 因によつて其差異を生じたものである。 意志能力には又故意過失の二つある。刑罰は能

金澤は長野(三家検事正の前任地)に比して犯罪 力の責任と意志の責任といふことがある、之れ

は實に少ない、何故にかくあるか、之れも檢擧 是新舊兩學派によつて説を異にする所がある、

機關の不完等にも依るが私の經驗上より見る 舊派は刑罰は犯罪者に對して正義の主張に基き

に之れは宗教の感化力に依ること少くない、又 して加ふる制裁なりといひ、新派は、刑罰は犯罪

者に對し社會防衛上の必要より之を加ふるを目 的とする、故に舊派は意志能力を要する所以は のもある。

或年齢に達すれば自己の意志を自由に靜止する 今日では刑に處するのみならず改悛の餘地ある

ことを得、然るに其理性に背く故之れに刑を附 時は、起訴猶豫を行ふことが出来る、かゝる時

するなりと、且つ舊派にては意志なく或は能力 には秘密を貴び其人の名譽を保たしむ、又類刑

なき瘋癲白痴のやうなものには刑罰の効力なし の時は重き刑に處することもある、之れは社會

故に之れには刑罰を加へずといふ、新派は之れ より隔離するの意味に於ける刑の處し方であ

と異り、年少瘋癲白痴の如きものも防衛すべき る、けれども刑罰外に犯罪を防遏する。方法は我

時は之れにも刑を加ふべしと、兩派相争ふ所 國では不完全で米國の如きは中々進んで居る、

からしむるにある、之れ新しき人々のいふことを已に古き昔に於て看破してある、實に至言である、斯くの如く深き同情を以て感化するに若くはない、刑罪に對するのみならず同情といふことは處世の要訣である云々。

閉會の辭

永井 委員

指示する所に依つて趣向すべきだ。

檢事正の熱心なる講演に對する謝辭を述べ、聽衆の少きを稍々遺憾とする旨を洩して降壇。(巢山生記)

第二回演說會

十一月二日第二回例會を開いた、醫專の下平教授を聘し本校の山本教授にも一場の講演を乞ふた。

晴天に化すべきか 橋 口 君

開會の辭

渡邊 委員

越路の空を覆ふて雨を起し雪を飛ばす此北陸凜として壇上に立ち簡單に開會の辭を述べて降壇。

一、天我を動かす

近藤 君

此天候を如何ともするを得ない、然しながら吾

等青年學生の氣風にして旺盛なる元氣を示すならば敢て不可能のみ云ふべきでもあるまい、現代の學生が軟化しつゝありとの聲を聞くこと數々であるが内實には中々剛直な勉強家がある、北國學生の氣風も古武士然たる所がないでもない、吾々は曇天の下にあつて然かも快晴の地に成育せる同胞と遜色あるを見ない、益々此曇天と戦いたい、と論じ次に遠足講演旅行などを鼓吹し、塾生活を理想化せんことを主張した。

三、勝敗論

深井 君

吾々が勝敗を争ふには正々堂々大膽に之れをなすべきだ、此に於て知る、人生最後の月桂冠を

遠足部主催の長距離競争に二度敗を取つた、去年も此年も、然し來年は屹度勝つとはいへこれ彼の伊藤公の如きは己れを忘れ國家政治の爲めは未來のことだ、勝敗論、あゝ吾々が斷じて勝たんと決心して決勝点に向ふ時には私心なく邪念なく唯胸中一片の意氣あるのである、勝敗正に決せんとする時心を一にする時まじめになる時其處に一の快味を感じる、抑々勝敗の決する

四、雄辯哲學

小原 君

吾々の勉學を三とする、一精神の修養、二思想のするの士幾人がある、元老藩閥彼等は何物であ
 注入、三人格發表の練修、此三つを具備せんとするか、一身の名利を除いてそも何物を憧憬的
 て多くは其一二を缺いてゐる、中には此第三のとしてゐるか、教育界は果して人物を養成し得
 人格發表を非とし往々辯舌を練ることを輕んずるか、宗教界は奇蹟迷心を説いて獨立獨行の氣
 るものあるは誤れるの甚だしいものだ、立憲主 魄あるもの幾人がある。

義、民主主義、平和論など、世界的に論せんとす 吾人は此混亂せる社會狀態に對し如何なる態度
 るも筆のみでは足りない、辯論の力を借らねば を表明すべきか、吾々は眞理の中に住むべきも
 十分目的を達すること出来ない云々と、演題に のだ、人生眞實の意義を味識すべしだ、永久不
 先づ驚かさざるを得なかつた。

五、社會の腐敗と吾人の覺悟

梶

君

てはならぬ。

汝の志望はと問はれたる時、我れは一大富豪た

六、凋落の誇

志摩 君

るべしと答へたるものありと聞く、彼等は果し 露西亞は歐洲の迷宮なりとさく、我が國の學生
 て金錢富豪の何たるを解し得たるものか疑はし 界も亦一種の迷宮といふが至當の言である、と
 い、恐らくは國家的觀念を缺除せる我利々々妄 社會が吾人に徒らに要求のみを多くし、教育指
 導の當を得ざる事を難じ、次ぎに昔の學生と今

現今眞實に自己を忘却して身を國家の爲めに投 日の學生とを比較して曰く、第一、教育に於て

現今の普通教育は昔より廣くして淺い、然し之 っ冷却し易い、之れ事實だ、先年私がスワイツ
 れは吾人の常識發達といふことが主眼となつて に居て見たことだが彼の國人などは日本人のや
 ゐるからである、第二、德育或は修養といふ方 うに早く老成するといふ事はない、大學では勿
 面にあつては、昔の學問即ち修養といふ時代と 論大學以外でも中々醫學の研究を積んだ人があ
 は趣を異にしてゐる、従つて不徳義なる講義切 る、開業醫にして大學の教場に來る者もある、勿
 賣などの起るは當然である。

自然主義、個人主義、無政府主義、科學萬能主 研究心といふものを少しも棄てないで業績なり
 義等の思潮の奔流に弄せらるゝや、學生界の紛亂 論文なりを出す、我國で出来ない事もあるまい
 や、迷想や敢て慨嘆するに及ぶまい、教育家社會 が學校を出れば直ぐ營業に氣を取られて終ふ、
 等ひとしく其責を負はねばならぬ、學生界はむ 後來我國人盡くかくなつては外國と遜色を來す
 しる罪なき誇を維持すべきだ。

七、未定

下平醫專教授

明治が大正となつたから新しい事を始めるべ 我國の醫學は發達して居るといふが中々歐米諸
 きやうにいふ人もあるが之れまでなし來つたこ 國に及ばない、それと匹敵せんとするには先づ
 とを益々發展せしむる様にすればそれでよい、 外國語を研究しなければならぬ、獨逸語ばかり
 諸君は將來日本の發展といふことに大なる責任 不自由だ、私も洋行した時に餘課として英佛兩
 がある、誰も言ふことだが日本人は熱し易く且 語を學んだが歸國後殆ど放棄する様になつた、

けれども諸君は春秋に富み多望の青年であるから語學の素養を固められたい。

日は中央も地方も選ぶ所なした、獨逸などには閑静な田舎にあつて研究する學者が澤山ある。

八、露西亞文學に現れたる滑稽

山本 教授

本講演の大意は本欄に在り。

閉會之辭

金本 委員

に先達つて出て来る、熱心なる研究を爲して居る、日本では一寸例のないことだ、ノルウェーのベルゲンで第二回萬國癩病豫防會が開けた時彼の北里博士に伴つて私も出席した、其時集つた大老大家連の一人に辛じて演壇に上り、立つこと出來ず椅子に倚つて話しをされた人があつた、之れは有名なロンドンのハッチンソンであつた、八十近くの老体を提げ自説を述べんが爲め遙々海を渡つて來たのだ、實に感心した、我國の醫學會などに出て見ると大學の助手の如き若い人ばかり演説し、教授などは只聞いて居る。又近來中央にのみ集まるといふ傾向を有し地方の爲に盡すものが少ない、交通の發達したる今

十月二十日秋季庭球大會を開催せり。日麗に風和みて好庭球日和也。破壊の時は永久に流轉すれど歴史は到底繰りかへすもの也。青葉の匂ふ六月に先輩を送た我部も新進の士を清々しいコートに又迎へる事を得たのである。吾々か先人の委託を果さんには此の新しい人々

庭球部報

以上一回ゲーム

に頼む事多大なのである、此の委託に堪へる勇ましい若人の活躍振りを記録に傳ひやう。

二組拔優待仕合 ◎優待 ×負 ○一回勝

◎1 白井季吉 岩田四郎

×2 東精太郎 小原靖

×3 小林晋一 松井宗一

◎4 神岡義男 中西進

×5 太田正規 牧野利家

×6 牛込義一 永原俊一郎

○×7 持田鐵之助 桂武雄

×8 西岡登 川上由喜

◎9 布村繁 山下繁造

×10 角田敬三 石坂修

○×11 早上愛二 山田

○×12 朝倉斯造 直江忠也

◎13 市川理義 提山西暢

×14 田淵敬二 高橋良作

×15 久保田薫 久留眞質

×○16 高柳義一 阿部義敏

◎17 伊奈靖 島田武重

×18 土肥善三 平岩健吉

○×19 石端良平 近藤時司

×26 神田垂穂 秋月周二

○×21 饗庭光吉 橋本榮雄

○×22 平野鐵太郎 竹蓋千代三

○×23 京谷甚二 渡邊義道

◎24 黒宮直道 北川秀二

×25 三上宗輔 佐治昌

×26 北川榮一 東野市治郎

◎27 永田憲雄 小此木繁

×28 山根弦禮 竹村

×29 渡邊一郎 石井文雄

○×30 松原外松 高森卯太郎

◎31 井口長三 渡邊孝藏

×32 今井剛 森長四郎

×33 龍野確 細川英二郎

○×34 大橋二郎 本間公一

○×35 鳴澤寡愆 橋本榮雄

○×36 足立秀郎 橋爪庸藏

○×37 田村稔 廣野寛

○×38 宮川敬一 山中藤吉

以上三回ゲーム

校内選手マッチ

紅軍	○(永)原村 一	○(山)塚中田 二	○(大)吉西峰 二	○(大)吉西峰 二	○(大)吉西峰 二	○(大)吉西峰 二	○(大)吉西峰 二	○(大)吉西峰 二	○(大)吉西峰 二
白軍	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二	○(山)塚中田 二

以上三回ゲーム

市内各學校對本校試合午後二時より

○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三
○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三	○(醫)河口倉 三

(石)邊坂

(泉)上

西より擴がりし薄雲日に蔽はれてちらつく松の

影もなし、人垣をなしたコートの中に空氣は流

動しない。審判官のブレイの宣告と共に我が新

進の若武者奥村組は商業の重鎮上田組と戦を始

めたボールの爽かな唸りか應援の聲と諧調をな

して楽しいゲームが三度くりかへされた勝はい

ふまでもなく奥村組の手に歸した。

工業の富田流石に手剛かつた龜谷の巧妙なスト

ップボーレーも流星と飛ぶ富田の猛球に幾度か

長蛇を逸せんとしたが奥村の奮戦又凄じかつた

ので優待した。

高見組は木藤組を三對二の苦戦にて屠り岩越組

と矛を交ゆ敵の前衛スマッシング、格に入りて、

見事なりしも高見、始終ワーバリて三對一にて

優待す

醫專小島組甚た振はず、前衛勇敢なりしも、河

合の鋭鋒に當り難く、大西のレシーブ、正鶴、

我遂に勝つ。

鈴木組は、醫專が有する唯一の鐵砲組、彼の左

側より右側に打ちこむ鐵砲は單調なれども侮り

難く、前衛の無能を補ふて餘りあり、我始めよ

り旗色悪し、辛辣にして滑稽なる聲援はまづ松

樹下の一群よりきつていだされぬ。鈴木君至極

眞摯、聲援者に對つて一々應答の勞をとらる、

然かも顔色青變し赤變す、青變はミス、赤變は

奮起のシムボルと見て可也、我れ盛り返してゲ

ームはトゥーヤールとなりカウントはデウスを

繰り返す三度、されど大勢は既にさだまつて我

敗退す。

吉利組河合組に代りてたつ。

吉利のクシヤクシヤリーが鐵砲の鈴木に對して

有功、大西の水際だった戦ひ振り、殆んど段違ひの觀ありて三對零に我勝つ。

醫の副將下間組對吉利組

ゲームは益々佳境に入つて、廣いグラウンドの

一部なる小さいコートもひきはられた、赤白のんだら幕を境界として、特別なアトモスフエーヤにつままれた。天に冲する喬松も枯れすが

大西がレシープで衝いてスマッシングでとるといふ公式的の戦法に悉皆陣をみだされて、其妙腕を振ふの餘地なしに敗退した。

れた庭の秋草もドツシリ座つた寮の四棟も又、葉を振ひ落したポプラーの並木も、之等凡て、我がグラウンドのシーンを形成する景物と、バツカスの盃をなふる様に歡喜して居る群衆とは何

か内藤組は之か初陣であるが、未頼もしき若武者である、高倉組が勝つたといふのもチャンスである、内藤組がまけたといふのもチャンスである、内藤の電火石火の如き熱球は常に高倉の

の交渉もなしに成立して居る、ラケットの響ボールの唸り審判者の聲、そして群衆の揶揄や、嘲弄や、稀に賞嘆やの嘈音が入りみだれて燃ゆる

ある、内藤の電火石火の如き熱球は常に高倉のヒヨロヒヨロ球に裏切りされた、高の大膽なるモーションと、熱烈なるスマッシングと、河合の堅實なるネットプレーとは好箇のコントラス、

腫と輝く頬との所有者なる四人のアクターを中

め、にヂユスを繰りかへして居る。試合する人も、心として渦巻いて居る下間の大きなモーション、

と完全に近い打球とは人をチャームするだけの

終つたのは五時半。脱ぎすてた衣服はしつとりと濕つて、町々の電

觀衆も、天地自然の氣も一ツに融合して働いて

と思はるゝ緊張したゲームであつた。このゲームが終つて、ホット一息したと思ふ間

もなく、かへし波の襲ひくるやうに喝采が急霰

の如くに起つた。此の意味ある一日のフェストに

華やかなペリヲードを打つために、高倉組と新

進の早川組かたつたからである。然し秋の短かい日足は、既に暮靄をこむる頃となつたのである、煙草の火がこゝかしこの隅に

明く目につく様になり急に冷々した空氣が襲ふ

てきた、人々の顔が白くボンヤリ浮きたして見ゆる程である、勿論試合は不適當な事は一目瞭

醫軍

然の事實である、試合を繼續して薄い光になれ

た敵に對する早川組の不利は云までもないので

ある、早川の猛球守田のスマッシングも用るの機

なくして戦は敵に優待せしめて終りを告げた。

自然の數、時の不利我は黙して言はぬ、試合の

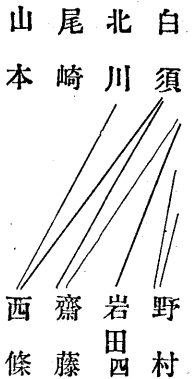
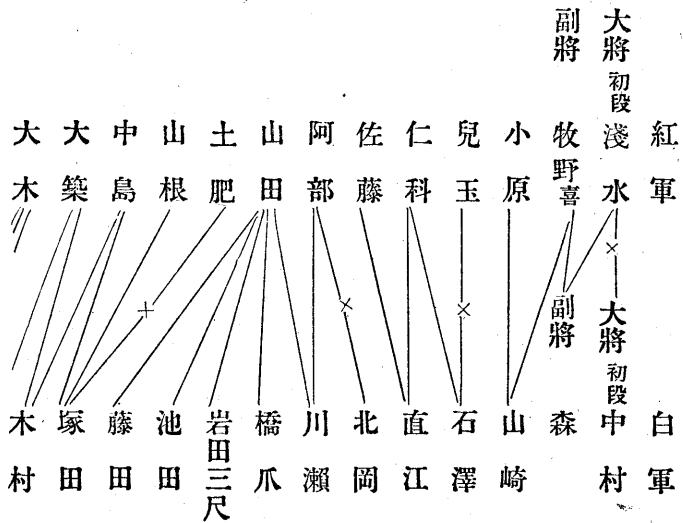
大正元年十一月十四日 正記

○秋山	○谷澤	○河合
×高倉	×下間	×石坂
○金子	○早田	○渡邊

大正元年十一月十四日 正記

柔道部報

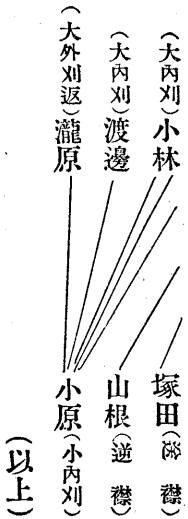
十一月九日 秋季紅白勝負



剣道部報

想ひぞ起す、去年の秋なりき、宣戦の鐻矢を放つて西の方、太平の夢を貪る洛陽の陣營を驚かせしは。偷安になれし彼は始めより戦を避けたり、吾再三敵の條件に對し、讓歩してまでも戦はんとすれども彼容れず、畢竟彼は戦を欲せず、交渉は殆ど永久的不調に終れるを。

さはれ蝸牛角上に何事をか争ふ、吾人は須く大局に眼を注がざるべからず、先に三高を破りて勢振へる鎮西の覇者、熊本健兒あり、東海の表に傲然たる向陵あり、北國男兒の鐵蹄に懸くべ

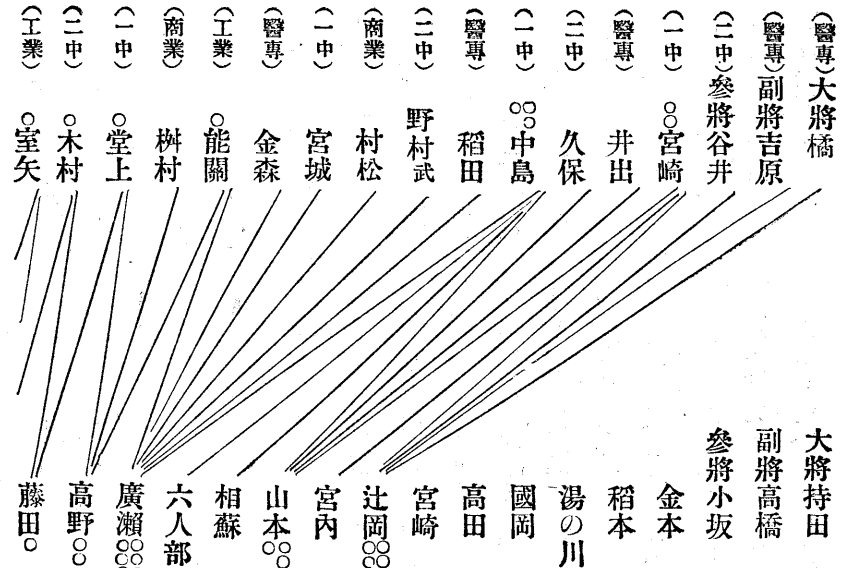


き地豈に獨り京洛の天地のみならんや。吾部固より四方經略の志あり、今秋更にまた多數の劍士を迎へ、軍容を整へて遠征を思ふ、然れども遠征は諒闇中の故を以て本年は遠慮せざるべからず、乃ち例年舉行の市内官縣立各學校聯合軍との紅白試合に於て僅かに脾肉の嘆をはらさんとす。

十一月二十三日午後一時より無聲堂上にて、聯合軍對吾校の剣道紅白試合を行ふ、互に鍛えし切先より火花を散らして戦ふ様、龍攘虎搏も雷ならず、げに血湧き肉躍る壯觀、傍に見る目も鮮かなり、吾軍勢破竹の如くにて敵軍を追ひつめ、遂に吾勇將辻岡、敵の大將を倒して茲に吾軍は大將を始め十人を余して大勝す。勝負の經過左の如し。

紅 聯合軍

白 本校



(一中) 清水
(商業) 勝見
(二中) 野村
(工業) 宮村
(商業) 中橋
山下
西條
守永
永井
西岡

先づ陣頭に現はれたるは紅軍の中橋と吾白軍の西岡となり、中橋黒皮絨の鎧着て太刀振りく寄せ来る。西岡白糸絨に身を固め是も秋水抜き放ちて渡りあふ、西岡奮然、敵の兩手を切り落して先陣の功名を擧ぐ、續いて出でくる宮村をば又も得意の小手に切り斃す、紅軍野村怒りて西岡の面を打ち咽喉を突く、續く永井を胸切りにすれば守永戦友の讐思ひ知れと許りに一刀深く敵の腹に突き立て哀れ野村は討たれたり。紅軍勝見、野村の讐を返せば吾軍西條憤然としていで勝見を斃す、西條勇を奮つて清水を斬り室矢に迫る、室矢悠然受け流し面小手をとる、

吾軍山下室矢を斃し木村と戦ふ、兩士技伯仲し、いづれを勝としらま弓暫し競り合ふ内、山下の運や拙なかりけむ遂に木村に名を成さしむ。木村吾軍藤田に討たれ、藤田紅軍堂上のために破らる、白軍高野出で、堂上榊村を倒して敵軍能關に迫る、能關や工業校の大將として數度戰場を往來せしもの、紅ひ燃ゆる緋絨しの鎧を着け槍を振るつて高野を突く、好敵ごさんなれと討つていでしは吾軍廣瀨なり、小兵なりと雖も往年一中校の大將として聯合軍の副將を勉めしものいかで容易く敵に敗らるべき、互に秘術を出して戦ふうち、廣瀨の小手を受け損じて能關倒る、續く金森、宮城共に枕を並べて相果つ。廣瀨既に三人を斃し膽氣愈々据はり、勇氣いや増す。されば商業校の大將村松も敢なく敗れ續く野村、稻田も或は面を或は胴を打たれて退く。紅軍中島廣瀨と渡りあふ、廣瀨いかに猛くとも

數度の激戦に身体疲れて遂に勝を讓る中島勢に乘じて六人部、相蘇を破る、吾勇將山本出で、敵の面を打ち更に又一撃目醒しとも目ざまし、久保いでしが小手を打たれて退き井出又小手に敗らる、一中校大將宮崎いで、山本を倒す、宮内代りて進みしが功成らずして退く、辻岡憤然宮崎の面を續け打つて之を斃す、腕は冴えたり、技は鮮やかなり、參將谷井をまた得意の面にて取る、副將吉原の胴を斬り更に紅軍大將橋に迫り息をもつかせず攻めたて斬りたて遂に首級を擧げ凱歌を奏す。茲に吾軍十人を餘して空前の勝利を博す。(因に昨年は七人を余して勝てり)

本日(因に昨年は七人を余して勝てり)の戦に辻岡、山本、廣瀨の三士を殊勳に推す。試合終つて後兩軍戰士に賞品を配付し茶菓を饗し談笑の間に散會せしは夕暮れなりき。

(RT生)

野球部報

北陸野球大會中止

我が北辰會野球部は毎年夏期休暇中に北陸地方の各中學を招待し北陸野球大會を催して居る。本年も休暇前には開催する豫定であつたが、時は正しく七月三十日一大悲報は郷里に在つた我を驚かしたのであつた。我々は今筆をとつて多く述ふるに忍びぬ。嗚呼我が明治天皇は遂に神去りましたのである。幾千萬の同胞が神に祈り佛に願ひ御惱御平癒を念じたも、空しくなつた。茲に於て我部は謹慎の誠意を表し北陸野球大會を中止する事としたのである。

練習マッチ(二、三年對一年)

諒闇中なのでどこからも試合を申込んで来ないし、こちらからも挑戦せず毎日練習のみをやつ

て居たが十一月二日二年三年の元老連と一年級の氣鋭の士との間にマッチを行つた。第一回に於て一年軍二点を得て氣大いになり四回目迄は二三年軍に一点も與へなかつたので、二三年軍、塚田プレートに立ち一年軍の猛打を封じつつ回復をはかり第五回僅かの隙を見て一点を奪ひ、次いで七回、八回に各一点を得。最後の九回目に續出したる失策に乗じ三点を加へ結局六對二で二三年の勝とはなつたが、はじめは見物一同一年軍の勝利を疑はなかつた。しかし流石に古いだけあつてうまく敵を失策せしめて之を敗かした所がえらい。一年軍守備は劣つて居たが打撃は遙かに上であつた。

當日のメンバーは

年部尾田根田羽路月田 得点 六 三振 五
 三 渡神塚山神丹淡秋岩 ヒット 三 四球 六
 二 1B 5SS LF 2B CF C P RF 盜 壘 九 失策 一

軍 波野谷村 田本中戸 得点 二 三振 一〇(秋三塚七)
 年菅廣米田原 吉山山瀬 ヒット 四 四球 四(秋四塚〇)
 一 P C 2B LF CF 3B LF RF SS 盜 壘 五 失策 九
 ダブルプレー 秋月一塚田一渡部
 二壘打 田村
 審判官 神谷君(醫専校選手)

試合略記

前キャプテン鐵腕投手千家君を送つた我々は皆等く不安の感に打たれざるを得なかつた、従つて本年度の新入生に多大の望を屬して居たのだ。それだから此の試合は非常なる興味を以て迎へられた。二三年軍先づ攻めて渡部四球に出で着々歩を進めたが、間一髪本壘前に刺され終る、一年軍代り攻め菅波四球を利し二壘、三壘を盗み甚だ有望だ、廣野投手ゴロに死したが、淡路どうした事かバツスボールしたので安々と一点を手にする。一年軍元氣百倍し、米谷二壘手の頭上を抜いて出で二壘を冒險す

る、田村鐵棍一振球は遠く左翼に飛び見事な二壘打となり米谷歡呼の中に生還した、二三年軍大いに警戒し原、吉田を凡死せしめてやつと安心した、之を回復すべく努力したが未だチャンスは來ない。遂に第五回渡部二死者の後を享け巧みに四球を利し二壘を奪ふ、次に立つた神尾のゴロが遊撃に向ふと見るや疾風の如く三壘に達し本壘に突入した。田村遊撃よりの球を止めたならばよかつたが之を落し神尾危い命を助ると共に渡部からうじて一点を占めた。戦は追々と佳境に入つた。一年軍も中々油断して居られない、何時取り返へされるかわからぬ、益々奮闘する。そこで二三年軍、塚田をプレートに立たしめ神田遊撃、丹羽二壘手となり秋月中堅に退いた。流石は塚田だ。すつかり敵方の打撃を封じてしまつた。その上二三年軍にはい、チャンスが來た、淡路遊撃の頭上を抜いて出で二壘の

冒險成功すると秋月之を犠牲球で三壘に送る、審判の勞をとられた。

危機せまると見た守備軍用心怠りなかつたが岩田との間のヒットエンドラン成功し淡路生還、同点となる。回数の進むに従ひ兩者の形勢が反對になつた。二三年ごしく打ち出した。一年軍は塚田に翻弄せられ打撃は當らないし、おまけに盛に打たれるので矢張未だ若い所がある失策に失策を重ね、遂に六對二と云ふ結果になつたのだ。一年軍菅波、廣野は今日あまり當らなかつた。打撃の成績は米谷、田村が一番よかつた。原、山本も強打者だと認められた。

對金澤一中試合

十一月十七日彼の挑戦に應じ我がグラウンドで戦つた。今學期始めての對校マツチなので随分と見物も多かつた。一中軍は前學期とはあまりメンバーに變りが無いが少し上手になつて居る。我軍は大抵シートが變つて居る。神尾君は

ので廣野も危い命を助かり、之は又いゝチャンスだと思つたが塚田の快打遠く飛ぶを改田又もや巧に取つて、其上、原を二壘に刺し止めた。此あたり一中の守備實に見事だつた。一中の打撃も少し振ひ擽猛兒吉村シングルヒットをかつとばした。しかし掛飛の投手ゴロにより二壘にフッスせられ辻は遊撃を破つて出たが鍛治の飛球を塚田手にして奇麗なダブルプレーは行はれた。

▲第六回四球で出た丹羽が二壘を冒險すると瀬戸又もや四球を頂戴する、山根の大飛球を改田受け損じたか直ぐ拾つて瀬戸を二壘に刺し殺した。丹羽此時に三壘に至る。山根安々と二壘をもらひ痛打を待つ。淡路の遊撃の頭上を越えたるタイムリーに丹羽生還し山根長驅本壘を陥れんとしたが無殘遊撃手の投じたる球により憤死するの止むなきに至つた。▲我軍大いに奮闘すると雖も彼も中々あなごり難い腕前だ、僅か三

点しか入れしめない。七回、八回にも廣野、田村のヒットがあつたが惜しい事は後援がつかず、彼も亦一点なりとも得てスコウクの耻を免れやうと力めたが我が堅壘を抜く事能はず、實に守備と守備との腕比べの觀があつた。一中の打撃、振はなかつたのは無理ない事だ。未だく

塚田の猛球を打ちこなす事は出来まい。

波	野	田	村	羽	戸	根	路	打	擊	數	二	九	三	振	四
本	菅	原	廣	塚	田	丹	瀬	山	淡	盜	壘	四	四	球	六
5	8	4	1	3	9	6	7	2		失	策	二			
山	田	合	木	田	村	飛	辻	治	打	擊	數	二	八	三	振
郡	改	河	三	西	吉	掛	鍛	鍛	盜	壘	三	四	球	三	
5	7	4	2	6	9	8	3	1	失	策	五				

ヒット	0	0	2	0	0	1	1	1							
得点	1	0	1	0	0	1	0	0	A						
得点	一	二	三	四	五	六	七	八	九						
ヒット	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0					
得点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
ヒット	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0					
得点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
ヒット	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0					
得点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
ヒット	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0					
得点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					
ヒット	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0					
得点	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0					

遠足部報

百八十六

第二回クロスカンツリーレース

十月二十九日午前九時第二回クロスカンツリーレース舉行

- 距離 十哩
- 出發點 校門
- 第一關門 石川郡上安原、入口
- 第二關門 石川郡鷺の森、佐奇神社鳥居前
- 決勝點 校内無聲堂前
- 賞 五番迄

參加團體 十三組、(五名一組)

成績順	組長	時分	秒
1	石端、北條、永井、井口、海老名	一、二四、	四、五
2	小林、小柴、佐藤、塚田、中村	一、三五、	三、
3	大西、越、山下、橋口、山根	一、四、	〇八、
4	安田、近江、清水、杉江、西村	一、元、	〇三、三
5	福島、高橋、近藤、松本、野上	一、三三、	元、

- 6 田島、持田、眞野、竹村、柴田 一、三、
 - 7 山田、富永、内藤、高田、廣野 一、三〇、
 - 8 杉若、湯川、吉川、石坂、吉仲 一、元、
 - 9 松井、藤井、下間、大久保、小林(康) 一、四、
 - 10 橋本、三上、塚田、山中、大久保 一、四三、
 - 11 栗原、本間、小野、氣賀、川瀬 一、五、
 - 12 蓮澤、日俣、寺田、深井、中田 一、五三、
 - 13 網野、阪本、西條、池添、岡 一、五三、
- 校長閣下より五組長に賞牌授與、訓辭あり。
無聲堂前に於て飴湯、各關門に於て葡萄酒を饗し參加者一同に記念の手拭を呈す。
當日寄宿舎にては特に風呂場を開放せられ入浴に供せらる。
午後零時半、散會。

編輯を終へて 井田生

○いつの間にか秋も暮れて、板葺の屋根に永雨する冬となつて仕舞つた。さらぬだにうら淋し

い夕暮を、ガランとした部屋に、ランプの灯を太くして、動かぬ筆を握つたまゝ、紙を睨んで居ると、たまらなく打濕りた、いやな感じに囚はれるものだ。

○黄色い茗荷の葉や、赤い南天の實が軽く揺れて、葉かげに切れ切れに鳴くこほろぎのあの疲れ切つた弱々しい、人に同情を求めらるやうな弔歌の一節を聞いて居ると、「幻滅の悲哀」が繰返されて、樹の根元に積まれた落葉の塊の中に、足の折れた松蟲や、病んだこほろぎなんか、寒い風に、世のはかなさと變遷をかこつては居まいかどさへ思はれてならない。

枕邊に並んだ薬瓶や籠に盛る林檎の皮を眺めながら、ガラス窓に入る弱々しい夕日の斜影が白いシートの上にあざす光りに眼を移すと、つくづく身の頼りなさを思はれて、いつも眼を閉ぢて仕舞ふ。

○雑誌編輯の責任を受けたことや、締切日に一日ノ遠ざかつてゆくことを思ふて、私は非常に辛い思ひをした。學校へは成るだけ少し無理しても、幾分の身体の時々は出て居なければ、雑乎と復習と豫習を済すと、身体は過激な労働をしたやうに疲れ切つて仕舞つて、古巢にめぐり込むべく餘儀なくされて仕舞ふのだつた。

○病ひはほんちに親しむ友ではない病床に馴れない私は、重い頭を無理にもたげ、熱のある肌

○体裁や編輯に就いて、或ひは完成しようと思

に手を當てた時、健康な人が羨ましくて泣きたくなつた位だ。もう癒りかけて居るんだと思つても、矢張り幾分の不安と心苦しさに襲はれて、くづく残念に思ふ。淺學短才寡聞な私が、斯ん

な大任に當り得るかは、勿論疑問に屬して居るは何うしても信じて居ることが出来なかつたほど、けれど、私は出来るだけ努力して、先當事者の嘘ぢやあるまいかと幾度か聞き訊いた位に、驚歩に伍して行きたい許りに、種々計畫もしたけいて仕舞つた。肥大長軀を提げて、演壇に上られど、今となつては、小聲で、も斯んな事を云れた時の印象、無聲堂に或はグラウンドに人のふ元氣はない。來學期の奮闘を夢みて、學友諸君の叱聲を快く受けやうと思ふばかりである。する機會を永久に私等は失つたのだ、先年北辰君の叱聲を快く受けやうと思ふばかりである。會雜誌や超然に執られた筆の跡を凝視しながら「とか」「一部の人の雜誌ぢやない」とか云ふ叫びを、何處かで一寸小耳に挿んだ様に覺えて居悼記事を書く積りだつたが、詳しい消息もわかますから云ひますが、此れは委員に小言を云ふらず、在京の友からの通信を待つたがそれも間べきものでなくして、さういふ事を云ふ口で、委に合はずして、遺憾ながら書く事が出来なかつた。淋しいく寺の廣庭の、冷たい土の下に永眠にせられたらよいでせう。雜誌の編輯なんてもしたまふ君の姿を思ふと、私はたまらなく追憶のは、さう議論ばかりして居ても、完成されると哀悼の念に驅られて、まして此頃のうすら淋ものぢやあるまいと思ふ。

●在東京法科大學の柴野操一君が不歸の客となられた。渡部生一君からその報知を得た時、私●別に新がるんぢやないが、強いて陳腐舊套を

固持する要もあるまいと思つて、少し許り編輯目の様に光る黒い森の灯、私は旅から旅へ漂泊の体裁を變へた。濁つた頭の中にも、まだくして行く少年の顔を想像しながら斯んな文句を何とかしたいと絶えず思つて居るんだから、種思ひだしたことがあつた。

●今學期は私等の氣が利かなかつた罪だが。次居てはならない。かりそめの空想、はかなき號には諸先生に願つて、何か書いて頂かうと思憧憬に釣られて居てはならない。飽くまで中ふ。委員の方でも大分畫策はあるらしいが、そ心の要求に耳かたむけ、能ふかぎりの勇氣とれよりも私等は諸君の原稿を何れほど歡待する努力と熱情を以て、自我の活動を勧めなければいけない。私が此間から書きかけて居て、病ばならぬ……。

○霞が飛んで、氷雨が來て、雪が降つた。明々ひのために筆を捨てた評論「髑髏の悲鳴」創作と輝く日の光りにも頼りない北國の色が漂ふて「河岸に立つた少年」及び「巡禮の女」といふ詩と輝く日の光りにも頼りない北國の色が漂ふても、次號に載せて、諸兄の批評を乞ふかも知れ居る。見上げる空には、いつも雪ふくむらしき雲ない。

○心づくしの初冬かな。夜更けて獨り犀川の河諸君の温かい手に置かれる時、我れくは既に岸に立つと、流石に欺かれ得ない寂しさをおぼ雪に包まれて居るだらうと思ふ。終りに校友七える。灰色の雲に被られた月の淡らあかり、呪百の士の健康を祈りて此の稿を擱筆する。

咀を唱ふ水の響き、柳を吹く冷たい風、惡魔の

明治四十四年度北辰會費決算書

(△印ハ朱書)

科 目	豫算額	決算額	流用増額	流用減額	殘額
第一款 經常收入	二,三八,〇〇〇	二,三一,三〇〇			三六,七〇〇
第一項 特別會員寄付	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇			
第二項 通常會員會費	一,九〇,〇〇〇	一,八二,〇〇〇			二八,〇〇〇
第三項 入會金	二九,〇〇〇	一七,五〇〇			一,五〇〇
第四項 預金 利子	四九,〇〇〇	五,八三〇			二,八三〇
收入合計	二,三八,〇〇〇	二,三六,三三〇			二六,六七〇
第一款 經常歳出	一,九七,〇〇〇	一,八九,四八〇	八,九〇〇	八,九〇〇	七六,五〇〇
第一項 講演部費	四九,〇〇〇	四五,七〇〇			三,二九〇
第二項 語學部費	八,〇〇〇				七,九〇〇
第三項 音樂部費	二九,〇〇〇	二八,二〇〇			八〇〇
第四項 雜誌部費	四五,〇〇〇	三五,七六〇		八六〇	六〇,三六〇
第五項 弓術部費	四四,〇〇〇	四四,八六〇	八六〇		
第六項 劍道部費	一五一,〇〇〇	一四九,四七〇			一,五三〇
第七項 柔道部費	一九四,〇〇〇	一九四,〇九〇	九〇		

第八項 野球部費	二九,〇〇〇	二九,七八〇			三〇〇
第九項 庭球部費	三五,〇〇〇	二四,五三〇			四七〇
第十項 遠足部費	六八,〇〇〇	七五,八四〇	七,八四〇		
第十一項 漕艇部費	二九,〇〇〇	一六九,二〇〇	二〇〇		
第十二項 春季運動會費	一三,〇〇〇	一四,二六六			六,七〇〇
第十三項 秋季運動會費	一四,〇〇〇	一七,三二〇			七九〇
第十四項 會務費	一四,〇〇〇	一一,七三〇		二,二六〇	
第二款 豫備費	一三,〇〇〇				一三,〇〇〇
第三款 端艇新造基金	一三〇,〇〇〇	一三〇,〇〇〇			
第四款 臨時支出	一五五,〇〇〇	一五四,五二〇			一〇,四九〇
第一項 野球部負債償却	二八,五〇〇	二八,〇四〇			四六〇
第二項 ネット柱建設費	六,〇〇〇	三,七〇〇			二,三〇〇
第三項 庭球用器具費	一一,〇〇〇	七,四五〇			三,五五〇
第四項 コート修繕	一九,五〇〇	一九,〇一〇			四九〇
支出合計	二,三八,〇〇〇	二,一七,六九〇	八,九〇〇	八,九〇〇	二二,三三〇

寄贈雜誌
 六條學報 每號
 佛教大學壬寅會
 校友會雜誌 每號
 龍南會雜誌 一四六號
 第六高等學校同會
 第五高等學校同會

尙志會雜誌	九四號	第二高等學校同會	一橋會雜誌	每號	東京高商校一橋會
學友會雜誌	二六號	石川縣師範校同會	校友會雜誌	五六號	開城中學校校友會
學友會雜誌	二四號	七高造士館學友會	櫻桂會誌	二號	關東都督中學同會
嶽水會雜誌	五二號	第三高等學校同會	學友會雜誌	二一號	新發田中學校同會
十全會雜誌	每號	金澤醫專校十全會	和同會雜誌	五一號	長岡中學校和同會
校友會々報	每號	盛岡高等農林同會	六稜	三九號	北野中學校々友會
寄宿舍誌	三號	京都帝大寄宿舍	校友會雜誌	一七號	石川縣立工業同會
輔仁會雜誌	八七號	學習院 輔仁會	矯々會雜誌	一〇一號	福岡中學明善同會
水曜會誌	一〇號	京都帝大理工科同會	學友會雜誌	二五號	札幌中學學校學友會
校友會雜誌	二六號	京北中學校校友會	校友會雜誌	六號	第八高等學校同會
校友會々誌	一九號	廣島高師校々友會	校友會雜誌	每號	東京高師校々友會
校友會雜誌	一八號	大成中學校々友會	責善會誌	一號	明治專門學校同會
校友會雜誌	四六號	三重第一中學同會	麋城	三二號	大垣中學校校友會
學友會報	每號	山口高商校學友會	桃陰	四六號	天王寺中學校校友會
桐陰會雜誌	五〇號	東京高師附中同會	學友會雜誌	九號	京都第二中學同會
學友會報	每號	神戸高商校學友會	校友會雜誌	四九號	金澤第一中學同會
校友會雜誌	三九號	千葉中學校々友會	校友會雜誌	一六號	彦根中學校々友會
華陽	五三號	岐阜中學校華陽會	學友會雜誌	二〇號	東京第三中學同會
文章號		松江中學校校友會	球陽	四八號	沖繩第一中學校友會

投書心得

- 一 投書は本會原稿用紙に限る
- 一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せず
- 一 雜誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし
- 一 如何なる種類の投稿にても宜しされど或は政治を論じ或は徳義に背くものは一切掲載せず

大正元年十二月二十一日印刷
 大正元年十二月二十四日發行

(非賣品)

編輯兼發行者 吉村政行
 印刷者 生沼倍男
 印刷所 明治印刷株式會社
 發行所 第四高等學校北辰會

石川縣金澤市早道町五十六番地
 同縣同市穴水町二番丁廿九番地
 同縣同市高岡町九十番地

